

和歌山市内遺跡発掘調査概報

— 平成16年度 —

鳴神Ⅳ遺跡第10次調査・範囲確認調査

神前遺跡第4次確認調査

井辺遺跡第5次確認調査

木ノ本Ⅰ遺跡確認調査

直川地区試掘調査

弘西地区試掘調査

2006

和歌山市教育委員会

序 文

和歌山市は、紀伊山地を源に西流して紀伊水道に達する紀ノ川が形成した肥沃な和歌山平野の河口部に位置しています。

紀ノ川を中心として古代より文化の栄えた場所であり、全国的にも著名な太田・黒田遺跡や岩橋千塚古墳群をはじめとして、およそ400ヶ所にもものぼる遺跡が確認されています。

それらの遺跡は、私達の祖先の残した貴重な文化遺産ではありますが、近年は遺跡内での開発行為が盛んになり、遺跡が壊滅の危機にさらされることも少なくありません。

そうした開発に対処するため、平成7年度から国庫補助金・県費補助金を得て、主に個人による開発を対象にした市内遺跡の発掘調査等の事業を実施してまいりました。

本書には、平成16年度に実施した6ヶ所の発掘調査の成果を収めています。ここに報告する調査概要が活用され、地域の歴史解明に少しでも寄与されれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にあたりご指導・ご協力いただきました関係者各位及び土地所有者の皆様に深く感謝いたします。

平成18年3月31日

和歌山市教育委員会

教育長 空 光 昭

例 言

- 1 本書は、平成16年度国庫補助事業として計画し、財団法人和歌山市文化体育振興事業団に事業の委託を行った埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
- 2 調査対象経費の総額は520万円であり、国1/2、県1/8、市3/8の補助率である。
- 3 本年度の調査対象は下記のとおりである。

事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当
鳴神IV遺跡第10次調査・ 範囲確認調査(第11次)	和歌山市禰宜1542番地	平成16年5月6日～平成16年5月21日	54㎡	川口修実
神前遺跡第4次確認調査	和歌山市神前516・524番地他	平成16年12月20日～平成16年12月22日	50㎡	井馬好英
井辺遺跡第5次確認調査	和歌山市神前121-1・2番地	平成17年1月19日～平成17年1月27日	140㎡	北野隆亮
木ノ本I遺跡確認調査	和歌山市西庄30・31番地	平成17年1月25日～平成17年1月27日	60㎡	井馬好英
直川地区埋蔵文化財試掘調査	和歌山市直川160番地他	平成17年1月31日～平成17年2月25日	1841㎡	北野隆亮・ 井馬好英・ 藤藪勝則
弘西地区埋蔵文化財試掘調査	和歌山市弘西945番地他	平成17年2月7日～平成17年2月18日	160㎡	益田雅司
平成16年度出土遺物整理事業		平成17年2月14日～平成17年2月28日		奥村 薫

- 4 発掘調査に係わる事務局は下記のとおりである。

【和歌山市教育委員会】

教育長 山口喜一郎 (～平成16年7月3日)
空 光昭 (平成16年7月4日～)
文化振興課長 寺田 哲
文化財班長 高橋克伸
学芸員 益田雅司

【財団法人和歌山市文化体育振興事業団】

理事長 宇治田克夫
事務局長 土岐 朗
総務課長 久保雅英
総務課班長 小栗孝昭
学芸員 北野隆亮(発掘調査担当)
学芸員 井馬好英(発掘調査担当)
学芸員 藤藪勝則(発掘調査担当)
学芸員 川口修実(発掘調査担当)
(～平成16年9月30日)
事務主任 山口美二(調査事務担当)

- 5 報告書刊行に係わる事務局は下記のとおりである。

【和歌山市教育委員会】

教育長 空 光昭
文化振興課長 深田拓二
文化財班長 新家利定
学芸員 益田雅司

【財団法人和歌山市文化体育振興事業団】

理事長 井邊祐二
事務局長 橋本義則
総務課長 池田昌弘
総務課班長 小栗孝昭
学芸員 北野隆亮(報告書担当)
学芸員 井馬好英(報告書担当)

- 6 本書のうち発掘調査の概要部分についてはそれぞれの調査担当者が担当した他、「鳴神IV遺跡第10次・範囲確認調査 6.遺物」については井馬好英が分担した。また本書の編集については井馬が、構成については益田雅司がそれぞれ行った。
- 7 写真図版の遺物に付した数字番号は実測図番号に対応する。
- 8 出土遺物整理事業については、太田・黒田遺跡第54・55次調査出土遺物のうち、未洗浄遺物コンテナ28箱分の洗浄作業を対象として実施した。
- 9 鳴神IV遺跡第10次調査において出土した人骨及び鳴神IV遺跡第10次調査・範囲確認調査において出土した獣骨等の鑑定は、大阪市立大学大学院医学研究科器官構築形態学安部みき子氏のご協力を得、現在整理作業中である。鑑定内容については、別に報告する予定である。
- 10 鳴神IV遺跡第10次調査及び範囲確認調査において出土した縄文土器及び石器については、中村貞史氏にご教示いただいた。記して感謝の意を表します。
- 11 本書の作成にあたり、関係機関等の方々に有益な御教示・御指導を賜ったことに感謝の意を表します。

本文目次

鳴神IV遺跡第10次調査・範囲確認調査

1. 調査の契機と経過	1
2. 位置と環境	2
3. 既往の調査	4
4. 調査の方法と経過	6
(1) 調査の方法	6
(2) 調査の概要	6
5. 遺構	7
(1) 第10次調査	7
(2) 範囲確認調査	13
6. 遺物	15
(1) 縄文土器	15
(2) 石器・石製品	21
(3) 自然遺物	24
7. まとめ	25

神前遺跡第4次確認調査

1. 調査の契機と経過	27
2. 位置と環境	28
3. 調査の方法と経過	29
(1) 調査の方法	29
(2) 調査の概要	29
4. 遺構	30
5. 遺物	30
6. まとめ	30

井辺遺跡第5次確認調査

1. 調査の契機と経過	31
2. 位置と環境	32
3. 調査の方法と経過	32
(1) 調査の方法	32
(2) 調査の概要	34
4. 遺構	34
(1) 古墳時代の遺構	34
(2) 鎌倉時代の遺構	34
5. 遺物	36
6. まとめ	36

木ノ本Ⅰ遺跡確認調査

1. 調査の契機と経過	37
2. 位置と環境	38
3. 調査の方法と経過	39
(1) 調査の方法	39
(2) 調査の概要	40
4. 遺構	41
5. 遺物	41
6. まとめ	42

直川地区埋蔵文化財試掘調査

1. 調査の契機と経過	43
2. 位置と環境	44
3. 調査の方法と経過	45
(1) 調査の方法	45
(2) 調査の概要	45
4. 遺構	48
(1) 第1区検出の遺構	48
(2) 第2・3区検出の遺構	49
5. 遺物	50
6. まとめ	51

弘西地区埋蔵文化財試掘調査

1. 調査の契機と経過	53
2. 位置と環境	53
3. 調査の方法と経過	54
(1) 調査の方法	54
(2) 調査の概要	55
4. 遺構	56
(1) 第1区	56
(2) 第2区	56
5. 遺物	57
(1) 第8層出土土器	57
(2) 自然遺物	57
6. まとめ	58
報告書抄録	59

図版目次

- 図版 1 鳴神Ⅳ遺跡(第10次調査) 調査前の状況(北西から)、貝層検出状況(南から)
- 図版 2 鳴神Ⅳ遺跡(第10次調査) 貝層検出状況(北から)、SX-1(南から)
- 図版 3 鳴神Ⅳ遺跡(第10次調査) SX-1(南東から)、SX-1(東から)
- 図版 4 鳴神Ⅳ遺跡(第10次調査) SX-1(北から)、SX-1人骨細部(西から)
- 図版 5 鳴神Ⅳ遺跡(第10次調査) SX-1・2(西から)、SX-1・2(東から)
- 図版 6 鳴神Ⅳ遺跡(第10次調査) SX-2(西から)、SX-2(南から)
- 図版 7 鳴神Ⅳ遺跡(第10次調査) SX-2(南西から)、SX-2人骨細部(西から)
- 図版 8 鳴神Ⅳ遺跡(第10次調査) SX-3(東から)、SX-3(南西から)
- 図版 9 鳴神Ⅳ遺跡(第10次調査) SX-3(北西から)、SX-3人骨細部(南西から)
- 図版10 鳴神Ⅳ遺跡(第10次調査) 全景(北から)、全景(南から)
- 図版11 鳴神Ⅳ遺跡(第10次調査) 西壁土層堆積状況(東から)、西壁貝層堆積状況(東から)
- 図版12 鳴神Ⅳ遺跡(第10次調査) 南壁土層堆積状況(北から)、南壁貝層堆積状況(北から)
- 図版13 鳴神Ⅳ遺跡(範囲確認調査) 貝層検出状況(東から)、貝層検出状況(北から)
- 図版14 鳴神Ⅳ遺跡(範囲確認調査) 全景(東から)、全景(西から)
- 図版15 鳴神Ⅳ遺跡(範囲確認調査) 調査区東端部南壁土層堆積状況(北から)、
調査区東端部南壁貝層堆積状況(北から)
- 図版16 鳴神Ⅳ遺跡(範囲確認調査) 調査区中央部南壁貝層堆積状況(北から)、
調査区西端部南壁土層堆積状況(北から)
- 図版17 鳴神Ⅳ遺跡(範囲確認調査) 調査区西端部南壁貝層堆積状況(北から)、
東壁土層堆積状況(西から)
- 図版18 鳴神Ⅳ遺跡 縄文土器
- 図版19 鳴神Ⅳ遺跡 縄文土器
- 図版20 鳴神Ⅳ遺跡 縄文土器
- 図版21 鳴神Ⅳ遺跡 石器・石製品
- 図版22 鳴神Ⅳ遺跡 石器、自然遺物
- 図版23 神前遺跡 調査前の状況(西から)、調査区全景(北西から)、調査区全景(南東から)
- 図版24 神前遺跡 南東へ9m付近北東壁土層堆積状況(南西から)、
南東へ25m付近北東壁土層堆積状況(南西から)
- 図版25 井辺遺跡 調査前の状況(東から)、調査前の状況(西から)
- 図版26 井辺遺跡 調査区全景(東から)、調査区全景(西から)
- 図版27 井辺遺跡 第3層上面検出SD-1・2(東から)、第3層上面検出SK-2・3(南から)
- 図版28 井辺遺跡 W37m付近北壁土層堆積状況(南から)、出土遺物
- 図版29 木ノ本Ⅰ遺跡 調査前の状況(南から)、調査地近景(北西から)
- 図版30 木ノ本Ⅰ遺跡 調査区全景(北から)、調査区全景(南から)、
第5層上面検出の小溝群(南から)

- 図版31 木ノ本Ⅰ遺跡 S3m付近東壁土層堆積状況(西から)、
S29m付近東壁土層堆積状況(西から)
- 図版32 直川地区 第1・2区調査前の状況(南西から)、第3区調査前の状況(南東から)
- 図版33 直川地区 1-1区全景(東から)、1-2区全景(東から)、1-3区全景(北から)、
1-3区全景(南から)
- 図版34 直川地区 1-4区全景(北から)、1-4区全景(南から)、1-5区全景(北から)、
1-5区全景(南から)
- 図版35 直川地区 1-2区SK-1検出状況(南から)、1-4区SD-1検出状況(西から)
- 図版36 直川地区 1-2区東端部北壁土層堆積状況(南から)、
1-4区中央部東壁土層堆積状況(西から)
- 図版37 直川地区 2-1~3区全景(東から)、2-2区全景(東から)、2-3区全景(西から)
- 図版38 直川地区 2-4区全景(南から)、2-5区全景(北から)、2-6区全景(北から)、
2-7区全景(北から)
- 図版39 直川地区 2-1区東端部北壁土層堆積状況(南から)、
2-3区中央部北壁土層堆積状況(南から)
- 図版40 直川地区 2-5区南端部東壁土層堆積状況(西から)、
2-6区北端部東壁土層堆積状況(西から)
- 図版41 直川地区 3-1~5区全景(東から)、3-1~5区全景(西から)
- 図版42 直川地区 3-2区全景(東から)、3-3区全景(東から)、3-4区全景(東から)、
3-5区全景(東から)
- 図版43 直川地区 3-6区全景(南から)、3-7区全景(北から)、3-8区全景(北から)、
3-9区全景(南から)
- 図版44 直川地区 3-2区東端部北壁土層堆積状況(南から)、
3-5区東端部北壁土層堆積状況(南から)
- 図版45 直川地区 3-6区中央部東壁土層堆積状況(西から)、
3-8区北端部東壁土層堆積状況(西から)
- 図版46 直川地区 2-7区噴砂検出状況(北東から)、3-4区噴砂検出状況(南東から)
- 図版47 直川地区 出土遺物
- 図版48 弘西地区 調査前の状況(北から)、調査前の状況(南から)
- 図版49 弘西地区 第1区全景(北から)、第1区全景(南から)、第2区全景(北から)、
第2区全景(南から)
- 図版50 弘西地区 第2区SD-1検出状況(東から)、第2区SD-1土層堆積状況(東から)
- 図版51 弘西地区 第1区S28m付近西壁土層堆積状況(東から)、
第2区S54m付近西壁土層堆積状況(東から)
- 図版52 弘西地区 第2区S80m付近西壁土層堆積状況(東から)、出土遺物

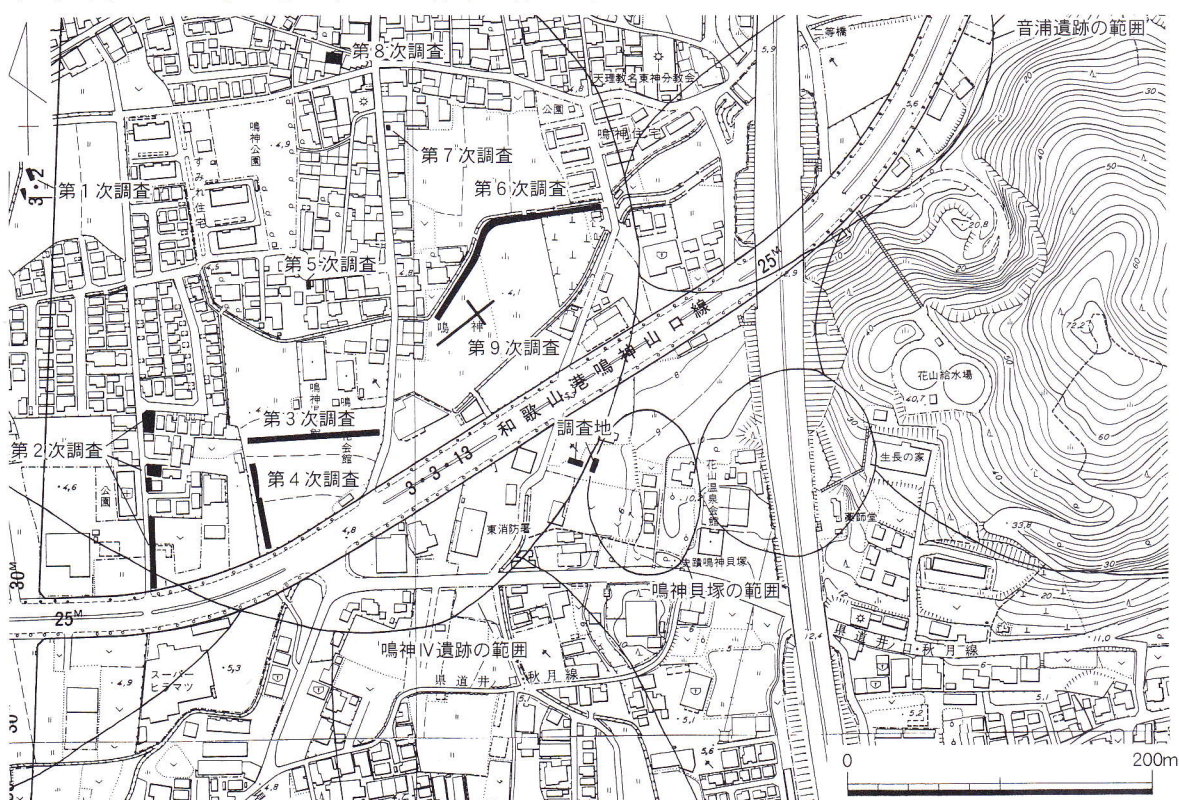
鳴神Ⅳ遺跡 第10次調査・範囲確認調査

1. 調査の契機と経過

鳴神IV遺跡は紀ノ川の南岸、岩橋千塚古墳群の一支群である花山古墳群の西側に位置する遺跡である。鳴神IV遺跡の調査は今次で10度を数えるが、既往の調査では古墳時代中期から後期の堅穴住居、掘立柱建物、柵列、溝、土坑や古墳時代後期の方墳、奈良時代の土坑、中世の溝・土坑、近世の溝などが検出されており、古墳時代を中心とした複合遺跡であることが明らかとなっている。

今回の調査は、鳴神568-1番地において店舗建設が計画され、これに伴う和歌山市教育委員会による事前の試掘調査の結果、1箇所において鳴神貝塚の縁辺部に相当する貝層が確認されたため、第10次調査として本調査を実施することになった。今回の調査地点は、遺跡の推定範囲の西端部から鳴神貝塚にまたがる地点にあたる（第1図）。

調査は建設工事の工期や予算の都合から、工事計画範囲の深掘部分の内、試掘調査で貝層が確認されたグリッドの東隣部分を調査対象として実施した。調査は和歌山市教育委員会の指導のもと、財団法人和歌山市文化体育振興事業団が株式会社東和建設から委託を受けて行った。また、第10次調査の調査期間中に、和歌山県教育委員会により国庫補助金を用いて工事計画範囲の他の深掘部分の調査を実施するよう指導が行われたため、和歌山市教育委員会が事業者と協議し、調査期間の延長と調査中の作業協力を求め、国庫補助金を得て範囲確認調査として実施することとなった。2箇所の合計調査面積は54㎡を測る。よって、第10次調査・範囲確認調査2箇所における現地調査の期間は、平成16年5月6日から5月21日までの期間を要した。また第10次調査において、縄文時代の貝層から埋葬人骨が遺存状態の良好な形で検出されたため、5月13・18日に大阪市立大学安部みき子氏立会いのもと、人骨の取り上げ作業を行った。



第1図 調査位置図

2. 位置と環境

和歌山市は和歌山県の北西端に位置し、北は和泉山脈を境に大阪府泉南郡岬町・阪南市に、東は和歌山県那賀郡岩出町・紀の川市貴志川町に、南は海南市に接し、西は紀伊水道に面する。本市は和泉山脈の南裾に沿って西流し、紀伊水道に流れ込む紀ノ川により形成された和歌山平野を中心に位置する。鳴神Ⅳ遺跡（1）は、紀ノ川南岸の微高地上に立地する遺跡である。

次に周辺の遺跡について概観すると、紀ノ川南岸における旧石器時代の遺跡としては和歌山市と紀の川市貴志川町の境にひろがる大池遺跡があげられ、ナイフ形石器や角錐状石器、尖頭器など多量の石器類が発見されており、当該期においては県下でも主要な遺跡の一つとして知られている。

縄文時代の遺跡としては、岩橋山塊の周辺部に鳴神貝塚（2）や岡崎縄文遺跡（10）、瀬宜貝塚、吉礼貝塚があり、鳴神貝塚は近畿地方で最初に発見された貝塚として著名な遺跡である。瀬宜貝塚は発掘調査により前期を主体とした南北2本の貝層が平行して存在することが明らかとなっており、貝層に挟まれた空間に集落の中心があると考えられている。吉礼貝塚からは、縄文時代前期前半から後期にわたる遺物が出土しており、紀ノ川流域における縄文時代の遺跡では最古のものである。これら低丘陵に位置する遺跡に対し、岡崎縄文遺跡はやや低地部に立地する遺跡として注目され、後・晩期の遺物が出土している。これらの貝塚から出土する貝類は、海水系のもが多数見られることから、海岸線が岩橋山塊西側にまで及んでいたことを示している。

弥生時代の遺跡としては、当遺跡周辺の紀ノ川南岸平野部に鳴神Ⅳ遺跡、秋月遺跡（17）、太田・黒田遺跡（18）などの遺跡が知られる。太田・黒田遺跡は、前期後半から中期を中心として営まれた県内最大規模の集落跡で、近年の調査によって2重の環濠が検出され、前期段階では環濠集落であることが確認された。出土遺物には鹿が描かれた絵画土器や銅鐸、直柄広鋤や一木平鋤など注目される遺物が多くみられる。また秋月遺跡においても、近年の遺跡東端部における調査によって前期の自然流路や石器製作土坑などが検出され、前期段階における集落の形成が確認されている。

古墳時代の集落も引き続き、平野部を中心に立地しており、大日山Ⅰ遺跡（13）、友田町遺跡（20）、鳴神遺跡群からは多くの遺構・遺物が発見されている。岩橋山塊西部の音浦遺跡（3）、鳴神Ⅱ遺跡（14）、鳴神Ⅴ遺跡（15）からは現代の用水路と流路方向を同じくする溝が発見されている。その中には旧河道を再掘削しているものもあり、この地一帯が水路として重要な地域であったことが知られる。またこれらの遺跡からは、滑石製模造品や手捏ね土器等の祭祀遺物が発見されており、河川や用水に関わる祭祀が行われたとも考えられている。古墳の築造は、前期末には花山古墳群（4）が造営されるが、平野部に位置する秋月遺跡、鳴神Ⅴ遺跡でも庄内式新段階から布留式古段階にかけての前方後円墳、方墳が集落の近傍で検出されており、それに先行するものとして注目できる。中期後半～後期には岩橋山塊の丘陵上に岩橋千塚古墳群（5）が古墳築造の盛期を迎え、その周辺には山東古墳群（6）、寺内古墳群（8）など後期の群集墳が密集する。また、生産遺跡としては吉礼砂羅谷窯跡（7）があり、奈良時代まで続く窯跡群である。

奈良時代では、太田・黒田遺跡、秋月遺跡、大日山Ⅰ遺跡が知られる。太田・黒田遺跡では、建物遺構は未確認ながら、大型の井戸が2基検出されている。井戸底からは斎串、あるいは和同開珎42枚・万年通宝4枚などがまとまって出土しており、井戸祭祀に関わるものとして注目される。そ

の他奈良時代前期から後期の瓦、円面硯等が出土していて、郡衙跡とも推定されている。

平安時代には、秋月遺跡にも神宮寺・貞福寺の存在が指摘でき、当該期の瓦が多量に出土しているが、明確な遺構は確認されていない。鳴神Ⅴ遺跡では段構成土と呼ばれる土壇状遺構から、平安時代中期の多量の遺物が出土しており、特に緑釉陶器、灰釉陶器、初期貿易陶磁器、陶硯、土馬などの特記すべき遺物が出土している。

鎌倉時代には、鳴神Ⅴ遺跡において溝、河道、石組井戸群、土坑墓などが検出されているが、前代までに比して大要が明らかな遺跡は少ない。

室町時代には、太田・黒田遺跡において大型の濠状遺構、溝が確認されている。濠状遺構は、幅約10m、深さ3m以上、長さは約130m分が確認されていて、ともに16世紀後半に埋められている。これらは廃絶時期が共通することから、雑賀衆の太田城跡(19)に関わるものと推定される。

江戸時代の遺跡としては和歌山城跡(21)とその城下町があげられ、鷺ノ森遺跡(22)は三の丸北側の町屋に相当し、江戸時代の遺構面が3面以上検出され、多くの遺構・遺物が出土している。



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	鳴神Ⅳ遺跡	弥生～江戸	7	吉礼砂羅谷窯跡	古墳～奈良	13	大日山Ⅰ遺跡	古墳～奈良	19	太田城跡	安土・桃山
2	鳴神貝塚	縄文～弥生	8	寺内古墳群	古墳	14	鳴神Ⅱ遺跡	弥生～平安	20	友田町遺跡	弥生～平安
3	音浦遺跡	古墳	9	井辺前山古墳群	古墳	15	鳴神Ⅴ遺跡	弥生～平安	21	和歌山城跡	江戸
4	花山古墳群	古墳	10	岡崎縄文遺跡	縄文	16	鳴神Ⅵ遺跡	弥生～江戸	22	鷺ノ森遺跡	弥生～江戸
5	岩橋千塚古墳群	古墳	11	神前遺跡	弥生～江戸	17	秋月遺跡	弥生～江戸	23	田屋遺跡	弥生～江戸
6	山東古墳群	古墳	12	井辺遺跡	弥生	18	太田・黒田遺跡	弥生～江戸	24	西田井遺跡	弥生～室町

第2図 鳴神Ⅳ遺跡周辺の遺跡分布図

3. 既往の調査

今回の調査は遺跡地図の範囲上、鳴神IV遺跡の調査として実施しているが、検出遺構や貝層の調査を主体とした調査内容からは鳴神貝塚の調査として位置づけられる。鳴神貝塚は花山丘陵の西側に張り出した斜面上に位置する遺跡であり、国指定史跡の範囲を中心に南北110m、東西80mが遺跡の範囲となっている。今回の調査地点は遺跡の推定範囲の西端部から鳴神IV遺跡にまたがる地点にあたる（第3図）。

鳴神貝塚の存在が知られるようになったのは、1895（明治28）年に下村武一郎氏によって現地踏査が行われ、石鏃や獣骨、貝類が採集され、東京人類学雑誌に紹介されたことによる。これにより、関東だけではなく、近畿地方においても貝塚遺跡が存在することが初めて確認された。

その後、鳥居龍蔵氏は1905（明治38）年に現地を訪問し、試掘調査を行っている。この調査の詳細については不明であるが、縄文時代中期とみられる土器類や石斧、石鏃などが検出されている。

1931（昭和6）年には国の史跡に指定され、鳴神貝塚は近畿地方では数少ない貝塚の一つとして研究者の間では注目される遺跡となったが、採集された遺物が分割収蔵されていることや、詳しい報告がなされていないことから、その実体については充分明らかにされていなかった。以下では、遺跡の一端が明らかにされた史跡指定後における既往の調査について略述する。

1952年調査 1952年には史跡指定範囲の中央部において、家屋溝の工事中に縄文時代晩期の埋葬人骨が1体発見され、羯磨正信氏によって調査が行われた。この人骨は地表下50cmの混貝土層中において、伸展葬で葬られており、頭骨の左側に猿の橈骨で作られた耳栓を装着していた。人骨は上下門歯を抜歯した18才前後の女性とみられ、シャーマンの可能性が考えられている。

1966・67年調査 1966年には遺跡の西側斜面裾部においてボーリング及び5箇所の試掘調査が、1967年には遺跡の南西部において発掘調査が和歌山県教育委員会によって実施された。この調査では、縄文時代晩期の遺物包含層及び埋没貝層が東から西に向かって傾斜する状況が確認され、広い範囲に分布していることが明らかとなり、遺跡の西限に近い様相であることが確認された。検出された遺構としては、貝層中に掘り込まれた縄文時代晩期の土器棺とみられるものや、弥生時代前期後半の壺が一括出土した縄文時代晩期の包含層を掘り込むピットが検出されている。縄文時代の出土遺物については、中期から晩期の土器類、石斧・石鏃・丸玉などの石器・石製品、骨角器、自然遺物としてはエイ・クロダイ・マダイなどの魚骨、イノシシ・ニホンジカ・ツキノワグマ・ニホンイヌ・モグラなどの動物骨、マガキ・ハマグリ・ハイガイ・ヤマトシジミ・シオフキ・アカニシ・サザエなどの貝類がある。

1970年調査 遺跡の南東部において、県道（秋月－鳴神線）建設に先立ち行われた発掘調査である。この調査ではハマグリ・ハイガイを主体とした貝層が確認されたが、貝層中からは古墳時代の土師器が出土し、ブロック状になった堆積状況から二次的移動を受けているものと考えられている。遺構は岩盤上において2基のピットが検出されているが、その内の1基からは土師器の高杯と甕が並んだ状態で出土している。縄文時代の出土遺物の内、土器類については中期と晩期を主体とするが、前期に遡るものが1点出土しており、遺跡の初源を示すものとして注目される。

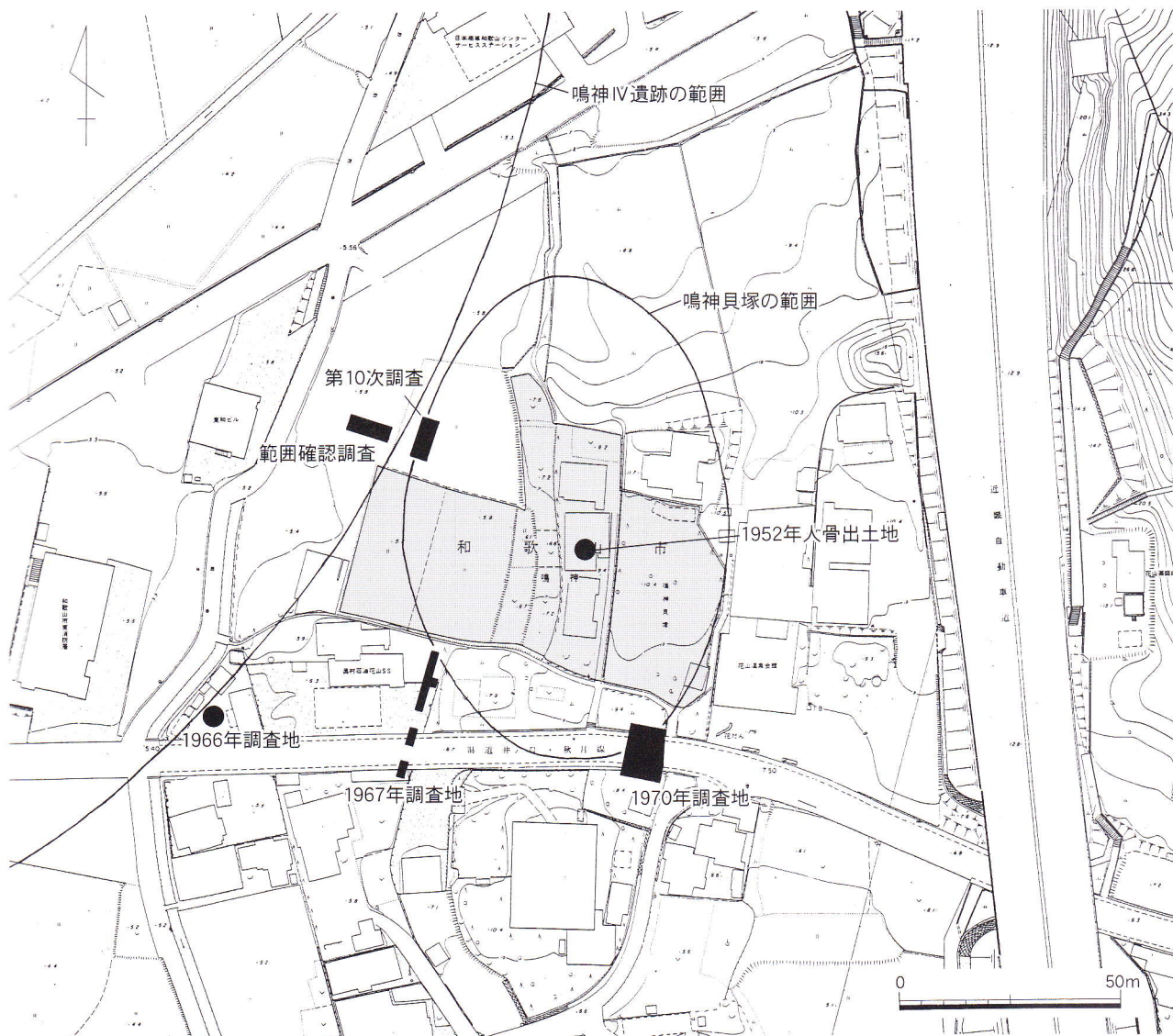
以上、これら既往の調査において遺跡の南・西部の状況が明らかになっている。鳴神貝塚は出土

土器類の中に前期のものが含まれることから貝塚の形成が前期まで遡る可能性が考えられるが、発掘調査の主体となっている周辺部の調査においては、むしろ後・晩期の土器が主体をなしており、調査地点によりその様相は異なっていることが窺われる。

今回の調査地点は、従来未調査である遺跡北西部にあたり、貝層の堆積状況や遺跡の広がりを把握することが重要な課題の一つにあげられた。

【参考文献】

- 下村武一郎「紀伊ノ遺跡並ニ遺物」『東京人類学雑誌』112号 1895年
 鳥居龍蔵「和歌山市付近に於けるアイヌ有史以前の研究」『有史以前の日本』1925年
 巽三郎・堀磨正信「和歌山県下の縄文式文化大観」『古代学研究』第18号 古代学研究会 1958年
 石部正志ほか「鳴神貝塚発掘調査報告」『和歌山県文化財学術調査報告書』和歌山県教育委員会 1968年
 中村貞史『鳴神貝塚発掘調査概報』(社)和歌山県文化財研究会 1971年
 『史跡鳴神貝塚保存管理計画策定報告書』和歌山市教育委員会 1978年



第3図 既往の調査地点位置図（トーン部分は国指定史跡の範囲を示す。）

4. 調査の方法と経過

(1) 調査の方法

調査地の現況は、資材置き場として使用されていた更地及びアスファルト舗装された駐車場である（図版1上）。調査は工事計画範囲の深掘部分を対象に第10次調査が南北8m、東西4mの調査区を、範囲確認調査が第10次調査の西隣に東西9m、南北2.5mの調査区をそれぞれ設定した。

調査の方法について、まず重機による掘削は調査期間の都合上、弥生時代の堆積層（第6層）まで行い、第7層以下の遺物包含層と遺構の調査については人力によって行った。また、第7層下面で検出した貝層（第8層）の掘削にあたっては壁面崩落の危険があったため、各壁面に約30cmの犬走りを設けて段掘りとした。貝層については、平面上においてその単位を把握することができなかったため、貝層を一律20cmずつ面的に掘削を行い、第8a層から順次番号を付して堆積状況の把握と遺物の取り上げを行った。貝層の分層にあたっては貝の種類、貝の量と土の量の比率をもとにして分け、その呼称には純貝層、混土貝層、混貝土層、土層をそれぞれ使用した。

図面による記録は、国土座標軸（旧日本測地系）を基準とした値を使用して、遺構平面図・平板測量図の作成を行った。また、壁面土層断面図については1/20の縮尺を用いた実測を行い、埋葬人骨の出土状況については、1/10の縮尺を用いた。土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用い、遺跡の水準は国家水準点（T.P.値）を基準とした。

(2) 調査の概要

当調査地の基本層序については、第4図に示した通りである。当調査地の地表面は標高約6.0mを測り、第10次調査地が資材置き場である更地、範囲確認調査地がアスファルト舗装された駐車場として使用されており、表土はそれに伴う整地土及び攪乱層がそれぞれ堆積している。特に範囲確認調査地では西半分が大きく攪乱され、調査区西端部では地表下2.0mまで攪乱が及んでいた。

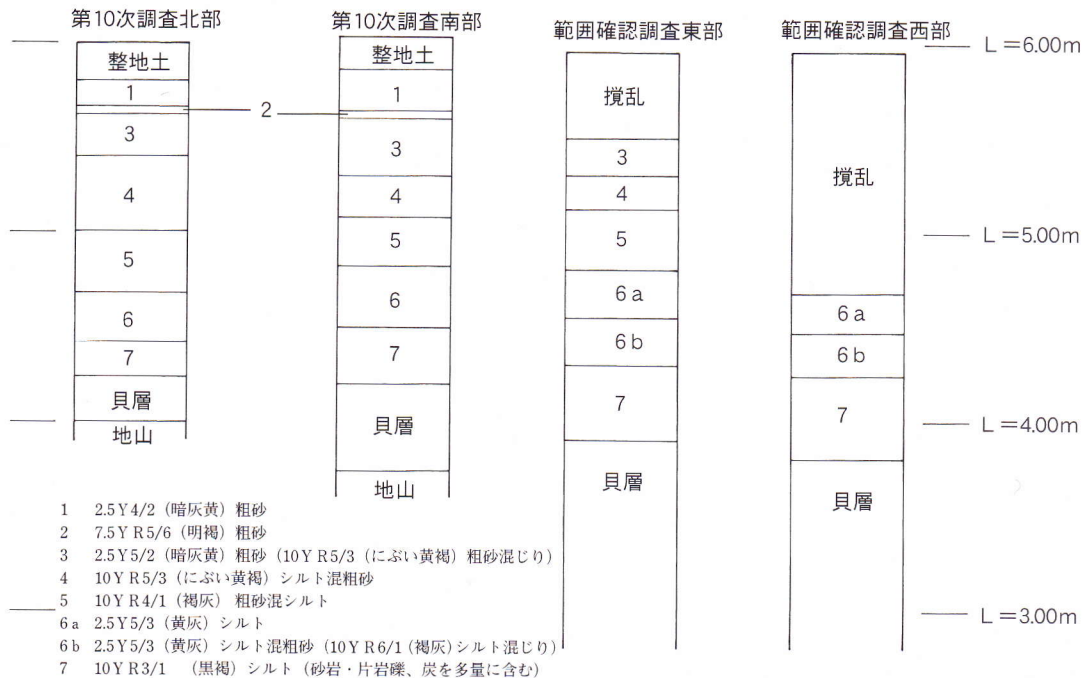
この整地土下では、第10次調査において旧耕作土である暗灰黄色の粗砂層（第1層）が15～20cmの厚さで堆積し、その下層はそれに伴う床土（第2層）が堆積している。

第3層は暗灰黄色の粗砂層で、20～30cmの厚さで堆積するものであり、水田耕作土の可能性が考えられる。この第3層には肥前系の染付磁器が含まれることから、近世後期の堆積とみられる。

第4層はにぶい黄褐色のシルト混粗砂層であり、上面に鉄分の沈着が多いことから、第3層に対応する床土の可能性が考えられる。第4層中には土師器・中世土師器が少量包含されているが、堆積年代は明らかではない。

第5層は褐灰色の粗砂混シルト層であり、範囲確認調査地において溝状遺構の覆土にあたることから判明した。この層には土師器を主体とした土器類が一定量包含されており、出土遺物の年代から古墳時代の堆積層と考えられる。

第6層は第10次調査が約30cmの単層（第6a層）であるが、範囲確認調査では上下2単位（第6a・6b層）で約50cmの厚さを測る。第6a層は黄灰色のシルト層、第6b層は第6a層と同色で褐灰色のシルトブロックを含む粗砂層である。第6層中には遺物がほとんど包含されておらず、堆積年代は明



第4図 調査地土層柱状模式図

らかではないが、上下層との対応関係から弥生時代の堆積層と考えられる。

第7層は黒褐色のシルト層で、厚さは第10次調査で20～30cm、範囲確認調査では約40cmを測り、西側ほど厚く堆積している。この層には縄文土器や石器、炭などの遺物が多量に包含されており、出土遺物の年代観から縄文時代晩期の遺物包含層と考えられる。

この第7層下面が貝層（第8層）となり、第10次調査では約20～50cmの厚さをもって堆積し、標高約4mで地山面を検出した。範囲確認調査では1.2m以上の厚さを確認したが、工事計画の掘削範囲内においては地山面が検出されなかった。貝層の堆積は北側から南側へ、東側から西側へ傾斜をもって堆積しており、特に第10次調査の西端を境として貝層の堆積が急に厚くなることから、西側は谷状の地形をなしているものと考えられる。

5. 遺構

本調査においては、縄文時代晩期の遺物包含層（第7層）とその下層に堆積する貝層（第8層）を対象とした堆積調査であったため、遺構として確認できたものは第10次調査で検出した3基の土坑墓（SX-1～3）のみである。この3基の土坑墓からは、部分的に遺存しているものも含め、8体以上の埋葬人骨が出土し、特にSX-1からは成人男性1体、成人女性1体、小児1体の3体が合葬した状態で検出されるなど、大きな成果が得られた。

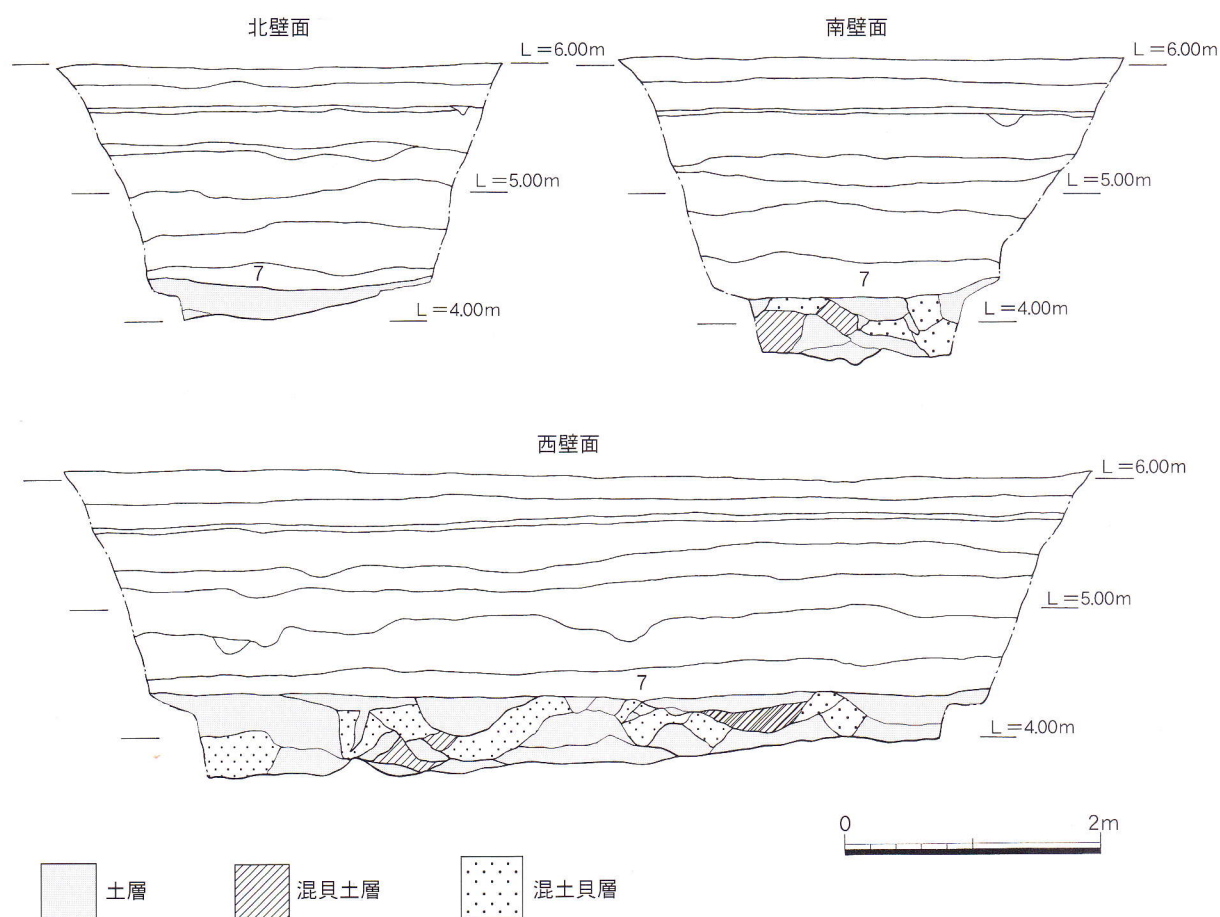
以下では、第10次調査と範囲確認調査の成果について、記述を行う。

（1）第10次調査（第5・6図、図版1～12）

調査は縄文時代晩期の遺物包含層である第7層の掘削から行ったが、壁面の土層観察から第2層上面、第3層上面、第4層上面、第6層上面において遺構の堆積（第5図a～d）を確認した。その他、第5層自体も範囲確認調査の知見からみて溝状遺構に伴う堆積層と考えられることから、第

7層より上位において4面以上の遺構面が存在する可能性が考えられる。

第7層は20~30cm前後の厚さで堆積しているが、土層を細分することができなかったため、上下2単位に分けて掘削を行い、遺物の取り上げを行った。第7層中の遺物量は多く、縄文時代晩期の深鉢を主体とした土器類、砂岩の叩石や磨石・台石、サヌカイトの剥片などを多く含み、大型の土器片の出土も認められた。この下層において貝層（第8層）を検出したが、貝層は貝自体の堆積は少なく、大半は土坑状の掘り込みに伴う土層である（第6図・図版11・12）。これら土坑状の堆積については、後述するように埋葬人骨の出土から当調査地は墓域として利用されていた状況が判明しており、全てが埋葬に伴う堆積とは判断できないが、埋葬等に伴う土坑の掘削が頻繁に行われていた状況が考えられる。貝層はこれら土坑状の堆積土層によって二次堆積しているような状態であり、プライマリーな堆積状況を呈していない。このため平面上において貝層の単位を把握することができなかったため、貝層を一律20cmずつ面的に掘削を行い、堆積状況の把握と遺物の取り上げを行った。掘削の結果、貝層は北より南側ほど厚く、東より西側ほど厚く堆積しており、調査区北端部では土層の堆積のみで、貝の堆積は認められなかった。貝層を構成している貝種はハマグリを主体とし、ハイガイ・カキを少量、シジミを微量含むものである。貝は全体的に保存状態が不良であり、破碎貝が多い。貝層の下面では、標高3.7~4.0mにおいて地山面と考えられる明黄褐色のシルト層を検出したが、この上面は北から南側へ、東から西側へ傾斜している。この上面は貝層中から掘り込まれた土坑によって凹凸をなしているが、地山の上面から切り込んだ明らかな遺構は確認できなかった。

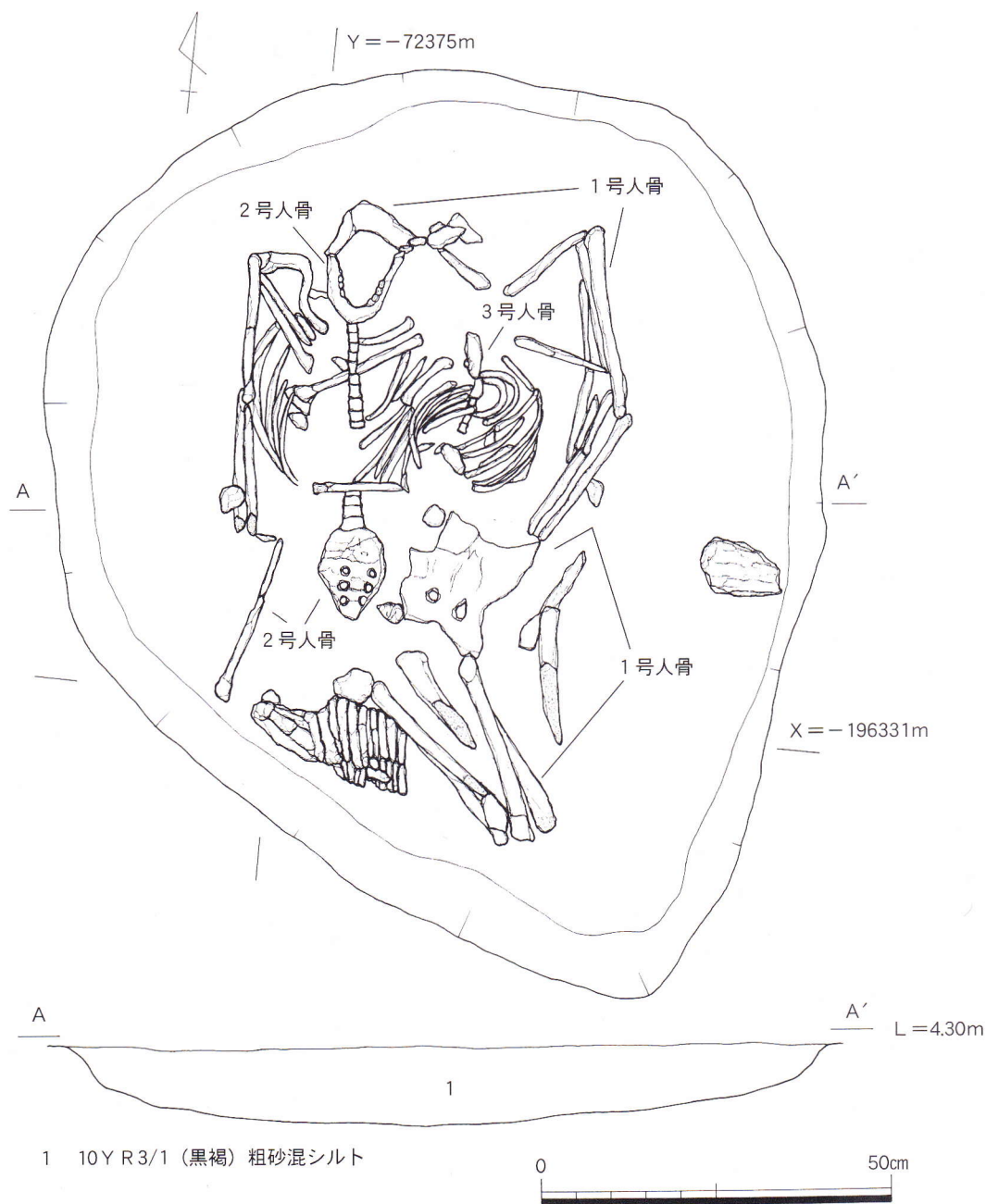


第6図 第10次調査貝層の層位別土層断面図

遺構は第7層及び貝層の掘削中に調査区北側から中央部にかけて、土坑墓3基を確認し、埋葬人骨を8体以上検出した。埋葬状態を確認したSX-1～3はその検出位置が重なり、いずれも土坑内に埋葬されていることから、調査地一帯が埋葬地として利用されていた状況が判明した。以下、SX-1～3について、記述を行う。

〔SX-1〕(第7図、図版2～5)

SX-1は調査区北方で確認した土坑墓で、同一墓坑内に人骨3体が合葬された状態で検出された。墓坑内の覆土と第7層の土層が類似していたために、当初はホリカタの切り込み面が認識できず、貝層上面において平面プランを確認することができた。人骨の遺存レベルから推定して、本来は第7層上面かやや下位から掘り込まれた遺構とみられる。このことからSX-1は貝塚の形成が



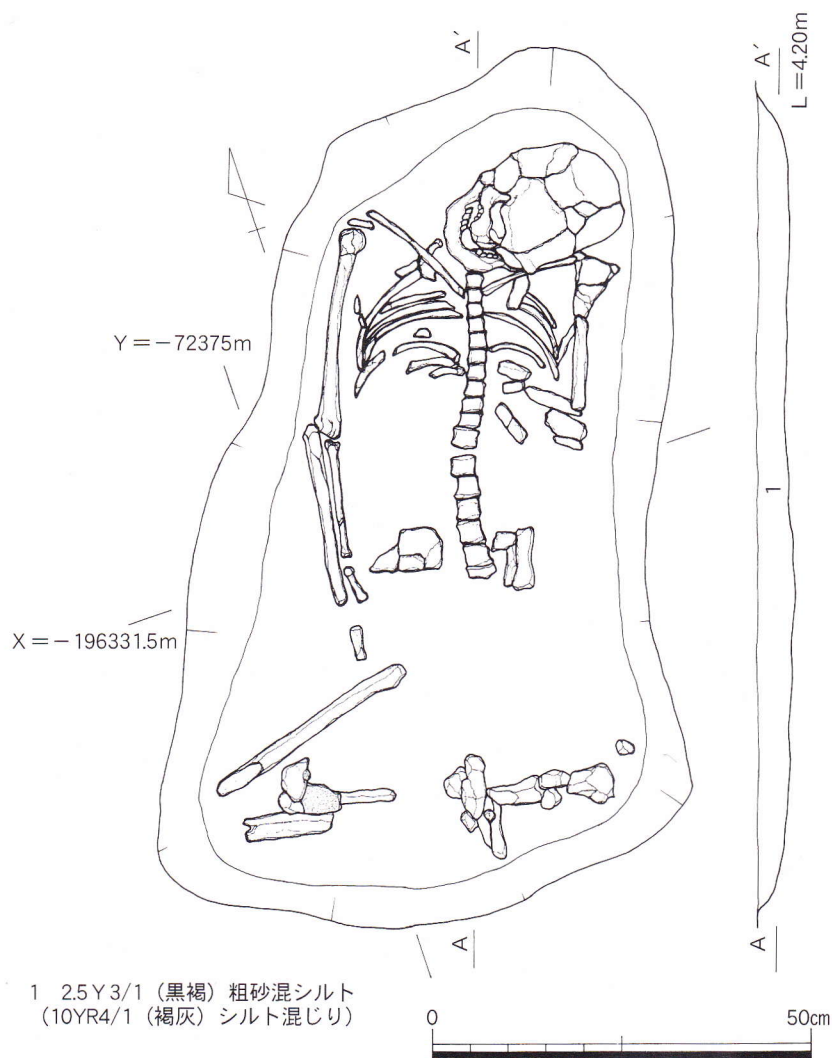
第7図 SX-1遺構平面図及び土層断面図

終了し、その上面に縄文時代晩期の遺物包含層が堆積している途中か、その後に営まれたものと考えられる。

ホリカタの形状は円形を呈し、規模は東西1.15m、南北1.2m、検出面からの深さは5～10cmを測るが、残存する人骨の高さからみて、本来は20cm以上の深さがあったものと考えられる。遺構の覆土は単一で、黒褐色の粗砂混シルト層である。遺構内において明確な施設はなく、東部において20cm大の結晶片岩が1箇所出土しているが、埋葬との関連は不明である。

人骨は3体が合葬された状態で検出され（1～3号人骨と呼称する）、いずれの人骨も頭骨は上部の削平によって遺存しておらず、下顎骨が部分的に残存していたが、他の部位の遺存状態は比較的良好である。東側に埋葬されていた1号人骨は仰臥屈葬の状態であり、左上肢は伸展し、右上肢を屈曲、下肢を屈曲させた状態で埋葬されていた。西側に埋葬されていた2号人骨は右上肢を伸展させ、下肢は大半が削平により遺存していないが、唯一残存している脛骨の位置から屈曲であった可能性が高いことより、1号人骨同様に仰臥屈葬の状態で埋葬されていたと考えられる。また2号人骨の下顎骨には抜歯の痕跡が認められ、中・側切歯の4本と犬歯2本の合計6本が抜かれていた。3号人骨は、1号人骨に抱えられたような状態で検出された。その埋葬方法は、下肢については不明であるが、上肢は左を伸展させ、右は2号人骨に向かって屈曲させている状態である。

埋葬に伴う明らかな副葬品や
着装品は確認していないが、遺
構覆土の洗浄作業によって滑石
製小玉（第19図60）1点を検出
した。人骨は、肉眼による鑑定
ではあるが、1号人骨が成人男
性、2号人骨が成人女性、3号
人骨が小児骨である可能性が
高い。また1～3号人骨の埋葬順
序は、各人骨の重なりから、1
号人骨→2号人骨→3号人骨の
順序と考えられる。SX-1の
年代については、第7層中か上
面から切り込まれた遺構と判断
できることから、縄文時代晩期
後半と考えられる。その他、S
X-1において人骨取り上げ時
に別個体の下顎骨が検出したこ
とから、5号人骨として取り上
げを行っているが、後述するS
X-3の7号人骨の下顎骨であ
る可能性がある。



第8図 SX-2遺構平面図及び土層断面図

〔SX-2〕(第8図、図版5～7)

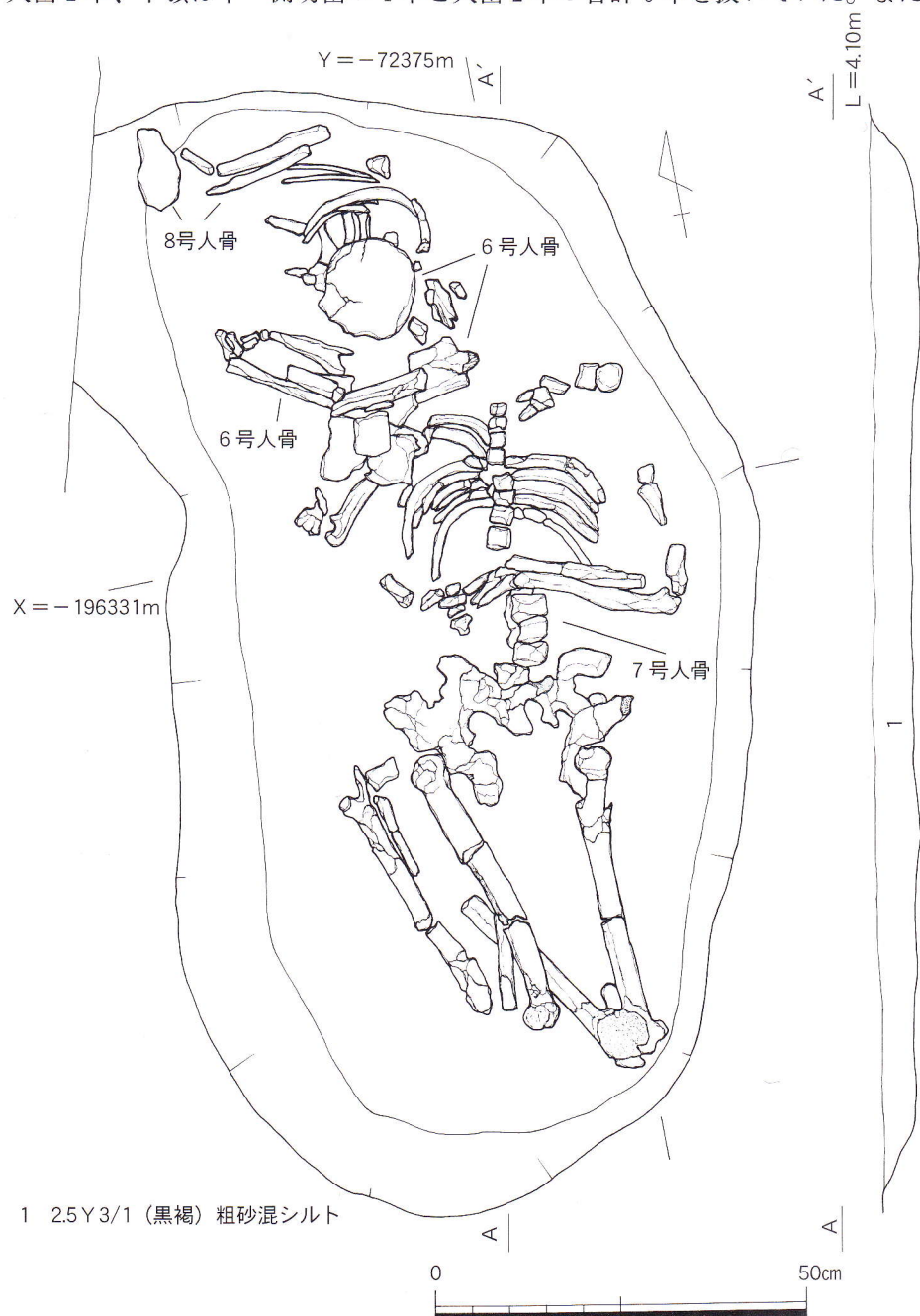
SX-2はSX-1と重複し、その下層で検出した土坑墓である。肋骨や腰骨、下肢骨は部分的に削平されているが、頭蓋骨を含め、良好な形で遺存していた(4号人骨とする)。ホリカタの形状は楕円形を呈し、規模は東西0.6m、南北1.15m、検出面からの深さは5～10cmを測る。遺構の覆土は単一で、黒褐色の粗砂混シルト層である。埋葬に伴う副葬品や着装品は確認していないが、遺構覆土の洗浄作業によって滑石製小玉(第19図59)1点を検出した。

人骨の埋葬方法は、仰臥屈葬にあたる。右上肢は体に沿って伸展させており、左上肢についても伸展とみられる。下肢骨は大腿骨を「ハ」の字状に屈曲させ、脛骨・腓骨を内側に屈曲させ、足の裏を合わせたような状態で埋葬されていた。頭骨は体軸線上に位置せず、やや東側に傾いて検出された。抜歯は上顎の犬歯2本、下顎は中・側切歯の4本と犬歯2本の合計6本を抜いていた。また人骨は、肉眼による鑑定ではあるが、成人男性である可能性が高い。

〔SX-3〕(第9図、図版8・9)

SX-3はSX-2と重複し、その下層で検出した土坑墓であり、遺構内から3体分の人骨が検出された(6～8号人骨とする)が、人骨は上部の攪乱による削平が認められた。ホリカタの形状は楕円形を呈し、規模は東西0.75m、南北1.45m、検出面からの深さは5～10cmを測る。遺構の覆土は単一で、黒褐色の粗砂混シルト層である。

6号人骨は遺構の北側で検出した



第9図 SX-3遺構平面図及び土層断面図

ものであり、頭骨片や上腕骨の一部が遺存しているが、かなりの攪乱状態で検出されたため、埋葬状態は不明である。遺構の南側に埋葬されていた7号人骨の埋葬方法は、仰臥屈葬にあたる。右上肢は不明であるが、左上肢は直角に曲げ、腹部を横断させ、掌を下に向け回内位させている。下肢は強く屈曲させており、座したような状態で埋葬されていた。7号人骨に伴う頭骨は遺存していないが、前述したようにSX-1の5号人骨がこれに該当する可能性がある。遺構北端部で検出した8号人骨は、椎骨・肋骨が遺存しており、その位置から頭位を東に向けていた可能性が高い。いずれの人骨においても、副葬品と思われる遺物の出土はみられなかった。

SX-3は、本来2基以上の切り合いをもつ土坑墓を一つの遺構として認識している可能性が高い。また、6号人骨と8号人骨は同一の埋葬人骨である可能性があり、人骨の重なりから判断して6・8号人骨に伴う土坑墓が営まれた後、7号人骨に伴う土坑墓が後出して営まれたと考えられる。

(2) 範囲確認調査(第10・11図、図版13~17)

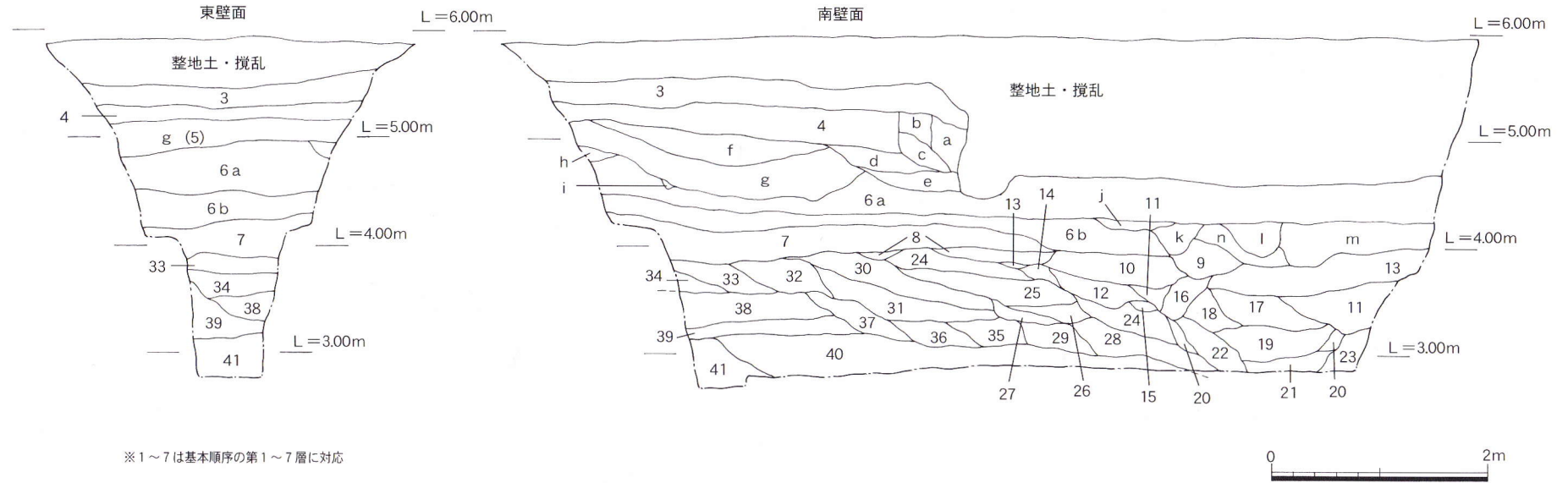
範囲確認調査は、第10次調査と同様に縄文時代晩期の遺物包含層である第7層の掘削から行ったが、壁面の土層観察から第6層上面において切り合い関係をもつ2条の溝状遺構の堆積を確認している。第10図f・gが先行する溝、第10図d・eが後出する溝に伴う堆積である。先行する溝の下層(g)は第10次調査にまで伸びていることから、かなり広範囲に堆積が及んでいると考えられる。

第7層は調査区の中央部から東側のみに堆積しており、上面の検出高は第10次調査と比較して20~30cm下位にあたることから、東から西に向かって傾斜しながら堆積している状況が考えられる。調査区西側については、第6b層が厚く堆積しており、この上面には浅い土坑状の堆積(第10図j・k・l・m・n、図版16・17)がみられる。第7層の遺物量は多く、縄文時代晩期の深鉢を主体とした土器類、砂岩の叩石や台石、サヌカイトの剥片、獣骨などを多く含んでいる。第7層下において貝層(第8層)を検出した。貝層は第10次調査と比較するとプライマリーな堆積状況であったが、平面上において貝層の単位を把握することができなかったため、貝層を一律20cmずつ面的に掘削を行い、堆積状況の把握と遺物の取り上げを行った。

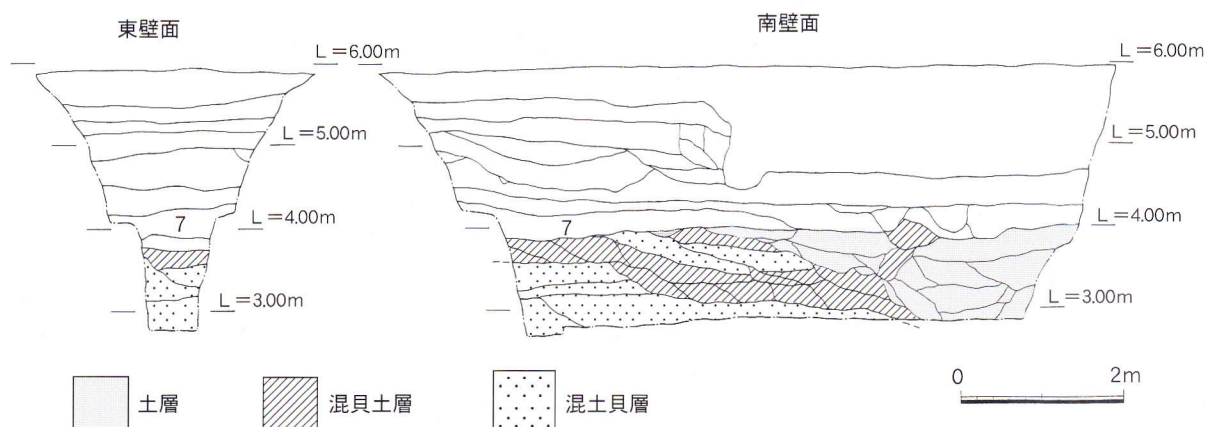
貝層(第8層)の堆積は東から西にむかって、北から南にむかって傾斜している状況であり、調査区東側では混貝土層・混土貝層が主体を占め、土層の堆積はみられない(第11図・図版15・16)。これに対し、調査区西側では褐灰色・黄褐色系統のシルト層による土層が主体である。しかし、貝層は掘削底面において僅かに検出されたことから、調査区西壁外へ続いていると考えられる。また土層の堆積状況は、貝層と同様な傾斜をもつものは少なく、その多くは水平堆積で、谷状地形を整地しているような状況である。貝種はハマグリが主体をなし、ハイガイがそれに次ぐ出土量であることが全体的な傾向として指摘できる。しかし、下層の混土貝層にはカキの占める比率が高く、上層の混土貝層や混貝土層ではシジミの占める比率が高い傾向が指摘できる。貝は上層の堆積においては破碎貝が多いが、下層ほど保存状態が良く、特に掘削底面においては完形に近い貝が多数包含されている状況であった。

範囲確認調査において、遺構は確認していない。また第10次調査と比較すると、貝層が厚く、調査区西側を除いては混土貝層・混貝土層が主体をなしていること、自然遺物の内、人骨はほとんど出土しておらず、獣骨・魚骨がそのほとんどを占めることなど大きく異なっている様相が窺える。

第10図 範囲確認調査土層断面図



- | | | | | | |
|---|---|----|---|----|---|
| a | 10YR5/3 (にぶい黄褐) シルト | 8 | 土層 10YR4/1 (褐灰) シルト (炭を少量含む) | 24 | 混貝土層 10YR4/1 (褐灰) シルト、破砕貝 (ハマグリ・シジミ主体、ハイガイ・カキ少量) |
| b | 10YR5/4 (にぶい黄褐) シルト | 9 | 混貝土層 10YR4/2 (灰黄褐) シルト、破砕貝 (ハマグリ、ハイガイ主体) | 25 | 混貝土層 10YR4/2 (灰黄褐) シルト、ハマグリ主体、ハイガイ・シジミ・カキ少量 |
| c | 10YR4/4 (褐) シルト | 10 | 土層 10YR6/6 (明黄褐) シルト | 26 | 混貝土層 10YR3/1 (黒褐) シルト、貝少なく破砕貝 (ハマグリ・ハイガイ主体、シジミ・カキ少量) |
| d | 10YR5/2 (灰黄褐) 粗砂混シルト | 11 | 土層 10YR4/1 (褐灰) シルト | 27 | 混貝土層 10YR3/2 (黒褐) シルト、貝少なく破砕貝 (ハマグリ・シジミ主体、カキ一定量、ハイガイ少量) |
| e | 10YR5/3 (にぶい黄褐) 粗砂混シルト | 12 | 土層 10YR6/8 (明黄褐) シルト | 28 | 混貝土層 10YR4/1 (褐灰) シルト、破砕貝 (ハマグリ・シジミ主体、カキ一定量、ハイガイ少量) |
| f | 10YR4/2 (灰黄褐) シルト | 13 | 土層 10YR3/1 (黒褐) シルト (炭を少量含む) | 29 | 混貝土層 10YR4/1 (褐灰) シルト、破砕貝 (ハマグリ主体、ハイガイ・シジミ一定量) |
| g | 10YR4/1 (褐灰) シルト | 14 | 土層 10YR5/1 (褐灰) シルト | 30 | 混貝土層 10YR4/2 (灰黄褐) シルト、シジミ主体、ハマグリ・ハイガイ・カキ少量 |
| h | 10YR4/1 (褐灰) シルト (2.5Y5/3 (黄灰) シルトブロック) | 15 | 土層 10YR5/4 (にぶい黄褐) シルト | 31 | 混貝土層 10YR4/2 (灰黄褐) シルト、貝少なく破砕貝 (ハマグリ主体、ハイガイ・カキ少量) |
| i | 10YR4/1 (褐灰) シルト | 16 | 混貝土層 10YR4/2 (灰黄褐) シルト、破砕貝 (ハマグリ主体、ハイガイ・シジミ一定量) | 32 | 混貝土層 10YR4/3 (にぶい黄褐) シルト、ハマグリ・ハイガイ主体、カキ少量 |
| j | 10YR4/1 (褐灰) シルト | 17 | 土層 2.5Y6/4 (にぶい黄) 粗砂混シルト | 33 | 混貝土層 10YR3/2 (黒褐) シルト (炭を少量含む)、破砕貝 (ハマグリ・ハイガイ主体、カキ少量) |
| k | 10YR3/1 (黒褐) シルト | 18 | 土層 2.5Y5/4 (黄褐) シルト | 34 | 混貝土層 10YR3/1 (黒褐) シルト、貝少なく破砕貝 (ハマグリ主体、ハイガイ一定量、シジミ少量) |
| l | 5GY6/1 (オリーブ灰) シルト | 19 | 土層 2.5Y6/6 (明黄褐) シルト | 35 | 混貝土層 10YR3/1 (黒褐) シルト、貝少なく破砕貝 (ハマグリ・ハイガイ主体、カキ少量) |
| m | 2.5Y7/6 (明黄褐) シルト | 20 | 土層 10YR4/1 (褐灰) シルト | 36 | 混貝土層 10YR3/2 (黒褐) シルト、破砕貝 (ハマグリ・ハイガイ主体、シジミ一定量、カキ少量) |
| n | 10YR4/1 (褐灰) シルト | 21 | 土層 10YR6/4 (にぶい黄橙) シルト | 37 | 混貝土層 10YR4/1 (褐灰) シルト、ハマグリ主体、ハイガイ・シジミ少量 |
| | | 22 | 土層 10YR5/1 (褐灰) シルト | 38 | 混貝土層 10YR3/1 (黒褐) シルト、ハマグリ主体、シジミ一定量、ハイガイ・カキ少量 |
| | | 23 | 土層 10YR4/2 (灰黄褐) シルト | 39 | 混貝土層 10YR4/2 (灰黄褐) シルト、ハマグリ主体、ハイガイ・カキ一定量、シジミ少量 |
| | | | | 40 | 混貝土層 10YR4/1 (褐灰) シルト、ハマグリ主体、ハイガイ・カキ一定量、シジミ少量 |
| | | | | 41 | 混貝土層 10YR3/2 (黒褐) シルト、純貝層に近い (ハマグリ・カキ主体、ハイガイ・シジミ少量) |



第11図 範囲確認調査貝層の層位別土層断面図

このことから、墓域としての範囲は、範囲確認調査部分には及んでいないものと考えられる。また貝層の堆積時期について、第10図に示した第38～41層には縄文時代晩期の土器は含まず、縄文時代早期末から前期初頭にかけての土器を含む。よって、第10・11図に示した破線ラインを境として貝層の堆積には大きく時期差がみられるものと考えられる。

6. 遺物

遺物は第10次調査と範囲確認調査を合わせ、遺物収納コンテナ35箱分が出土した。出土遺物には縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、肥前系陶磁器、近世陶器、瓦、石器、骨角器、自然遺物などがある。縄文土器は、表裏条痕をもつ早期末から前期初頭にかけてのものや縁帯文をもつ後期のものが少量出土しているものの、大半は晩期の深鉢・浅鉢である。打製石器は、サヌカイトの石鏃やスクレイパーの他、剥片が多量に出土した。磨製石器は小型の石斧が1点あり、また礫石器は、砂岩・片岩の礫を用いた叩石・磨石・台石・石錘などがある。石製品では、滑石製の白玉2点が出土している。骨角器については、鹿角製のヤス状刺突具や猪牙製のナイフなどがある。自然遺物については埋葬人骨8体以上の他、動物遺体として獣骨や魚骨、貝殻が出土している。骨角器及び自然遺物については、現在分析途中であるため概略のみを述べる。

本報告ではこれらの出土遺物について、まず縄文土器の記述を行い、その後石器・石製品などについて説明を行う。

(1) 縄文土器

[早期から前期にかけての土器] (第12図1～10、図版18上)

1～10はすべて深鉢の破片と考えられる。

1は口縁部外面に2条の突帯を貼付け、その上面に刻み目を施したものである。内面には突帯貼付時の指頭圧痕が観察できる。この土器は、東海地方の粕畑式や入海式に類似するもので、早期末に位置づけられるものと考えられる。

2～5は表裏条痕が施されたものである。2は波状口縁の小型の鉢で、口縁部にそって外面に突

帯が巡り、突帯上に刻み目が施されている。また突帯間の外側とタテ方向に竹管文による装飾が配されている。3は体部の破片で、表裏条痕が一部ナデ消されている。4・5は条痕を施した後、外面に「U」字状の半截竹管文様が描かれ、また5には竹管文による装飾も施されている。両者とも8mm程度の補修孔が穿たれており、色調や胎土の状況から同一個体の可能性が考えられる。これらの土器の胎土には雲母が多量に含まれ、焼成は軟質で暗褐色に発色している。時期的には、早期末から前期初頭にかけてのものと考えられる。

6・7は同一個体と考えられるものである。7は比較的高さをもつ2条の突帯間に竹管文を配するもので、その口縁部が6と考えられる。8は外面にC字形爪形文が施されたもので、ナデ消された条痕が僅かに観察できる。これらの内面にはヨコ方向の条痕が明瞭に残る。これらは、北白川下層Ⅰ式に併行する時期のものと考えられる。

9・10は外面にLRの斜行縄文が施されたもので、9は羽状縄文である。ともに内面にはヨコナデ調整が行われている。これらは、北白川下層Ⅱ式に併行する時期のものと考えられる。

これらの出土位置は、1～8が第10次調査、9・10が範囲確認調査であり、各出土層位は、1が第8a層、2～8が第8b層、9が第8d層、10が第8層の上位である。

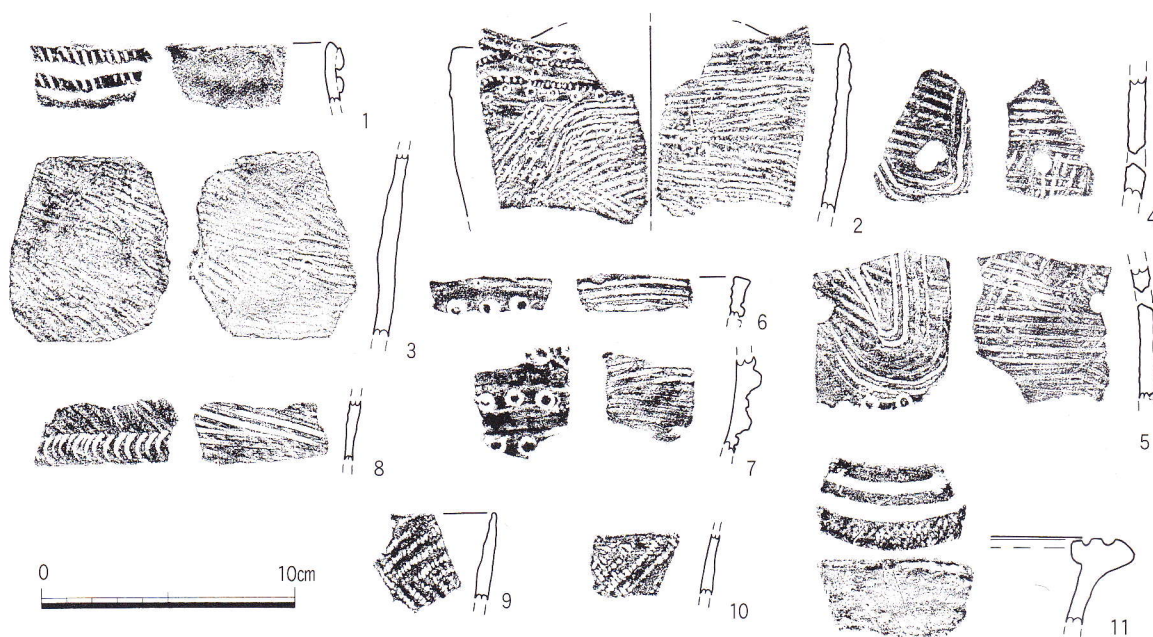
〔後期の土器〕(第12図11、図版18上)

11は口縁部を内外に大きく肥厚させて形成した縁帯文をもつ深鉢である。また外端面にはRLの縄文を施している。時期的には北白川上層式の範疇と考えられる。出土位置は、範囲確認調査の第8d層である。

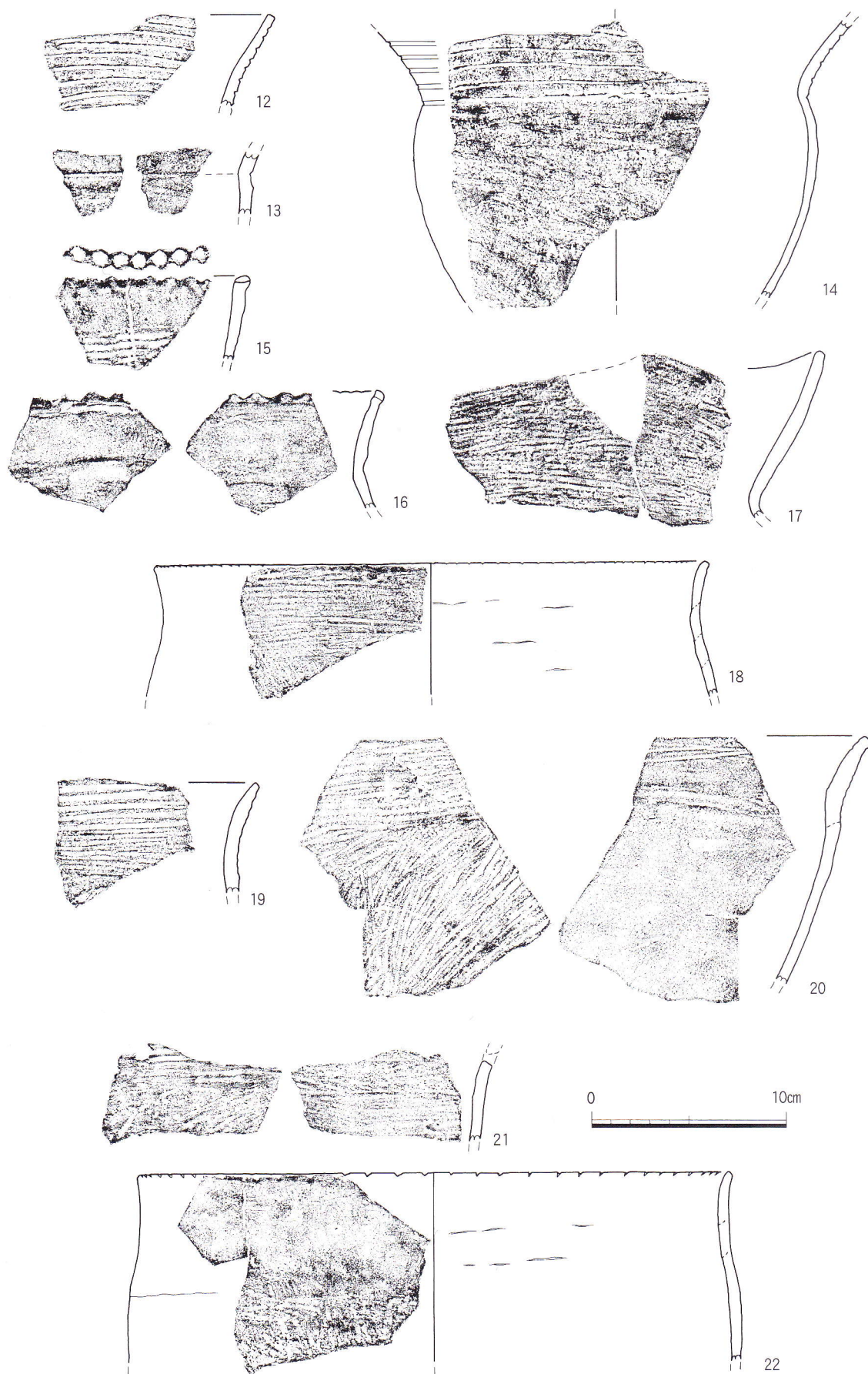
〔晩期の土器〕(第13～15図12～43、図版18下～20)

12～26は深鉢である。

12～14は外面にヘラ状工具による沈線が施されたものである。12は口縁部外面に8条以上の沈線を巡らしたもので、滋賀里式でもやや古い時期に併行するものと考えられる。13・14は頸部及びそ



第12図 遺物実測図1



第13図 遺物実測図 2

の上位に多条の沈線を巡らしたもので、体部にはヘラケズリが行われ、また内面はヨコナデによって仕上げられている。ともに、滋賀里Ⅲ式でもやや古い時期に併行するものと考えられる。

15・16は口縁部に幅広の刻み目が施されたものである。15は外面に条痕を施した後、内面から口縁部にかけてヨコナデによって仕上げている。16は内外面ともヨコナデによって仕上げているもので、体部内面にはヘラケズリと考えられる痕跡が残る。両者とも滋賀里Ⅲ式に併行する時期におさまるものとみられる。

17～21は外面に貝殻条痕が施された一群である。17は大きく屈曲してのびる口縁部が波状口縁になるものである。18は口径28.2cmを復元できる個体で、口縁部に浅い刻み目がほぼ等間隔に入れられている。体部外面にはヘラケズリをナデ消した痕跡が確認でき、また内面には粘土紐の接合痕が顕著に残る。19は外面の体部にヘラケズリをそのまま残す個体で、上部の条痕とヘラケズリによって稜を作り出している。20は体部外面にも条痕が施されたもので、口頸部を条痕の方向性によって明確にしている。また口縁部内面には数条の条痕がヨコナデ調整の後に施されている。21は頸部周辺の破片である。外面の調整は19と同じであるものの、口縁部内面にもヘラケズリが行われている。また頸部上位には外面から穿たれた補修孔が確認できる。これらの土器は、滋賀里Ⅲ式に併行する時期のものと考えられる。

22・23は口縁部をヨコナデによって仕上げ、体部外面にヘラケズリが行われた一群である。22は口径30.2cm、23は口径38.3cmを復元でき、両者とも口縁上端部には刻み目が施されている。また内面には粘土紐の接合痕が顕著に残り、22にはヨコナデに先行するヘラケズリの痕跡が僅かに観察できる。両者とも滋賀里Ⅲ式に併行する時期におさまるものとみられる。

24・25は内外面にヘラミガキが行われた精製土器と考えられる。24は口径10.5cmの法量をもつ小型の甕形を呈するものである。25は口径19.4cmの法量をもつ口縁部外面に1条の貼付突帯をもつもので、突帯は上部のみにヨコナデが行われている。これらの時期は、24が滋賀里Ⅲ式に、25が滋賀里Ⅳ式にそれぞれ併行するものと考えられる。

26は突帯文土器で、今回の調査で出土した縄文土器の中では最も新しい長原式に併行するものである。

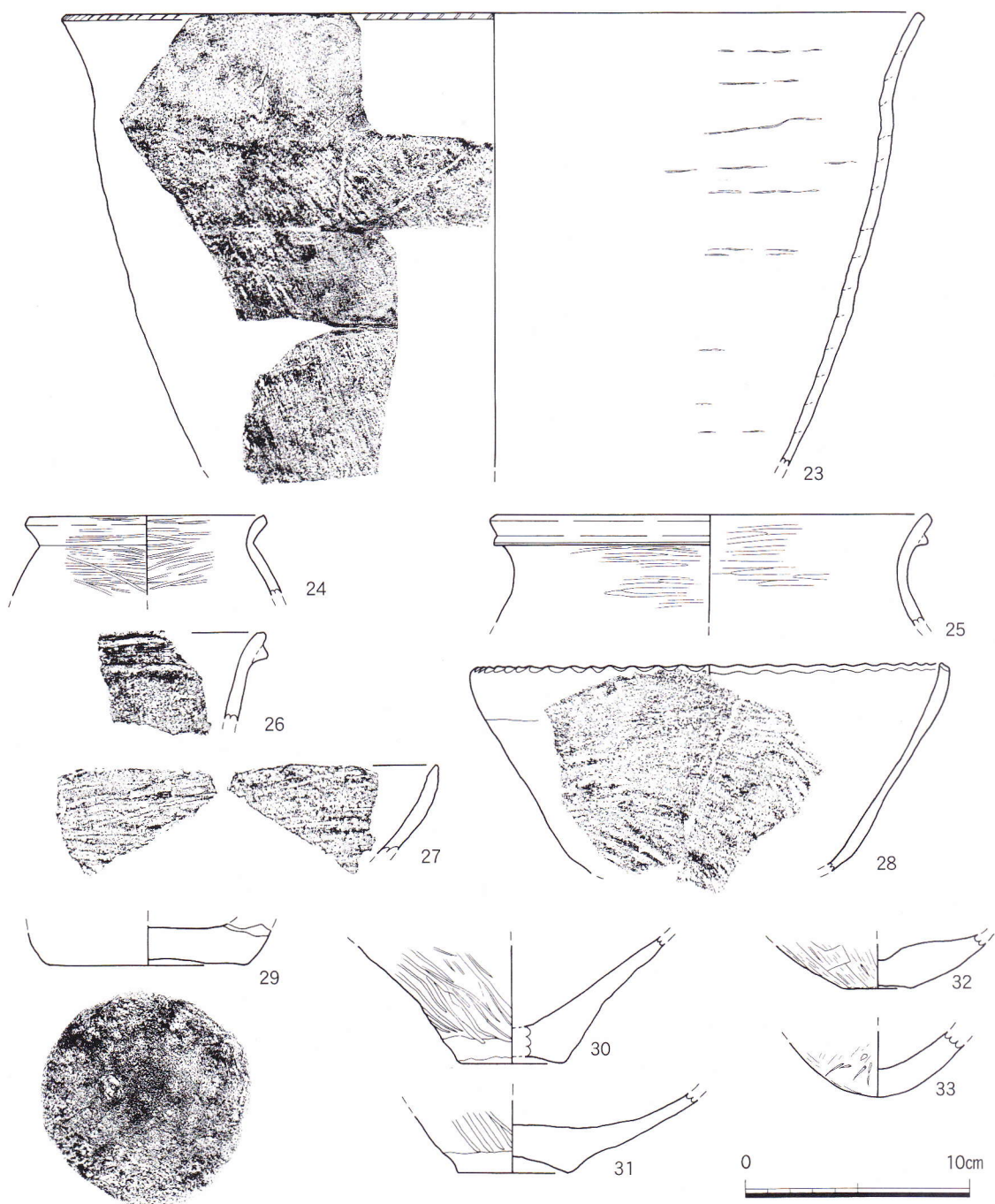
27・28は鉢である。27は外面にヨコ方向の貝殻条痕が、内面にはヨコ方向のヘラケズリが施されたもので、口縁端部のみヨコナデによって調整されている。器形的には尖底になるものと考えられる。28は口縁端部に幅広の刻み目が施されたもので、口径は20.7cmを復元できる。体部外面にはヨコ方向のヘラケズリが、口縁部から内面にかけてはヨコナデ調整が行われている。これらの時期は、27が滋賀里Ⅲ～Ⅳ式に、28が滋賀里Ⅲ式にそれぞれ併行するものと考えられる。

29～33は深鉢の底部である。29は比較的大きい平底を呈するもので、外底面には微かに網代痕が観察できる。また内底面はヘラケズリが行われている。30・31は外面に貝殻条痕が施されたもので、底径4.8cm前後の法量をもつ。32は底径2.9cmと尖底に近いタイプのものである。また33は尖底の底部で、ともに外面には下方から上方にかけてのヘラケズリが行われ、内面はヨコナデ調整が行われている。これらは、時期的には晩期に位置づけられるが、29は後期に遡る可能性があり、晩期でも古い様相をもつ。また33は滋賀里Ⅳ式に併行するものと考えられる。

34～43は浅鉢である。

34・35は貼付による突起をもつもので、内面頸部から外面にかけてヨコ方向の丁寧なヘラミガキが施されている。34の口径は22.2cmを復元できる。36も内外面にヘラミガキが施された体部上位の破片である。形状的にみて前者と同様の口縁形態をもつものと考えられる。ともに滋賀里Ⅲ式に分類できるものである。

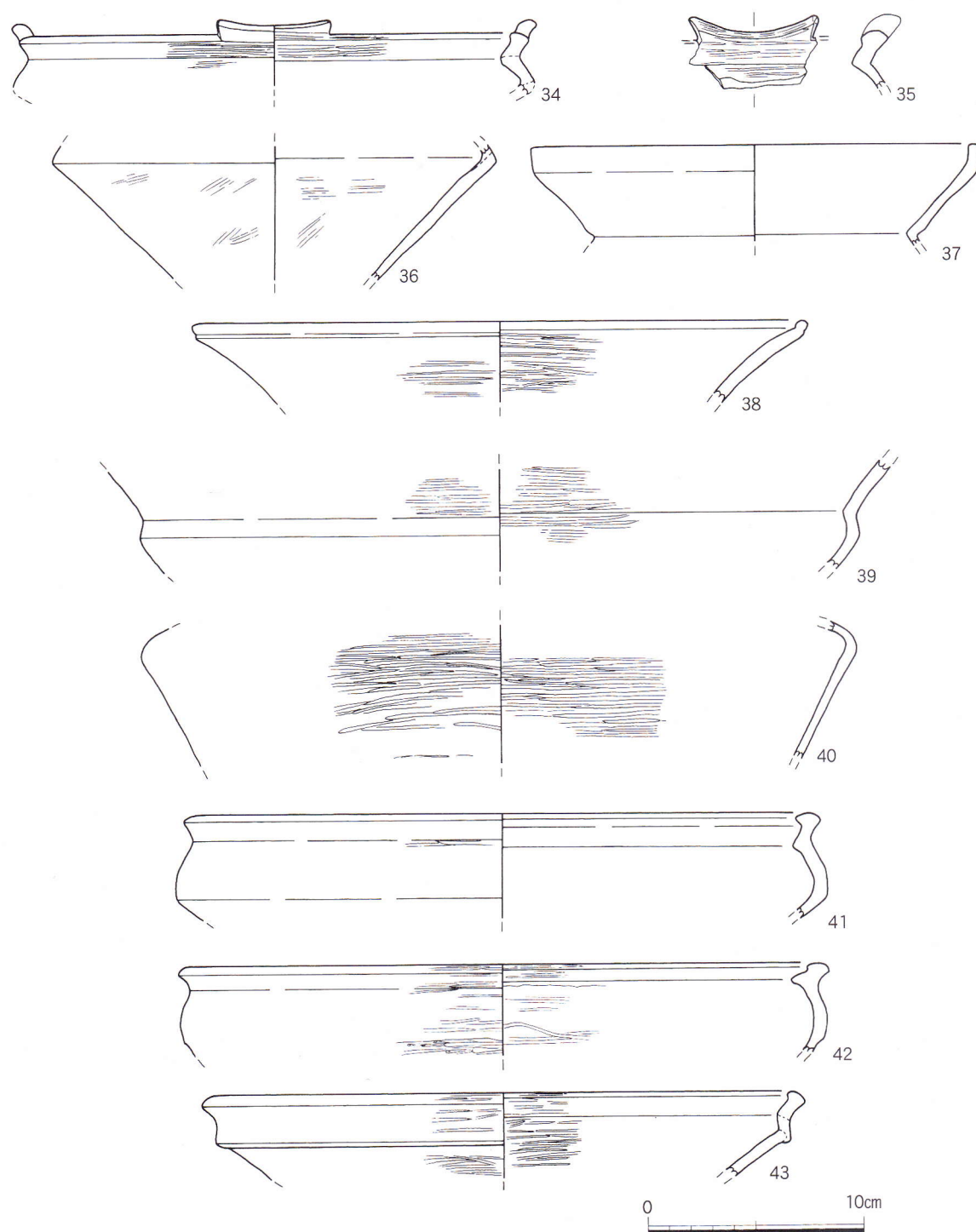
37・38は口縁部が長くのび、端部に至って上方に立ち上がる器形のもので、それぞれの口径は37が20.0cm、38が28.0cmに復元できる。これらの調整は、37には内外面ともヨコナデ調整が施され、38には不明瞭ながらヘラミガキ調整が観察できる。また39は頸部径33.2cmの法量をもつ大型のもの



第14図 遺物実測図 3

で、38に類似する器形を呈する頸部周辺の破片である。40はやや丸みをもつ肩部を形成するもので、内外面とも丁寧なヘラミガキ調整が行われている。この4点も滋賀里Ⅲ式に併行する時期のものと考えられる。

41・42は短い口縁部が端部に至り、内外に肥厚する形状のもので、体部下半に丸みをもち、内頸部が内側に突出する器形である。41の調整は、剥離が著しく不明瞭であるが、42にはヨコ方向のヘラケズリが行われている外面体部下半を除いてヨコ方向のヘラミガキが施されている。また43は、



第15図 遺物実測図 4

口縁端部の形状が前者と類似するものの、頸部から大きく屈折して体部を形成するものである。内外面ともヘラケズリ調整が行われ、内面に朱塗りの痕跡が観察できる。この3点は滋賀里IV式に分類できるものである。

以上、晩期の土器の胎土では、深鉢及び鉢に関して1mm程度の砂粒を多量に含むものが大半で、緻密な胎土をもつものとして24が挙げられる。また浅鉢は胎土が細かく、特に38・40は微細な砂粒を含むだけのものである。胎土には、石英・結晶片岩・赤色軟質粒などを含むものがほとんどであるが、19・25・42には雲母が含まれている。

焼成は全体的に軟質で、褐色から暗褐色に発色するものが大半であるものの、中には暗赤褐色のもの(18)や赤褐色のもの(19)、淡赤褐色のもの(21・23・26・29・30・32・33)などがある。

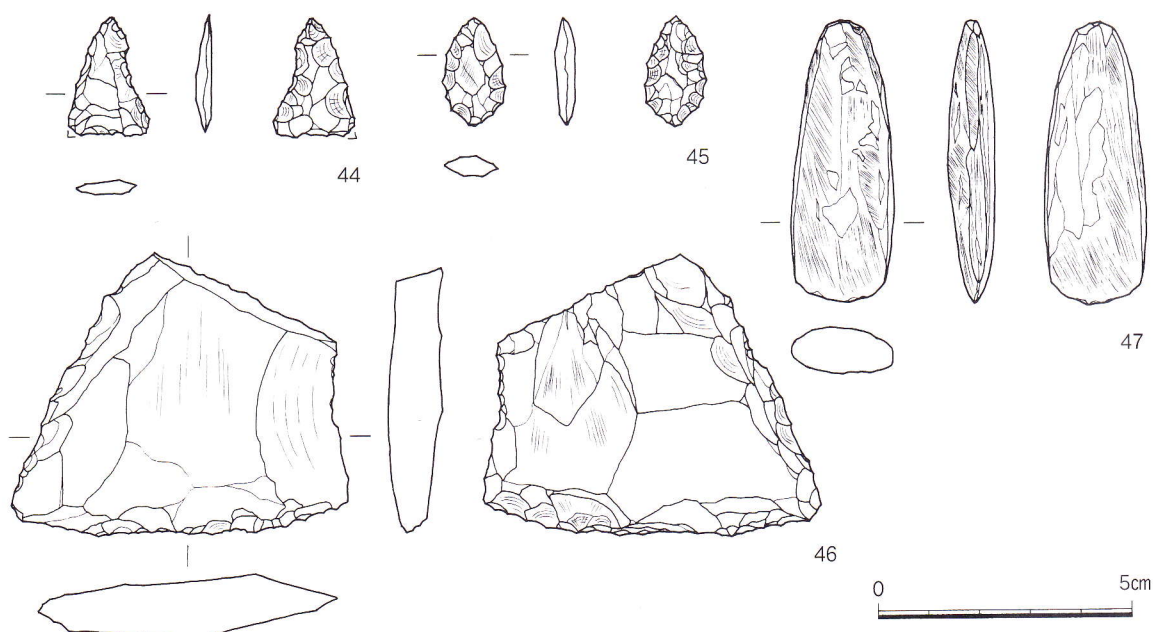
これらの出土位置は、13・17・18・21～24・28・30・32・33～36・40～42が第10次調査で、それ以外のものは範囲確認調査出土のものであり、唯一13がSX-1からの遺構出土土器である。また、各出土層位は、12・25・31が第8a層、14・37～39が第8b層、19が第8c層、27・29・43が第8d層、17が層位不明、その他のものが第7層である。

(2) 石器・石製品

[打製石器] (第16図44～46、図版21上)

44・45はサヌカイト製の石鏃である。44は平基式で、全長2.3cm、最大幅1.6cm、厚さ3.0mm、重量0.9gのものである。45は凸基式で、全長2.1cm、最大幅1.2cm、厚さ4.0mm、重量1.1gのものである。両者とも素材剥片からの大剥離面を残し、表裏面とも先端から基部に向かって細部調整が施されている。

46はサヌカイト製のスクレイパーで、長さ5.4cm、最大幅6.7cm、厚さ1.1cm、重量49.9gの法量をもつ。基部に自然面を残し、基部以外の周囲には細部調整が施され、刃部には使用による破損が顕著にみられる。側縁部の細部調整は、基部から刃部に向かって行われている。



第16図 遺物実測図5

これらの出土位置は、44・45が第10次調査の第8層、46は範囲確認調査の第7層である。

〔磨製石器〕(第16図47、図版21上)

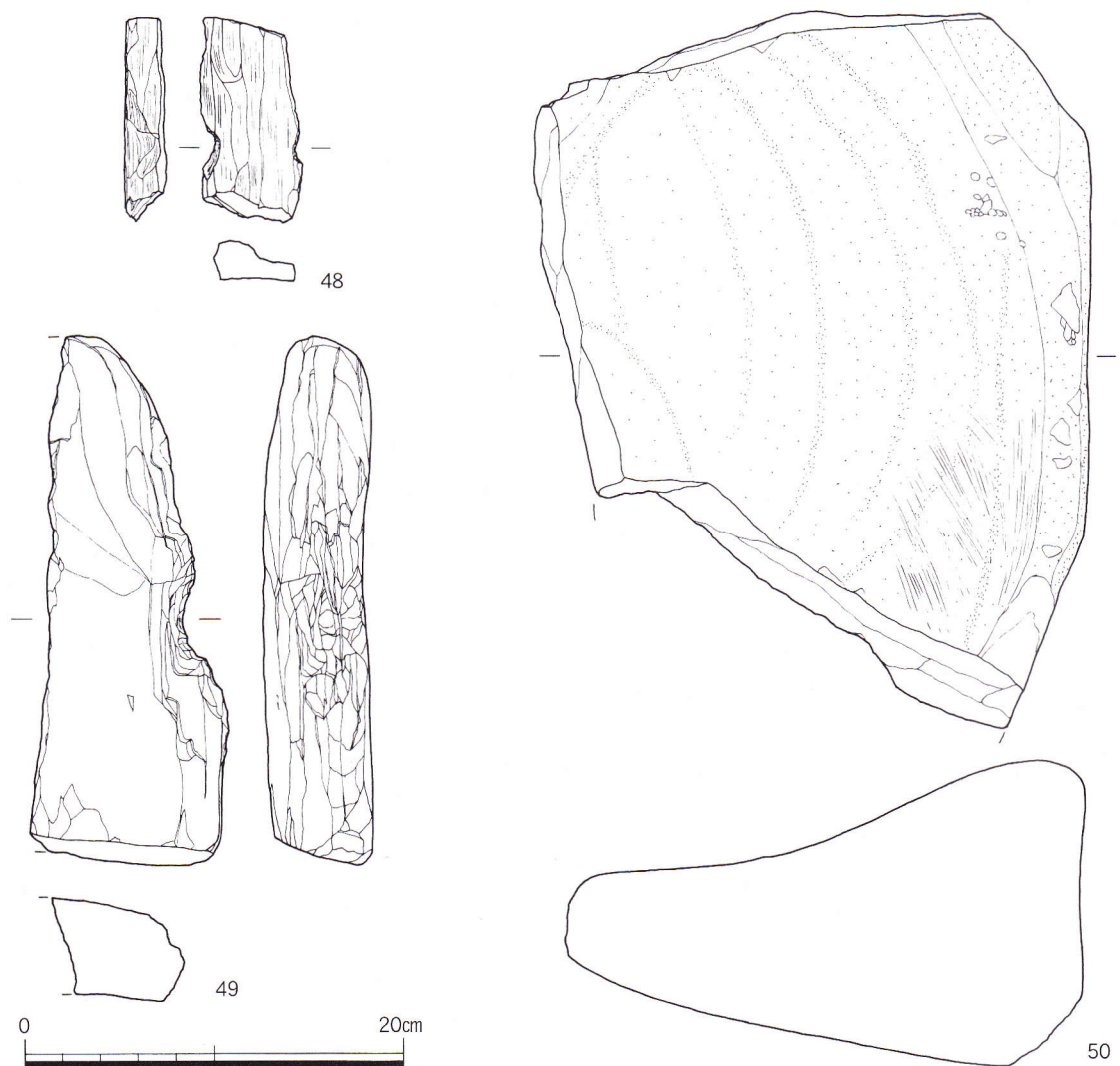
47は硬質の結晶片岩製の小型石斧である。法量は、全長5.6cm、最大幅2.1cm、厚さ1.0cmで、重量は17.6gである。自然の凹み以外の部分全面に研磨が施されていることから、全面に光沢がみられる。色調は暗緑色を呈する。第10次調査の第7層から出土した。

〔礫石器〕(第17・18図48～58、図版21下・22上)

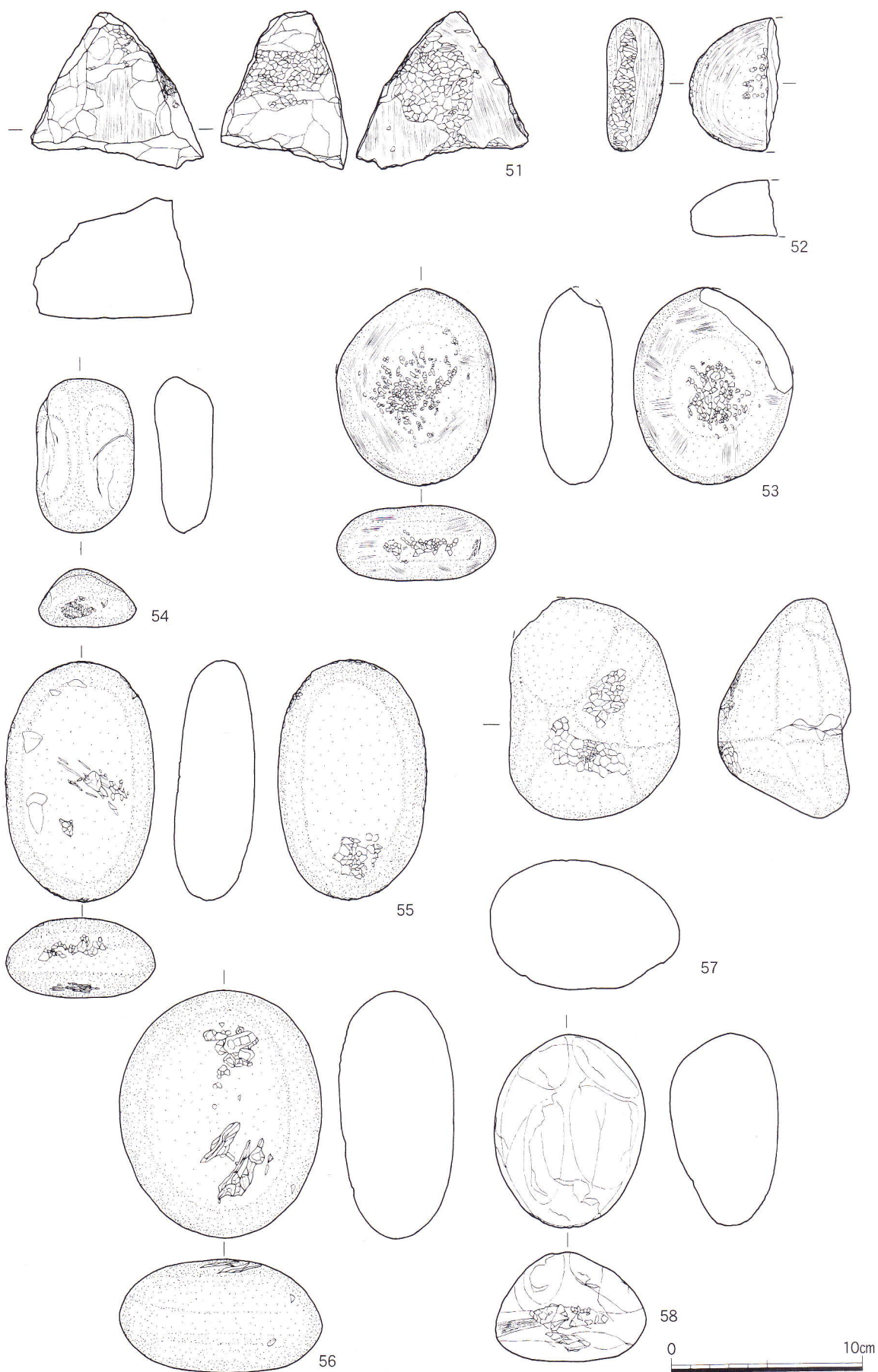
48・49は結晶片岩を用いた石錘である。48は全長10.2cm、最大幅5.2cm、厚さ2.2cmを測る板状素材の四辺に抉りが施されたもので、重量は145.3gを量る。49は全長27.7cm、残存幅9.9cm、厚さ5.0cmを測り、先端に丸みを帯びた大型の板状素材を用いたもので、残存部一辺に抉りが施されている。重量は1.91kgである。

50は川原石を使用した大型の台石である。材質は砂岩で、残存長37.3cm、最大幅29.3cm、厚さ16.0cmで、重量は22.8kgである。上面は使用による凹みが顕著にみられ、石皿状となっている。また周囲は敲打痕が明瞭に観察できる。

51～58は叩石である。51は砂岩製の石皿が破損した後、叩石として転用されたもので、残存長7.3



第17図 遺物実測図6



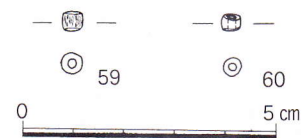
第18図 遺物実測図 7

cm、最大幅9.0cm、厚さ6.6cmで、重量は400 gである。上下面とも石皿として機能していた時の研磨痕が筋状に残り、また敲打範囲は、突出した部分を面として観察できる。52～57は砂岩の川原石を用いたものである。52・53は円形で扁平な素材を用いた叩石と磨石の複合石器であり、ともに一部が欠失している。53には被熱を受け、赤変した部分が確認できる。これらの法量は、52が長さ7.0cm、残存幅4.6cm、厚さ2.9cm、重量124.8 g、53が残存長10.3cm、最大幅8.3cm、厚さ3.9cm、重量470 gである。54は細長い素材を用いたもので、先端部にのみ敲打痕を残す。法量は、長さ8.1cm、最大幅5.0cm、厚さ3.1cm、重量179.2 gである。55・56は長楕円形の素材を用いたもので、上面に筋状の敲打痕を残すものである。また55には側縁部にも敲打痕が確認できる。これらの法量は、55が長さ12.5cm、最大幅7.8cm、厚さ4.0cm、重量560 g、56が長さ12.9cm、最大幅10.6cm、厚さ5.9cm、重量1.16kgである。57は円錐形の素材を用いたもので、その頂部にのみ敲打痕が確認できる。法量は、長さ11.6cm、最大幅8.9cm、厚さ6.6cm、重量920 gである。58は石英の川原石を素材としたもので、側縁部に敲打痕と磨痕が観察できる叩石と磨石の複合石器である。法量は、長さ10.0cm、最大幅7.9cm、厚さ5.6cm、重量590 gである。

以上の礫石器は、50・52・54・55・57・58が第10次調査、48・49・51・53・56が範囲確認調査出土のものである。また、各出土層位は、49・50・56が第8b層、53・57が第8c層、48が第8d層で、51・52・54・55・58が第7層である。

〔白玉〕(第19図59・60、図版21上)

59・60はともに滑石製の白玉である。59は側面に斜め方向の研磨痕が確認できるもので、黒灰色の色調をもつ。60は全体が研磨により丸みを帯びた形状のもので、淡灰色の色調をもつ。これらの法量は、59が全長3.5mm、幅4.0mm、厚さ4.0mm、重量0.1 g、60が全長3.0mm、幅3.5mm、厚さ3.5mm、重量0.1 gである。ともに第10次調査出土のもので、59がSX-2、60がSX-1から出土した。



第19図 遺物実測図 8

(3) 自然遺物

自然遺物については埋葬人骨8体以上の他、動物遺体として鹿・猪・猿・鳥・鼠・蛇などの獣骨、マダイなどの魚骨が出土している。貝類の組成としてはハマグリ、ハイガイが主体をなし、それに次いでカキ、シジミなどが出土している(図版22下)。

7. まとめ

今回の調査地は鳴神IV遺跡と鳴神貝塚の境界部にあたり、特に調査の主体となった鳴神貝塚における北西縁辺部の状況を確認することができた。

第10次調査と範囲確認調査は、隣接地でありながらその様相は大きく異なっていた。まず第10次調査では土坑墓3基に伴う埋葬人骨を8体以上確認し、当調査地が墓域にあたることが判明した。貝層は約50cmと浅く、埋葬等に伴う掘り込みによって乱れた堆積状況であり、貝層よりも土層が大半を占める。これに対し、範囲確認調査では埋葬人骨は検出されず、貝層の堆積も厚い。また、調査区西側を除いては土層の堆積はなく、混土貝層・混貝土層が主体をなしている。第10次調査西隣の試掘調査では、約1mの貝層が確認されており、範囲確認調査の貝層が東から西へ傾斜した堆積状況を示していることを勘案すると、第10次調査の西側は谷状に落ち込む地形をなしているとみられ、墓域は居住空間とみられる丘陵頂部と西側へのびる緩斜面から谷状地形に至る地形の変換点に展開していたと考えられる。第10次調査検出の土坑墓については、貝層の上層から下層にわたって重なるように確認されたことから、一定の時間幅をもつものとみられ、通例では単独で位置しないことから、本調査地周辺に一定の範囲をもつ墓域が広がっていることが想定される。

和歌山県内における縄文時代の埋葬人骨は、鳴神貝塚1952年出土例、白浜町瀬戸遺跡に次いで本例で3例目となるが、いずれも縄文時代晩期のものである。検出された人骨の内、埋葬状態が確認できたSX-1～3はいずれも仰臥屈葬であり、埋葬に伴う副葬品や着装品はなく、その埋葬位置は上述したように居住空間の縁辺部と考えられる。これに対し鳴神貝塚1952年出土人骨は、出土位置が居住空間の中心と想定される丘陵頂部であり、埋葬方法は伸展葬で、猿の橈骨で作られた耳栓を着装しており、今回の事例とは埋葬の取り扱いが異なっている。これらの相違点は、被葬者の共同体内部における出自の差や死者をめぐる生者たちの観念のあり方が埋葬法の差異となって現れている可能性が考えられ、1952年出土人骨がシャーマンと想定されている点は注意できる。

また、SX-1は成人2体と小児1体を合葬していたが、埋葬姿勢や遺体の配置が整然としており、1体1体の骨もほぼ揃っていることから、同時埋葬であると判断できる。合葬人骨は近畿地方では大阪市森の宮遺跡や、藤井寺市国府遺跡で確認されているが類例は少なく、また今回確認した合葬例は男+女+小児の可能性があるが、このような例は全国的にみても愛知県渥美郡田原町吉胡貝塚や広島県尾道市太田貝塚に類例があるだけで、稀少な事例である。合葬例は当時の埋葬と親族組織や出自規定を解明する上で有効な資料と考えられるが、そこには地方によって年齢・性別構成に偏りが存在することが明らかにされており、今後人骨の分析結果をもとに検討を行っていきたい。

最後に鳴神貝塚の形成時期と貝層の分布範囲について検討すると、遺跡中央部では前・中期の土器が主体をなしており、この段階まで貝塚の形成時期が求められる。これに対し、周辺部ではその大半が晩期に属するものであり、貝塚の堆積時期の下限については貝層に包含される遺物の年代が縄文時代晩期前葉を主体とすること、貝層上面に堆積する遺物包含層（第7層）の年代が縄文時代晩期後葉と判断できることから、貝塚の形成は縄文時代晩期前葉までと考えられる。次に貝層の分布範囲を検討すると、北側については国道24号バイパス工事に伴うK区の調査において、調査区の北東部1/3に丘陵部の岩盤が浅い地点から検出されており、貝層は国道にまでは達していないと考

えられる。南側については1970年調査において二次的に移動を受けた貝層が検出されており、1967年調査においても南側にいくほど地山面が上がり、貝層の堆積もなくなることから、南側においては遺跡外にそれほどの広がりとは想定できない。西側については、1967年調査における貝層の厚さが平均50cmであり、地山面も比較的浅い地点で検出されているが、さらに西側で実施された1966年のボーリング調査では、地表下2.2mと深い位置で貝層が確認されている。この遺跡外南西部の状況は、今回の調査成果と同様に西側は谷状の地形をなしていると判断できる。以上の点から、貝層の分布は遺跡の西側に相当の広がりをもっているとみられ、貝層の形成時期からも遺跡中央部から徐々に西側へ貝塚の形成が拡大された状況が想定でき、鳴神貝塚における貝層の分布範囲は南北約120m、東西約140m程度と推定することができる。

以上、今回の調査成果について記述してきたが、今後は遺跡の保護を十分に図るためにも、遺跡の範囲をより明確にしていくことが必要であると考えられる。

【参考文献】

- 巽三郎・羯磨正信「和歌山県下の縄文式文化大観」『古代学研究』古代学研究会 1958年
石部正志ほか「鳴神貝塚発掘調査報告」『和歌山県文化財学術調査報告書』和歌山県教育委員会 1968年
中村貞史『鳴神貝塚発掘調査概報』（社）和歌山県文化財研究会 1971年
『史跡 鳴神貝塚保存管理計画策定報告書』和歌山市教育委員会 1978年
『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』和歌山県教育委員会 1984年
丹羽佑一「和歌山県瀬戸遺跡の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』京都大学埋蔵文化財研究センター 1978年
春成秀爾『縄文社会論究』塙書房 2002年

神前遺跡 第4次確認調査

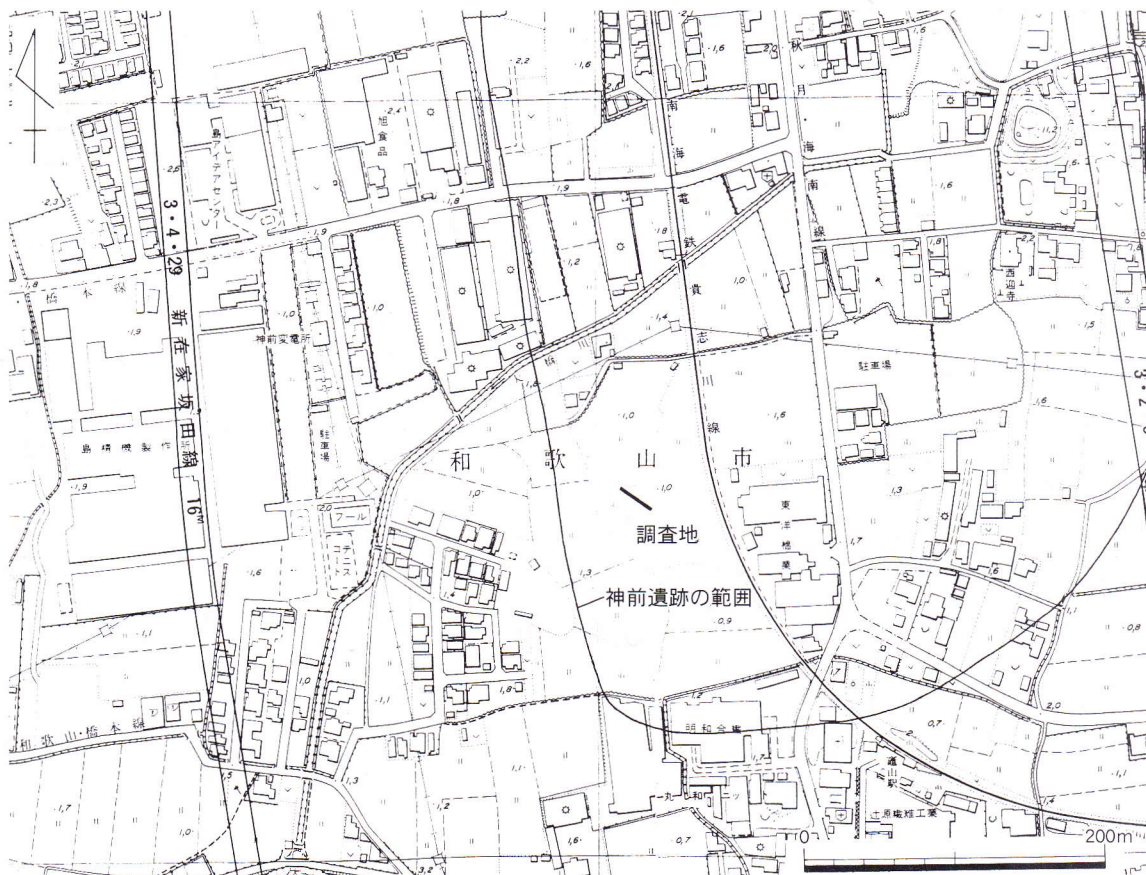
1.調査の契機と経過

神前遺跡（遺跡番号307）は、和歌山市域のほぼ中央部、紀ノ川南岸の沖積平野部に所在する弥生時代を中心とした集落遺跡である。この遺跡は東西400m、南北650mの範囲をもち、遺跡北部をさらに広域な範囲を誇る井辺遺跡と接している。今回の調査地は、遺跡南西部にあたる南海電鉄貴志川線西側の水田地帯に位置する（第1図）。

神前遺跡における調査は、過去に3度行われている。第1次調査は平成8年度に財団法人和歌山市文化体育振興事業団が行ったもので、遺跡東半部約220㎡の調査であった。この調査では、弥生時代前期の土坑、後期の溝、鎌倉時代の井戸、室町時代の溝、江戸時代初頭の溝など良好な遺構を検出している。第2次調査は平成9年度に和歌山市教育委員会が行ったもので、遺跡範囲の西端にあたる部分において約15㎡の調査であった。この調査では、遺物包含層と溝1条を検出しているが、全体的に遺物が希薄であり、正確な時期等の確認はできていない。また第3次調査は、平成10年度に財団法人和歌山市文化体育振興事業団が第1次調査地の隣接地3ヶ所（約70㎡）を対象に遺跡確認のために実施したもので、弥生時代前期末から中期初頭にかけての水田や鎌倉時代から室町時代にかけての掘立柱建物、タメマスなどを検出した。

今回の調査は、遺跡南西部において造成工事が行われることになり、この工事に先立つ確認調査を実施することとなった。この調査は、和歌山市教育委員会が国庫補助金を得て、財団法人和歌山市文化体育振興事業団が同教育委員会の指導のもと委託を受けて実施したものである。

現地調査は、平成16年12月20日から12月22日までの3日間で行った。



第1図 調査位置図

2.位置と環境

神前遺跡（1）は、和歌山市域のほぼ中央部、紀ノ川の南岸に所在する。この南岸には東西に連なる岩橋山塊があり、その最も西端である独立山塊の福飯ヶ峯（標高約100m）の西側平野部に位置する。当遺跡の南側には、和歌山市東山東地区の谷部にその源をもつ和田川が西流する。この和田川によって形成された沖積平野を中心として遺跡が立地する（第2図）。

周辺の遺跡では、縄文時代の遺跡として井辺Ⅲ遺跡（3）や岡崎縄文遺跡（4）などがある。岡崎縄文遺跡は、福飯ヶ峯の北西丘陵下に所在する遺跡で、縄文時代後期から晩期にかけての土器の他、ハマグリ、ハイガイ、カキなどの貝層を検出している。弥生時代では、当遺跡の北側に接している井辺遺跡（2）や津秦遺跡（14）、南側に和田遺跡（8）や和田岩坪遺跡（9）など多くの遺跡を数えることができる。井辺遺跡では弥生時代後期の幅4mの間隔をもって東西方向に並んだ2条の土器列が検出された他、中心に木製の井筒を据えた古墳時代の井戸が検出されている。また古墳時代の遺跡としては、東側の福飯ヶ峯に約50基の古墳で形成された井辺前山古墳群（5）が所在し、その東方には全国的にも屈指の群集墳である岩橋千塚古墳群（6）、寺内古墳群（7）などが連なる。井辺前山古墳群の中で盟主墳にあたる井辺前山10号墳（通称井辺八幡山古墳）は、古墳群の中では全長88mを測る最大規模の前方後円墳で、力士埴輪をはじめとする多量の形象埴輪が出土したことで知られている。



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	神前遺跡	弥生	7	寺内古墳群	古墳	13	秋月遺跡	弥生～江戸	19	花山古墳群	古墳
2	井辺遺跡	弥生	8	和田遺跡	弥生	14	津秦遺跡	弥生	20	鳴神貝塚	縄文～弥生
3	井辺Ⅲ遺跡	縄文	9	和田岩坪遺跡	弥生～古墳	15	鳴神Ⅳ遺跡	弥生～平安	21	鳴神Ⅱ遺跡	弥生～平安
4	岡崎縄文遺跡	縄文	10	和田古墳群	古墳	16	鳴神Ⅴ遺跡	弥生～江戸	22	井辺Ⅱ遺跡	弥生～古墳
5	井辺前山古墳群	古墳	11	神前Ⅱ遺跡	古墳～室町	17	津秦Ⅱ遺跡	古墳～奈良	23	大日山Ⅰ遺跡	古墳～奈良
6	岩橋千塚古墳群	古墳	12	太田・黒田遺跡	弥生～江戸	18	菅浦遺跡	古墳	24	井辺Ⅰ遺跡	弥生～古墳

第2図 神前遺跡及び井辺遺跡周辺の遺跡分布図

3.調査の方法と経過

(1) 調査の方法

調査地は、遺跡南西部に位置する水田地帯に位置する（第3図）。調査地の現況は休耕田にあたり、葎が生い茂る状況であった（図版23上）。この状況から、葎を重機によって取り除き、造成後の深掘予定範囲に2×25mの調査区を設定した。重機による掘削は、表土である耕作土と希薄な遺物包含層である第2層について慎重に行い、第2層に含まれた遺物の採集を行った。また調査区内の3ヶ所にサブトレンチを設定し、下層の状況確認を行った。人力による調査は、北東壁面の精査と第2層掘削後の第3層上面における遺構検出を目的とした。

図面による記録は、平面図に関しては、1/200の縮尺を用いた平板測量を行い、縮尺1/2500の国土基本図と照合して位置図とした。壁面の土層堆積状況図については、国家水準点（T.P.値）を基準とし、1/20の縮尺を用いて手実測で行った。土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。

(2) 調査の概要

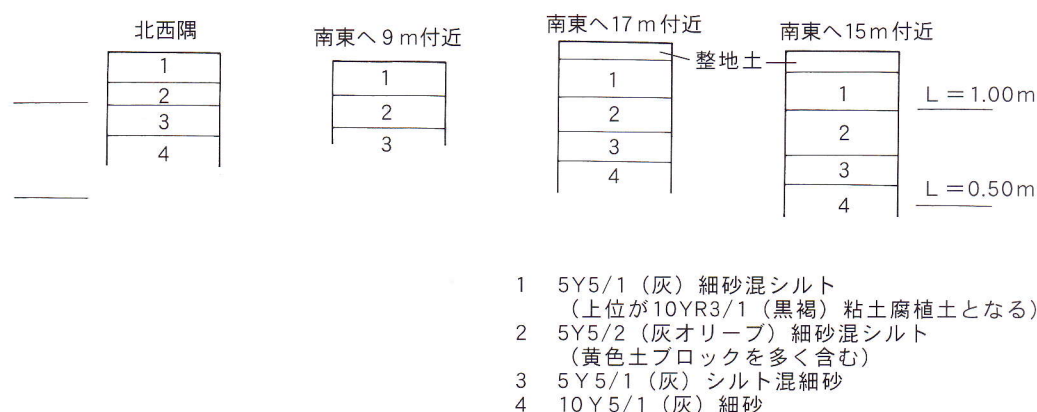
各調査区における基本層序は第3図に示した通りである（図版24）。

まず表土である第1層は、厚さ15～20cmの厚みをもつ水田耕土（現水田面の標高は1.3m）であり、休耕田のため葎が生い茂りその上位は黒褐色に腐植している。また調査区の南東部にのみ灰オリーブ色の粗砂が第1層の上部に整地土として入れられている。第2層は、緩やかに南東部に向かって



第3図 調査区周辺の全体平面図

下降する土層で、厚さ10～25cmの厚みをもつ。この土層には古墳時代の土師器が含まれていることから、当該期の遺物包含層と考えられる。第3層は、第2層と類似する土層であるものの、砂質が強く遺物の包含は認められない。またサブトレンチ内で確認した第4層は、自然堆積層と考えられる灰色細砂で常時湧き水があった。



第4図 調査地土層柱状模式図

4. 遺構

第3層上面における遺構検出の結果、当調査区内では遺構は検出できなかった(図版23下)。また第2層に包含する土器には摩滅が著しいものが多く、北東部の遺跡中心部から後世の水田開発等によってもたらされたものと考えられた。

5. 遺物

今回の調査において出土した遺物はすべて第2層からのものである。出土した遺物のすべては土師器であり、器種として壺・甕・高杯がある。時期としては、古墳時代前期から中期にかけてのものと考えられる。これらの土器は、すべて破片で約50点を数える。

6. まとめ

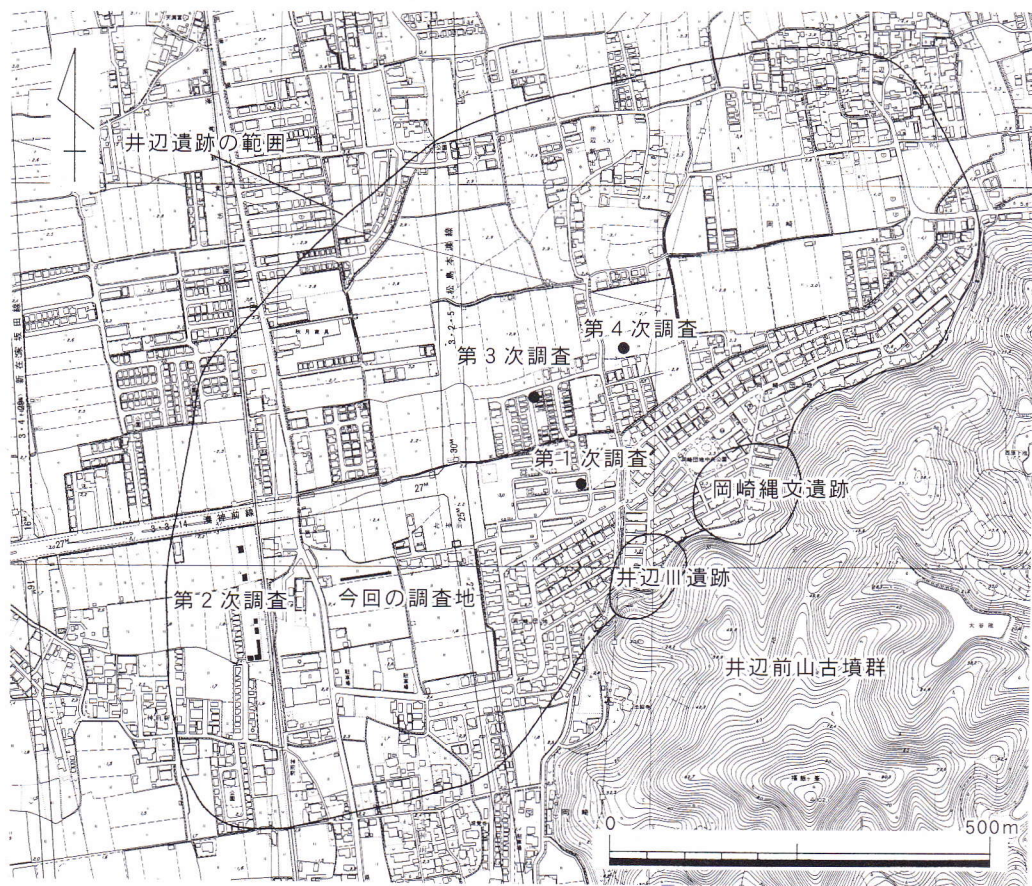
今回の調査地は、神前遺跡範囲の南西部に位置し、水田面の標高が1.0m前後の微低地部に相当する。当遺跡における既往の調査地は、遺跡範囲の東部から中部にかけて行っており、唯一第2次調査地が西部にあたる。この調査は先述の通り小規模であったため、正確な時期等の成果は得られていなかった。また南西部の調査は今回が最初であり、その状況は第2次調査に類似する希薄なものとして位置づけられる。このことから、今回の調査では古墳時代の遺物散布はみられたものの、状況から考えて集落の縁辺部にあたるものと考えられよう。

井辺遺跡 第5次確認調査

1. 調査の契機と経過

今回の調査は、和歌山市神前字舟田121-1・2番地内において造成工事が行われることになり、この場所が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載された周知の遺跡である井辺遺跡（遺跡番号308）の範囲内であったため、和歌山市教育委員会が届け出を行い、この工事に先立つ遺跡確認のための調査を行うこととなった（第1図）。この調査は、同市教育委員会が国庫補助金を得て実施したもので、同教育委員会の指導のもと財団法人和歌山市文化体育振興事業団が委託を受けて行った。

井辺遺跡は、紀ノ川南岸の和歌山平野南東にそびえる岩橋山塊西端の半独立丘陵である福飯ヶ峰の北西山麓部から平野部にかけて位置する遺跡である。当遺跡の推定範囲は東西約1.2km、南北約500mの範囲であり、弥生時代後期から古墳時代前期の遺物散布地として知られている。1964（昭和39）年に和歌山市教育委員会の委託を受けて関西大学考古学研究室が行った第1次調査では、遺跡のほぼ中央部において約4mの間隔で東西方向に並行して延びる2列の弥生時代後期の土器列と井戸1基が検出された。また、1996年には和歌山市教育委員会が遺跡の西側縁辺部での宅地造成に伴い16ヶ所の試掘調査を実施し、良好な遺物包含層を検出した一部の範囲において財団法人和歌山市文化体育振興事業団が第2次調査を行った。調査の結果、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての落ち込み状自然地形を検出した。その後、1996年（第3次）と1998年（第4次）に遺跡中心部で和歌



第1図 調査位置図

山市教育委員会による小規模な調査が行われた。調査の結果、第3次調査では古墳時代初頭の土坑3基、第4次調査で古墳時代初頭の土坑2基が検出された。

以上、これまでの4次の調査成果から、今回の調査地において弥生時代後期から古墳時代前期の遺構が検出されるものと推定された。

現地における調査は、平成17年1月19日から同年1月27日までの期間で実施した。

2. 位置と環境

遺跡分布図については、「神前遺跡確認調査」の項、第2図「神前遺跡及び井辺遺跡周辺の遺跡分布図」(P.28)を参照とする。

井辺遺跡(2)は、紀ノ川南岸の和歌山平野南東にそびえる岩橋山塊西端の半独立丘陵である福飯ヶ峰の北西山麓部から平野部にかけて位置する遺跡である。当遺跡の推定範囲は東西約1.2km、南北約500mの範囲であり、弥生時代後期から古墳時代前期の遺物散布地として知られている。

周辺の遺跡について概観すると、縄文時代の遺跡として、井辺Ⅲ遺跡(3)や岡崎縄文遺跡(4)が井辺遺跡と福飯ヶ峰の北西丘陵部に挟まれた場所に位置する。岡崎縄文遺跡は縄文時代後期から晩期にかけての土器の他、ハマグリ、ハイガイ、カキなどの貝層が検出されている。

弥生時代の遺跡は、井辺遺跡の北西に津秦遺跡(14)、南に接して神前遺跡(1)、さらに南側に和田遺跡(8)、和田岩坪遺跡(9)などが分布している。なかでも、神前遺跡は弥生時代前期からの集落遺跡であることが知られる。

古墳時代の遺跡としては、井辺遺跡の東側に隣接した福飯ヶ峰に約50基の古墳で形成された井辺前山古墳群(5)が位置する。また、その東側には北から花山古墳群(19)、岩橋千塚古墳群(6)、寺内古墳群(7)など県内でも規模の大きい古墳群が連続的にみられ、井辺遺跡の東側一帯は古墳の密集地であるといえる。井辺前山古墳群のなかで、井辺前山10号墳(井辺八幡山古墳)は全長88mを測る最大規模の前方後円墳であり、力士埴輪を含む多量の形象埴輪が出土している。

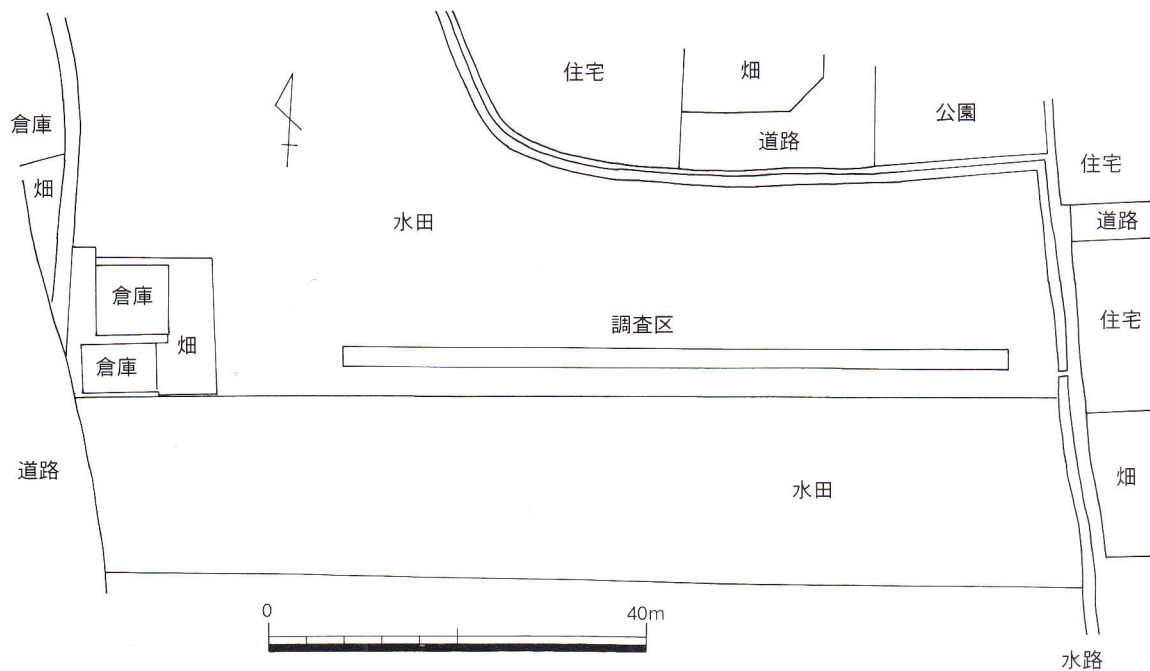
3. 調査の方法と経過

(1) 調査の方法

調査地は、遺跡南西部に位置する水田地帯に位置し、調査地の現況は水田であった(図版25)。

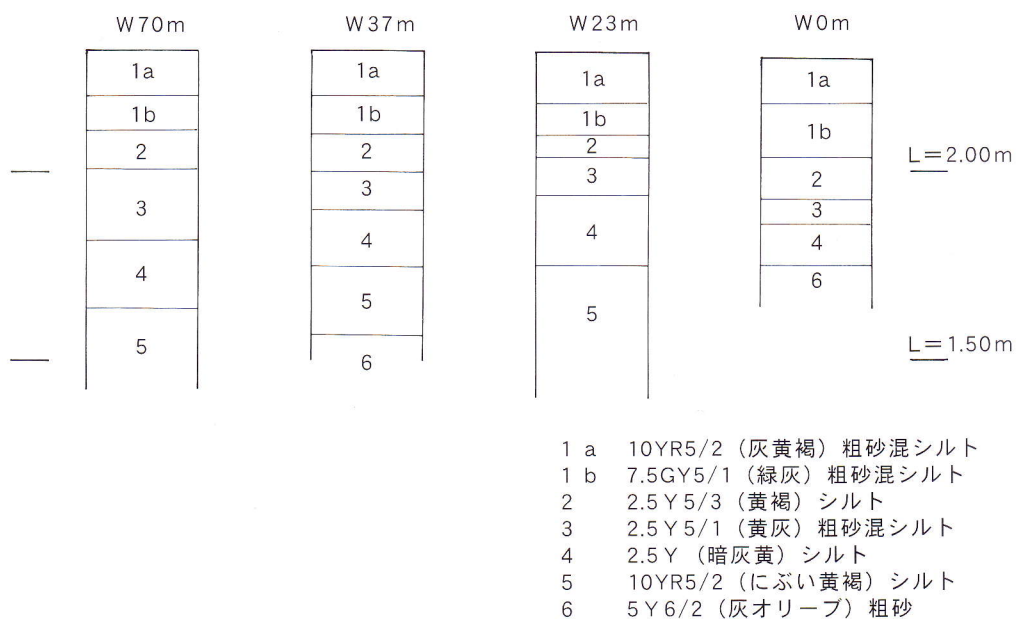
調査は、調査範囲内に幅2mで東西方向に延長約70m、面積約140㎡の調査区を設定した(第2図)。重機による掘削は、表土である耕作土(第1層)と遺物包含層である第2層について行った。また調査区内の5ヶ所に小規模な調査区(サブトレンチ1～5)を設定し、下層堆積状況の確認を行った。その後、人力により北壁面の土層堆積状況の精査と第2層掘削後の第3層上面における遺構検出を行い、土坑・溝等の遺構を検出した。遺構について、一部を掘削し、その規模や出土遺物の採取を行った。

図面による記録について、平面図は1/50の縮尺を用いて手実測で行い、調査地位置図については1/200の縮尺を用いて平板測量を行った(第2図)。壁面の土層堆積状況図については、国家水準点



第2図 調査区周辺の平板測量図

(T.P.値)を基準とし、1/20の縮尺を用いて手実測で行った。土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。実測図作成に際し、調査区の東端を仮原点とし、西方向に1m単位でW1m～W70mと設定した。



第3図 調査地土層柱状模式図

(2) 調査の概要

各調査区における基本層序は第3図に示した通りである(図版28上)。

調査地の地表面標高は2.3mを測る。表土である第1層は厚さ約30cmの厚みの水田耕土であるが、上位約半分を耕作により攪拌されている。便宜上、上位を1a層、下位を1b層とした。第2層は厚さ5~10cmの厚みをもつ黄褐色のシルトであり、床土に相当する層である。第3層は厚さ10~20cmの厚みをもつ黄灰色の粗砂混シルトで古墳時代前期までの遺物を僅かに包含する層であり、この層の上面が遺構検出面である。この第3層上面まで重機により全面掘削を行い、以下の土層堆積は下層堆積状況の確認のための小規模な調査区(サブトレンチ1~5)において確認したものである。第4層は厚さ10~20cmの厚みの暗灰黄色のシルトで、第2~4層はW23m付近を中心に東と西にそれぞれ下降する傾斜をもって堆積している。第5層は厚さ20cm以上のにぶい黄褐色のシルトで、東から西に下降する傾斜をもって堆積するが、東端部にはみられない。第6層は灰オリーブの粗砂で、仮原点とW37m付近で確認した。第4層以下の層からは遺物が出土しなかった。

4. 遺構

第3層上面において古墳時代と鎌倉時代の2時期の遺構を検出した(第4図、図版26・27)。以下、古墳時代と鎌倉時代に分け、時期の判明した主な遺構について述べる。

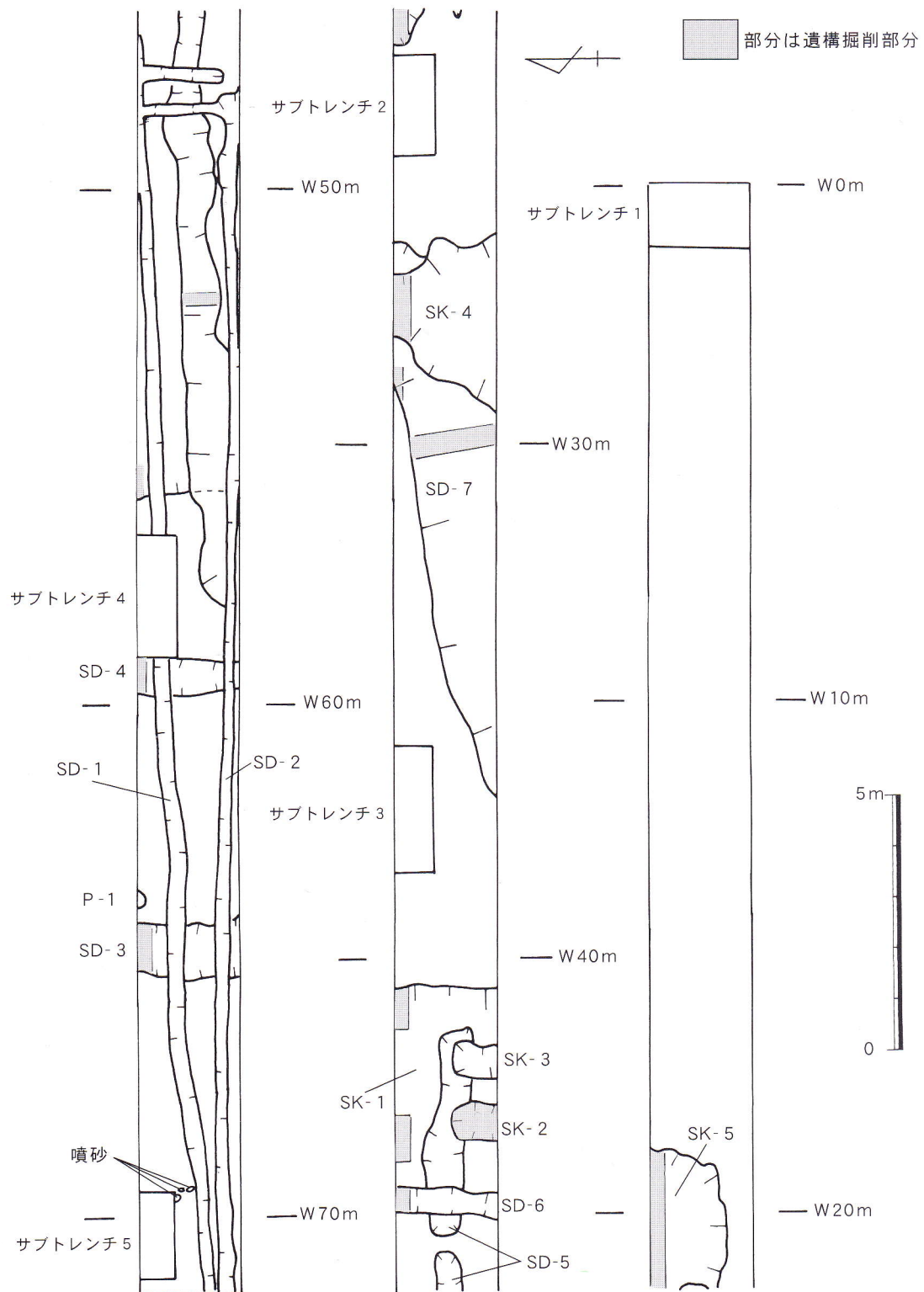
(1) 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構は、SK-1~5、SD-3~7、P-1を検出した。SK-1はW41mからW57m付近まで東西約16m、深さ約10cmを測る浅い落ち込み状の土坑である。SK-2はW43m付近で検出したもので、東西約30cm、南北約40cm以上、深さ約5cmを測る。土師器の細片が多く出土した。SK-5はW20m付近で検出したもので、東西約3m、南北1.5m以上、深さ約10cm以上を測る。SD-3・4・6は同一の南北方向に掘削されたもので、SD-3は幅約1.0m、深さ約10cm、SD-4は幅約80cm、深さ約10cm、SD-6は幅約50cm、深さ約10cmを測る。SD-5は幅約1.0m、検出長約17mを測るSD-3・4・6に直交する東西方向の溝である。

(2) 鎌倉時代の遺構

鎌倉時代の遺構はSD-1とSD-2である。調査区西端から北側にSD-1、南側にSD-2がほぼ平行して掘削されており、東に約23m地点(W47m付近)で直交方向に2本の枝溝を延ばし連結されているものである。SD-1は幅約30cm、深さ約10cm、SD-2は幅約20cm、深さ約10cmを測り、SD-1は延長約24m、SD-2は延長約23m検出した。

なお、調査区西端部で液状化現象によるとみられる噴砂の砂脈を検出した。サブトレンチ5において土層断面を観察したところ、第3~5層を貫き第2層下面で止まっている状況を確認した。おそらくは、第6層の粗砂が地震の影響を受けて吹き出たものとみられ、遺構検出面及び第3層との関係から古墳時代以降で鎌倉時代までの時期のものと考えられる。



第4図 遺構全体平面図

5. 遺物

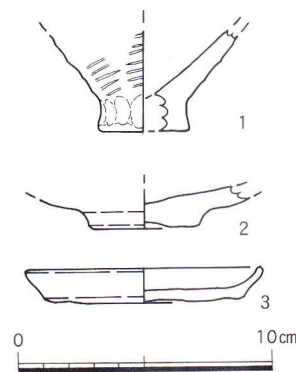
出土遺物は土師器壺・甕・高杯、須恵器甕（図版28下a）、瓦器碗・皿、土師器皿などである。遺物の時期については古墳時代と鎌倉時代のものに二分することができる。遺物は細片が多いため、図化を行えたものは、古墳時代のものでは土師器2点、鎌倉時代のは瓦器1点の合計3点である（第5図、図版28下）。

1は土師器甕の底部である。色調は淡褐色で、外面にタタキ成形痕、底部側面にユビオサエによる指頭圧痕を残すものである。底径3.6cm、残存高4.0cmを測る。

2は土師器壺の底部である。色調は明褐色のもので、球形の体部となるものと考えられる。底径4.4cm、残存高1.5cmを測る。

3は瓦器皿である。色調は黒灰色で、ナデ調整により仕上げられておりミガキは施されていないものである。口径9.4cm、器高1.4cm、底径7.9cmを測る。

遺物の出土位置について、1・2は第2層、3はSD-2からの出土である。



第5図 遺物実測図

6. まとめ

今回の調査では、第3層上面において古墳時代と鎌倉時代の遺構・遺物を検出した。

本調査地は井辺遺跡範囲の南西部に位置し、古墳時代の土坑5基、溝5条など多くの遺構を検出したが、遺跡中央部で行われた第3・4次調査の所見と比較した場合、第3・4次調査ではそれぞれ古墳時代前期の土坑が検出されており、その場所が古墳時代の集落の中心部であるとみられ、本調査地は古墳時代の集落縁辺部である可能性が考えられる。

鎌倉時代の遺構としては溝2条を検出した。これらの溝は、その形状や覆土の性質などから農耕に関わる遺構とみられるが、遺物が比較的多く出土することから鎌倉時代の集落が近辺に存在するものと考えられる。

以上、本調査地において、古墳時代及び鎌倉時代の遺構・遺物を検出したことから、周辺地における開発行為に対しては本発掘調査における記録保存の必要性があるといえる。

【参考文献】

『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報6 —平成8（1996）・9（1997）年度—』 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2000年
『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報7 —平成10年度（1998年度）・11年度（1999年度）—』 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2002年

木ノ本Ⅰ遺跡 確認調査

1.調査の契機と経過

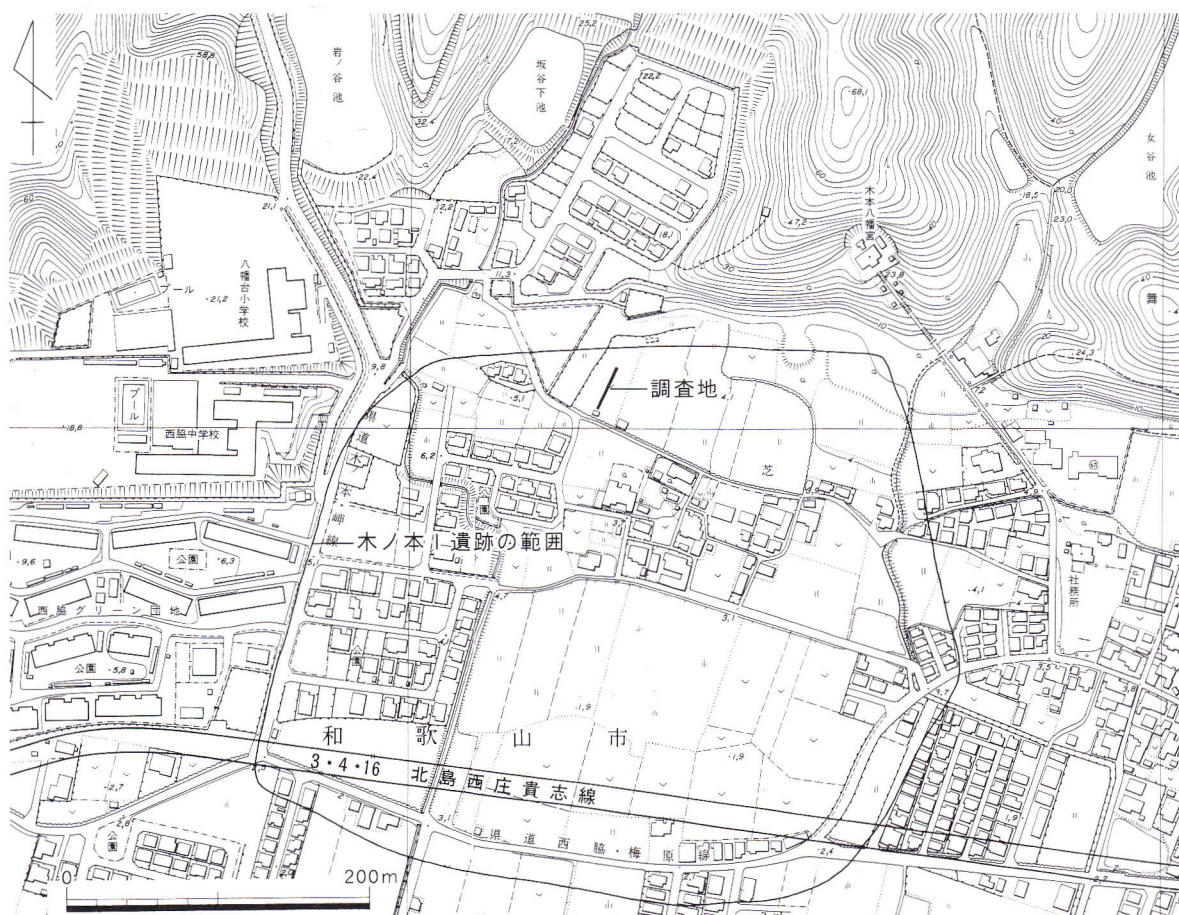
木ノ本Ⅰ遺跡（遺跡番号40）は、和歌山市の北西部、和泉山脈南麓裾部に位置する弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡として周知されている。この遺跡は、東西450m、南北350mの範囲をもち、東端部が木ノ本Ⅱ遺跡と、西端部が西庄Ⅱ遺跡とそれぞれ接している。今回の調査地は、遺跡北端部に位置し、木ノ本八幡宮の南西200mの地点にあたる（第1図）。

この周辺は、和泉山脈の裾部にそって東から木ノ本Ⅲ遺跡、木ノ本Ⅱ遺跡、木ノ本Ⅰ遺跡、西庄Ⅱ遺跡、平の下遺跡、西庄遺跡と遺跡が連なり、紀ノ川河口域北岸の遺跡の密集する地域として位置づけられる。

当遺跡の調査は、昭和52年度から53年度にかけて和歌山県教育委員会が西庄地区遺跡として実施した調査がある。この調査では弥生時代後期の円形竪穴住居1棟、古墳時代前期の方形竪穴住居4棟の他、周囲に溝を巡らした掘立柱建物23棟以上で構成される中世の屋敷地が検出されている。この調査地点は、現行の西庄Ⅱ遺跡（遺跡番号364）と当遺跡の西端部に一部含まれるもので、木ノ本Ⅰ遺跡北部の調査は本調査が最初である。

今回の調査は、遺跡北端部において造成工事が行われることになり、この工事に先立つ確認調査を実施することとなった。この調査は、和歌山市教育委員会が国庫補助金を得て、財団法人和歌山市文化体育振興事業団が同教育委員会の指導のもと委託を受けて実施したものである。

現地調査は、平成17年1月25日から同年1月27日までの3日間で行った。



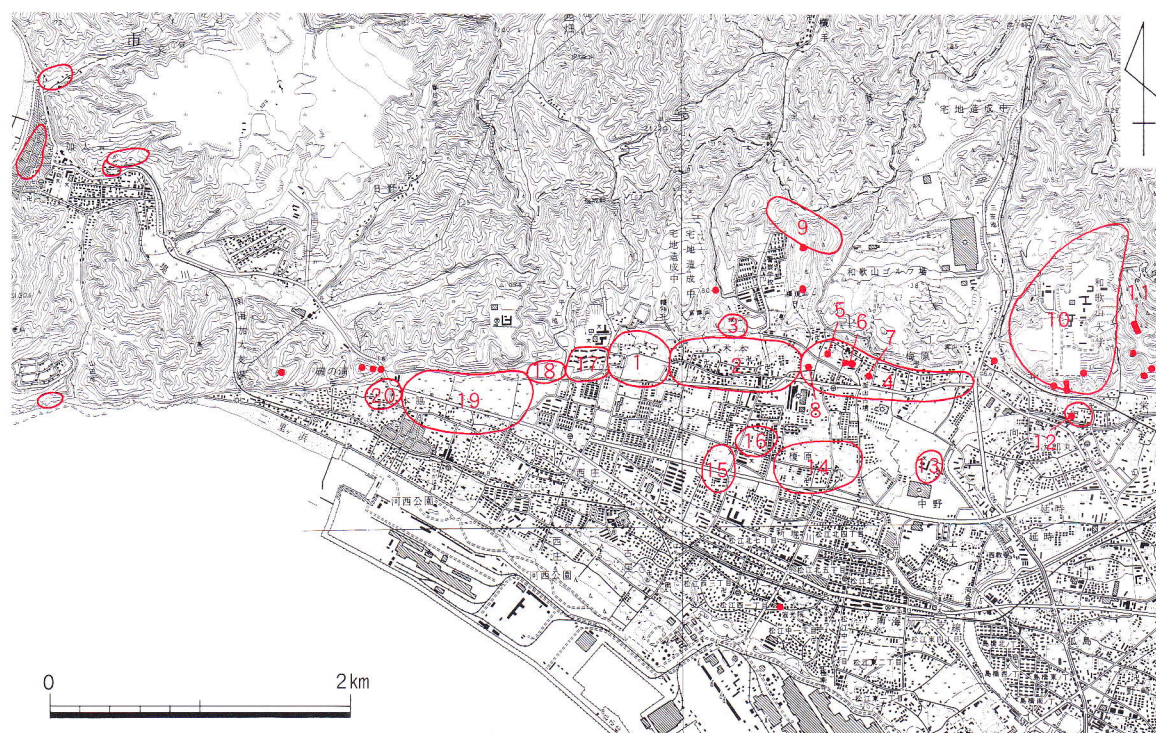
第1図 調査位置図

2.位置と環境

木ノ本Ⅰ遺跡（１）は、和泉山脈南麓の猿坂峠から南に流れる小河川によって形成された扇状地に立地する。この和泉山脈南麓の平野部には、木ノ本Ⅲ遺跡（４）や西庄遺跡（１９）など広範囲の遺跡群が東西に連なっている（第２図）。

周辺の遺跡を概観すると、旧石器時代の遺跡としてナイフ形石器が出土した西庄Ⅱ遺跡（１７）が知られている。縄文時代では木ノ本Ⅱ遺跡（２）や木ノ本Ⅳ遺跡（９）がある。木ノ本Ⅱ遺跡では縄文時代晩期の土器が表採されているが、詳細は不明とされる。また弥生時代の明確な遺構が検出されている遺跡としては、冒頭にふれた当遺跡だけである。

古墳時代では、平野部を中心として集落が形成されている。西庄遺跡（１９）は県内最大規模を誇る製塩遺跡として知られている遺跡で、古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物、石敷製塩炉、古墳などが検出されている。これまでの調査成果から、遺跡の西部を作業域、中央部を居住域、東部を墓域として土地利用を行っていたことが判明している。また木ノ本Ⅲ遺跡の範囲内には、茶臼山古墳（５）・車駕之古址古墳（６）・釜山古墳（７）で構成される木ノ本古墳群が含まれている。このうち、車駕之古址古墳は全長86mの前方後円墳で、周濠と外堤を含めると全長120mにも及ぶ県内最大規模の中期古墳として位置づけられている。奈良時代では、平城宮から出土した木簡に海部郡可太郷から塩を納めていたことを示す調の荷札が出土しており、海浜部において引き続き土器製塩



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	木ノ本Ⅰ遺跡	弥生～古墳	6	車駕之古址古墳	古墳	11	川原崎遺跡	奈良	16	木本小学校Ⅱ遺跡	古墳
2	木ノ本Ⅱ遺跡	縄文～室町	7	釜山古墳	古墳	12	貴志古墳	古墳	17	西庄Ⅱ遺跡	旧石器・鎌倉～江戸
3	城山遺跡	安土・桃山	8	木ノ本経塚	鎌倉	13	中野遺跡	古墳～鎌倉	18	平の下遺跡	弥生～鎌倉
4	木ノ本Ⅲ遺跡	古墳～江戸	9	木ノ本Ⅳ遺跡	縄文・中世	14	榎原遺跡	古墳	19	西庄遺跡	古墳～鎌倉
5	茶臼山古墳	古墳	10	高芝遺跡	弥生～江戸	15	木本小学校Ⅰ遺跡	古墳	20	磯脇遺跡	鎌倉

第２図 木ノ本Ⅰ遺跡周辺の遺跡分布図

が行われていたものと考えられる。

鎌倉時代以降では、城山遺跡（3）、木ノ本Ⅲ遺跡、木ノ本経塚（8）、中野遺跡（13）、西庄遺跡などがある。木ノ本Ⅲ遺跡では梵字文を瓦当文様とする軒丸瓦が出土しており、寺院の存在が考えられている。同遺跡の範囲内には須恵器を外容器とし、和鏡を納めた木ノ本経塚が存在する。また西庄遺跡では、遺存状態の良い人骨と輸入陶磁器、和鏡などを副葬した土坑墓が検出されている。中野遺跡は、雑賀衆の紀ノ川北岸地域の拠点となる平城（中野城）推定地である。これまで2度の調査が行われ、幅7m、深さ0.9mの大溝を65m分検出した他、中国製の青磁・白磁・染付などの輸入陶磁器や備前焼、丹波焼などの国産陶器が多量に出土しており、中野城の位置づけをより明確にしている。また城山遺跡は、標高約40mの独立丘陵に位置する城跡で、丘陵頂部に方形の土塁を巡らし、南側に開口した入口部に門柱礎石を4基検出している。このことから、天正5（1577）年の織田信長による紀州攻めの際の陣城ではないかと推定されている。

3. 調査の方法と経過

（1）調査の方法

調査地は、遺跡北部に位置する住宅地に囲まれた水田である（第3図、図版29）。調査区は、造成工事後の汚水管理設予定部分に幅2m、総延長30mを設定した。重機による掘削は、表土である



第3図 調査区周辺の全体平面図

耕作土（第1層）と希薄な遺物包含層である第2～4層について慎重に行い、これらの土層に含まれた遺物の採集を行った。S 8 m地点から南側については、下層の状況確認のため第5層までの掘削とした。また調査区内の東壁下3ヶ所にサブトレンチを設定し、さらに下層の状況確認を行った。人力による調査は、東壁面の精査と第6層上面（S 8 mまでは第5層上面）における遺構検出を目的とした。

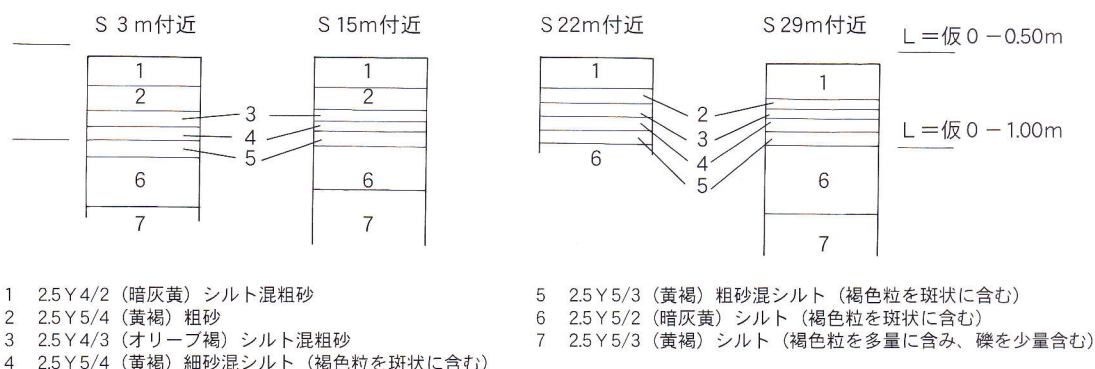
図面による記録は、平面図に関しては、1/200の縮尺を用いた平板測量を行い、縮尺1/2500の国土基本図と照合して位置図とした。また遺構配置図は、1/50の縮尺を用いて手実測で行った。壁面の土層堆積状況図については、仮原点（仮水準値0）を調査区外に設定し、仮原点からのマイナス値を基準として1/20の縮尺を用いて手実測で行った。土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。

（2）調査の概要

各調査区における基本層序は第4図に示した通りである（図版31）。上位にあたる第1・2層上面が南に向けて下降するのに対し、第3層より下位にあたる土層上面は北に向けて緩やかに下降する傾斜をもつ。

まず表土である第1層は、厚さ15cm程度の厚みをもつ水田耕土であり、その水田面の標高は、縮尺1/2500の国土基本図に記された近辺の地表面の標高から5.8m程度と推定できる。第2・3層は類似する褐色系の粗砂層で、北から南に向かって薄くなっていく傾向を示す。第4層は、厚さ5cm程度の厚みをもつ黄褐色系の細砂混シルトで、中世土師器及び瓦器が比較的多く出土した。第5層は、厚さ5～10cmの厚みをもつ黄褐色系の粗砂混シルトで、土師器及び須恵器が出土した。

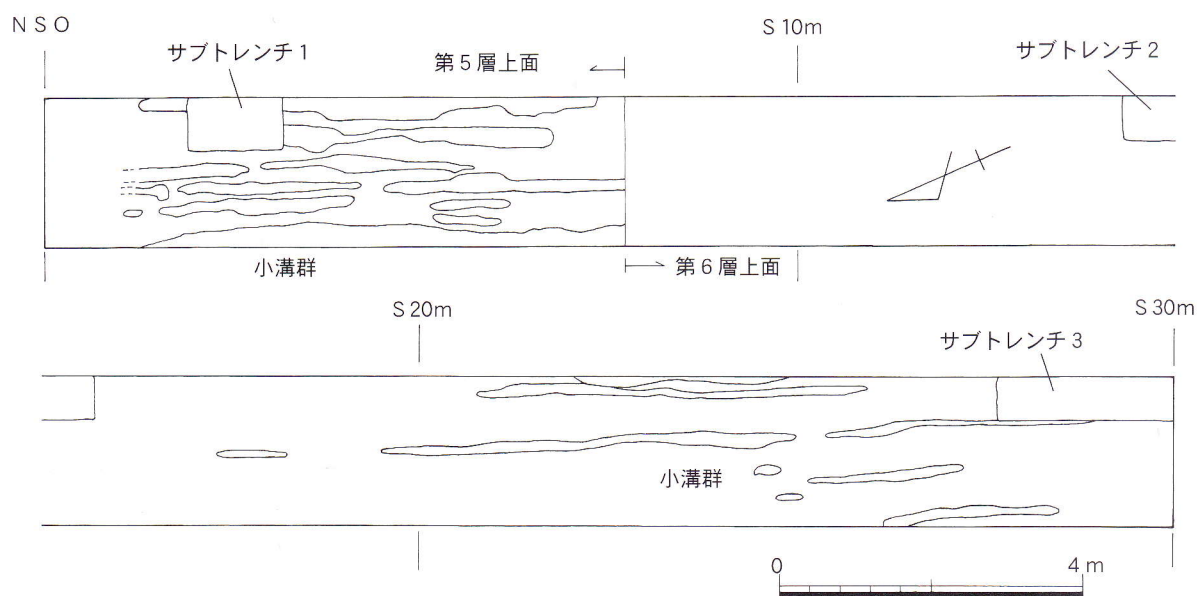
第6・7層は、3ヶ所のサブトレンチ内においてその状況を確認したものである。第6層は、20～40cmの厚みをもつ暗灰黄色系のシルト質層であり、その下位に黄褐色のシルト（第7層）が堆積している。ともに褐色粒を多く含む土層で、今回の調査では遺物の出土が認められず無遺物層と考えられる。



第4図 調査地土層柱状模式図

4. 遺構

調査区北端部の S 8 m 地点までの遺構検出の結果、第 5 層上面では耕作に伴うと考えられる小溝を 9 条検出した（第 5 図、図版 30 下）。また S 8 m 地点以南の第 6 層上面では、この面から掘り込まれた遺構は検出できず、上面の第 5 層に対応する小溝群の残欠 8 条のみが検出できた（図版 30 上）。これらの小溝は、すべて調査区にほぼ平行する南北方向のもので、幅 5 ～ 30 cm、深さ 5 ～ 10 cm 程度のものである。覆土はすべて暗灰黄色のシルト混細砂であり、瓦器及び中世土師器等が出土したことから中世の範疇に含まれるものと考えられる。

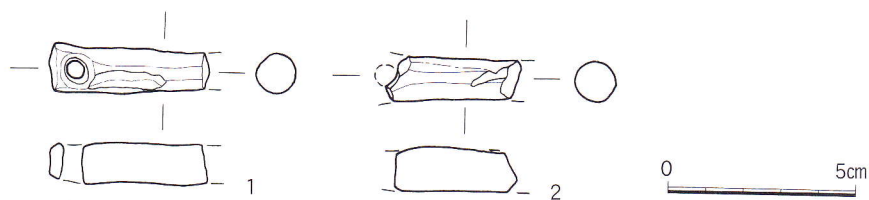


第 5 図 遺構全体平面図

5. 遺物

今回の調査において出土した遺物は、第 1 ～ 5 層の堆積層と第 5 層上面において検出した小溝群からのものである。出土した遺物は、土器類として土師器、須恵器、中世土師器、瓦器があり、土器以外に江戸時代のものと考えられる瓦 2 点の他、土錘 2 点などがある。遺物量としては、鎌倉時代を中心とした中世のものが比較的多く、次いで古墳時代前期から後期にかけてのものが一定量みられる。これらの土器は、すべて破片で約 150 点を数える。

以下、土錘について詳細を述べる（第 6 図）。土錘 2 点はともに有孔土錘であり、第 5 層から出土したものである。1 は残存長 4.2 cm、幅 1.1 cm、厚さ 1.1 cm、孔径 6 mm の法量をもつもので、重量は 6.1 g を量る。1/3 程度を欠失しているものと考えられる。2 は両端部を欠失しているもので、残存長 3.4 cm、幅 1.1 cm、厚さ 1.2 cm の法量もち、重量は 5.2 g を量る。これらは、微量の赤色軟質粒を含むものの比較的緻密な胎土をもつ。また焼成は良好で淡赤褐色に発色し、2 の側面には黒褐色の黒斑が認められる。



第6図 遺物実測図

6.まとめ

今回の調査地は、木ノ本Ⅰ遺跡範囲の北部に位置し、水田面の標高が5.8m前後の扇状地上に相当する。当遺跡及び周辺における既往の調査は、遺跡範囲の西部から西側に隣接する西庄Ⅱ遺跡にかけて行っており、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落跡や中世の周囲に溝を巡らした屋敷地が検出されている。このことから、今回の調査においても同時期の遺構・遺物が検出されるものと考えられた。

調査の結果、当調査地において検出した遺構は、中世の範疇におさまるものと考えられる小溝群のみであった。この小溝群は農耕に係るものとみられ、中世には耕地としての土地利用が行われていたものと考えられる。また古墳時代以前の遺構面と考えられる第6層上面では、遺構は確認できなかった。しかし、直上層である第5層には古墳時代前期から後期にかけての遺物が含まれていることから、近接する地域に遺構等が存在する可能性が考えられよう。

直川地区 試掘調査

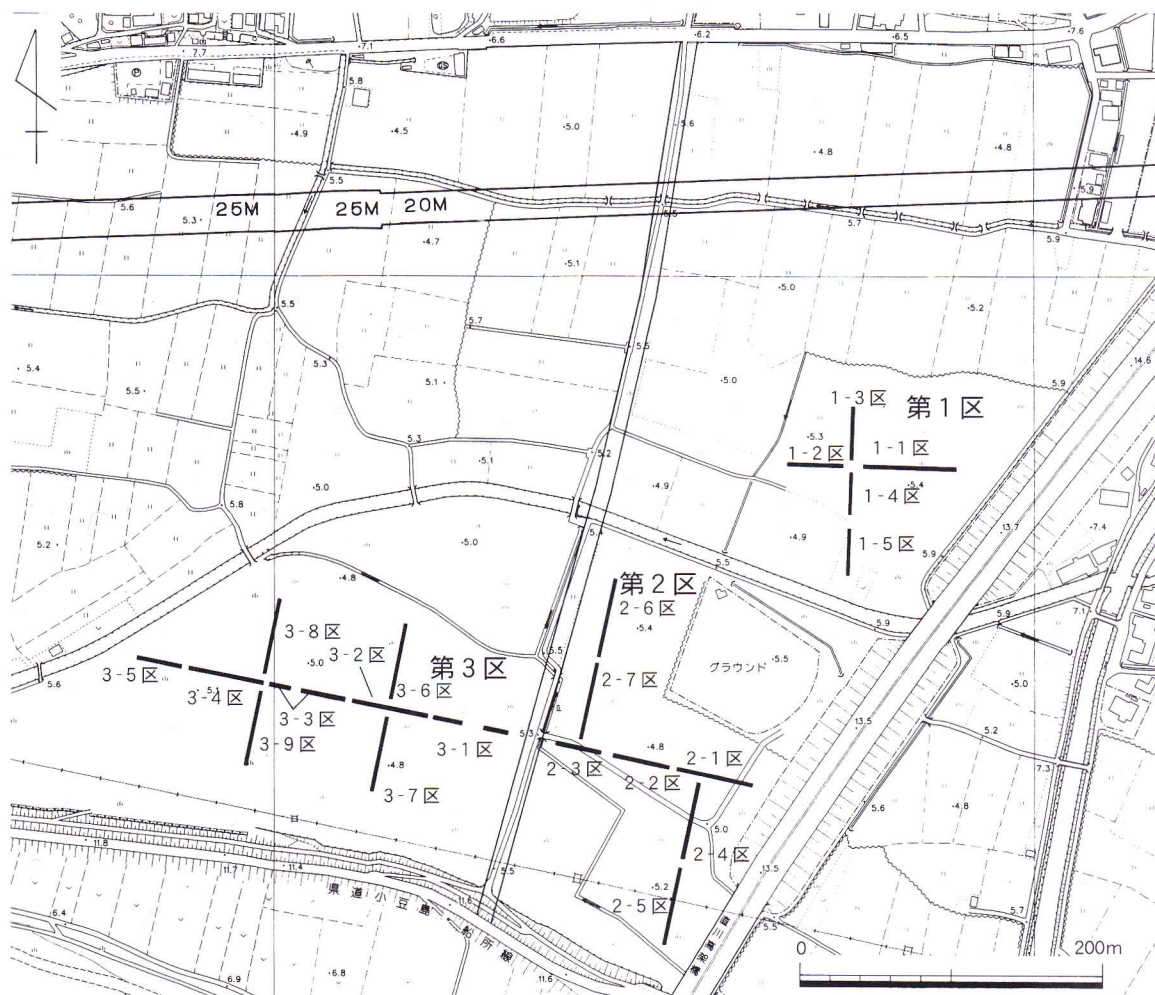
1.調査の契機と経過

今回試掘調査を実施した直川地区周辺は、和歌山市のほぼ中央部、紀ノ川北岸堤防下の広域な水田地帯に位置する。この周辺は、紀ノ川北岸の遺跡の密集する地域であり、当地区は周囲を遺跡に囲まれた空白地帯であった。当地区の東方400mには古墳時代を中心とする集落遺跡である田屋遺跡をはじめ、西田井遺跡、北田井遺跡と広域である遺跡群が連なり、北方には府中IV遺跡、鳥井遺跡、高井遺跡、直川廃寺跡などが、さらに西方には六十谷遺跡、川口遺跡が位置し、また南側に位置する紀ノ川中州からは突線紐式袷袢文銅鐸が出土している。また当地域は、古代の直川郷の中心地とされ、条里制の遺構が残るとされる地域でもある。このような立地条件の中、当地における埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を実施することとなった。

調査対象地は、水田地帯の一角にあたる広域な荒蕪地であり、この対象地の中央部を六ヶ井用水が西流する。また用水路南側の一部はグラウンドとして使用されている（第1図）。

今回の調査は、今後の開発計画に対して迅速に対処するため、和歌山市教育委員会が国庫補助金を得て、財団法人和歌山市文化体育振興事業団が同教育委員会の指導のもと委託を受けて実施したものである。

現地調査は、平成17年1月31日から同年2月25日までの約1ヶ月間で行った。



第1図 調査位置図

2.位置と環境

直川地区は、和歌山市の中央部、紀ノ川河口から約8km遡った北岸の沖積平野に位置する。この調査地周辺は、標高5.2m前後の沖積平野部にあたり、広域な水田地帯の一角に立地する（第2図）。

本調査地周辺の遺跡を概観すると、東方400mには弥生時代から古墳時代の集落跡として周知されている田屋遺跡（1）がある。この遺跡は東西1km、南北750mを範囲とし、東端部を弥生時代から室町時代にかけての集落跡である西田井遺跡（2）と接している。田屋遺跡では、一般国道24号バイパス関連の調査によって弥生時代後期から古墳時代後期にかけての竪穴住居約50棟の他、掘立柱建物や溝、旧河道、平安時代の掘立柱建物などが検出されている。また財団法人和歌山市文化体育振興事業団が行った平成16年度の調査では、遺跡東部において古墳時代を通した水田跡を検出し、居住域と生産域の範囲が推定されつつある。西田井遺跡では、弥生時代後期の直径10mを超える大型住居やベッド状遺構、貯蔵穴をもつ竪穴住居などの他、室町時代の掘立柱建物や井戸などが検出されている。また北方700mの標高約25mの丘陵上に所在する府中IV遺跡（14）においても弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居を10棟以上検出し、そのうち古墳時代前期の方形住居は、一辺8.6mを測る県内最大規模である大型住居として注目できる。同じく、丘陵上に所在する高井遺跡（12）でも古墳時代の竪穴住居2棟の他、平安時代から鎌倉時代にかけての掘立柱建物や北宋銭15枚が副葬された土葬墓が検出されている。



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	田屋遺跡	弥生～江戸	7	有功遺跡	古墳～中世	13	鳥井遺跡		19	弘西遺跡	弥生
2	西田井遺跡	弥生～室町	8	六十谷遺跡	縄文～弥生	14	府中IV遺跡	弥生～古墳	20	府中遺跡	奈良～平安
3	北田井遺跡	弥生～古墳	9	川口遺跡	弥生～古墳	15	北山古墳群	古墳	21	府中II遺跡	弥生
4	宇田森遺跡	弥生	10	直川遺跡	縄文	16	直川八幡山古墳群	古墳	22	府中III遺跡	縄文
5	紀ノ川銅鐸出土地	弥生	11	直川廃寺跡	奈良～平安	17	八王寺山古墳群	古墳	23	上野廃寺跡	白鳳～平安
6	鳴滝古墳群	古墳	12	高井遺跡	縄文	18	橘谷I～III遺跡	弥生	24	川辺遺跡	縄文～江戸

第2図 直川地区及び弘西地区周辺の遺跡分布図

3.調査の方法と経過

(1) 調査の方法

調査地は、標高約5.2mの沖積平野に位置し、紀ノ川北岸の堤防下に広がる広域な水田地帯に立地する。当地の現況は、葦やススキなどが生い茂る荒蕪地であり、その一部がグラウンドとして使用されている（図版32）。調査地は、道路及び水路を境として3ヶ所に分断されているため、北東側の調査区から第1区とし、第3区まで順次番号を付した。調査区は、荒蕪地を中心として基本的に東西方向及び南北方向に幅2mのトレンチを設定し、延長50m程度を基本として各地区の細分を行い調査区を設定した（第1図）。各調査区の規模は、調査面積一覧表の通りである。

重機による掘削は、遺構面として捉えられる土層直上までを基本として慎重に行い、遺構面が存在しないと判断した調査区に限り、自然堆積層と考えられる土層まで掘削を行った。そして、各調査区の掘削面における遺構検出を目的とした。また各調査区において数箇所のサブトレンチを設定し、下層の状況確認を行った。人力による調査は、東西方向の調査区では北壁面、南北方向の調査区では東壁面の精査を行い、土層の堆積状況を確認した。

図面による記録は、平面図に関しては、1/200の縮尺を用いた平板測量及び遺跡調査汎用システムカタタを用いた測量を行い、縮尺1/2500の国土基本図と照合して位置図とした。また遺構配置図は1/50の縮尺を用いて手実測で行った。壁面の土層堆積状況図については、国家水準点（T.P.値）を基準とし、1/20の縮尺を用いて手実測で行った。土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。

(2) 調査の概要

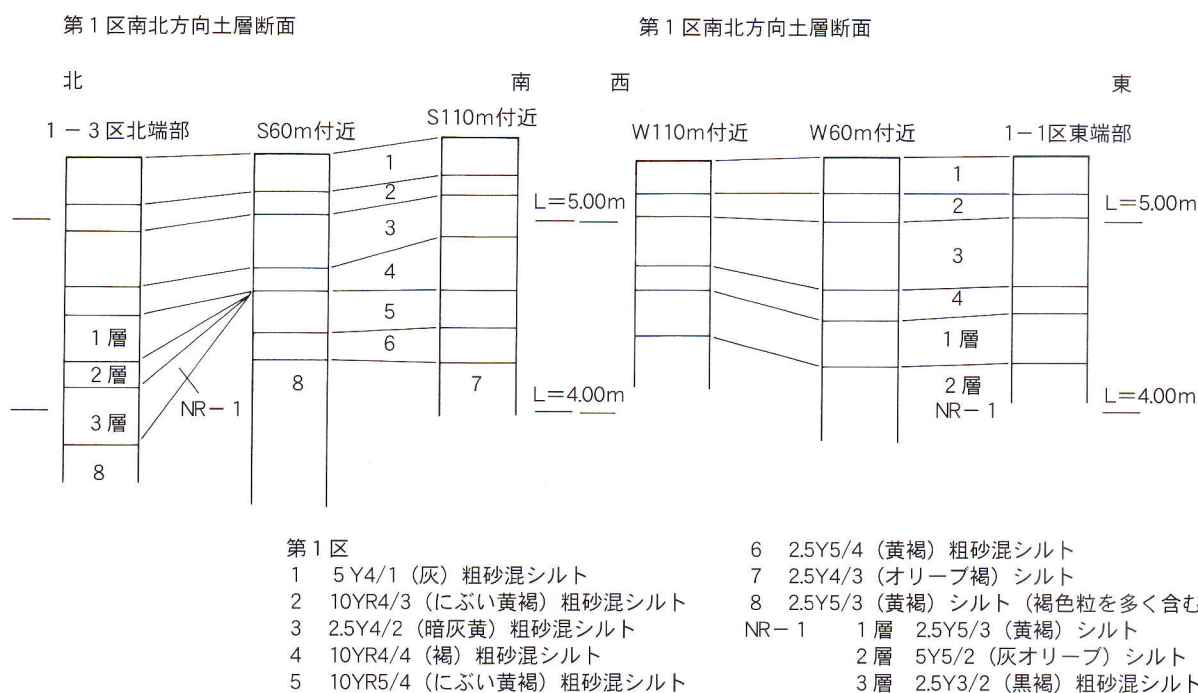
各調査区における基本層序は第3・4図に示した通りであり、調査対象地を東西に横断する水路を境として第1区と第2・3区ではその様相が異なる。

第1区は、全面にほぼ共通した土層堆積の状況を確認した（第3図、図版36）。まず、表土である第1層は厚さ15～25cmの厚みの水田耕土である。第2層は厚さ10～15cmの厚みをもつ粗砂を含む黄褐色のシルトであり、床土に相当する土層である。第3層は厚さ25～40cmの灰黄色の粗砂混シルト、第4層は厚さ10～30cmの褐色の粗砂混シルトが堆積する。第5層以下は全てシルトの堆積で、第5層は暗灰黄色の厚さ20～30cm、第6層は黄褐色の厚さ10～20cm、第7層は黄褐色の厚さ30cm以上、第8層は黄褐色の厚さ80cm以上の層が堆積している。遺物の包含は第6層まで確認し、第5層上面において奈良時代から平安時代にかけての遺構面を検出した。なお、第3層上面と第4層上面で内部に円礫を充填した暗渠排水溝を確認しており、これらは中世から近世にかけての農地開発に関わるものであると考えられる。

地表面の標高について、第1区南端部が約5.5mを測り最も高く、北に向かい緩やかに傾斜しており、第1区北端部では標高5.3mまで下降している。なお、第1～5層までは地表面と同様の傾斜をもった堆積状況を観察した。

調査面積一覧表

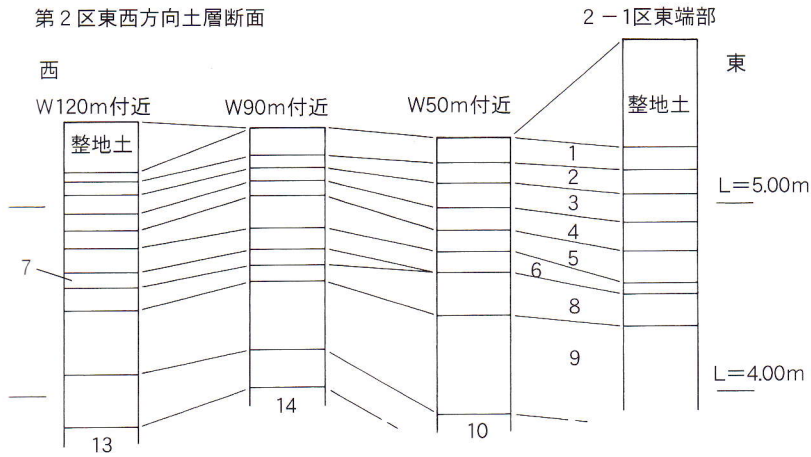
調査区	規模 (東西×南北m)	面積(m ²)
1-1区	61.3×2.0	122.6
1-2区	36.4×2.0	72.8
1-3区	2.0×34.0	68.0
1-4区	2.0×26.1	52.2
1-5区	2.0×29.5	59.0
2-1区	50.7×2.0	101.4
2-2区	37.5×2.0	75.0
2-3区	2.0×30.5	61.0
2-4区	2.0×51.2	102.4
2-5区	2.0×50.8	101.6
2-6区	2.0×51.8	103.6
2-7区	2.0×50.0	100.0
3-1区	35.4×2.0	70.8
3-2区	50.2×2.0	100.4
3-3区	44.5×2.0	89.0
3-4区	50.0×2.0	100.0
3-5区	30.0×2.0	60.0
3-6区	2.0×50.4	100.8
3-7区	2.0×50.2	100.4
3-8区	2.0×50.0	100.0
3-9区	2.0×50.0	100.0
合 計		1841.0



第3図 第1区土層柱状模式図

次に第2・3区の堆積は、第1区と同様に厚さ15~20cmの厚みをもつ水田耕土(第1層)が東から西に向かって緩やかに下降する傾斜をもって堆積している(第4図、図版39・40・44・45)。第1層上面の標高は、第2区で5.4m前後と高く、第3区西端部では5.1mと低くなる。また第1層の上部には部分的に整地土を施した地点がある。第2~8層は、厚さ5~20cmの厚みで堆積した粗砂及び細砂混じりのシルト質層で、地点によってその単位は異なるものの第2・3区を通して確認できた土層である。特に、第6層及び第7層は5cm程度の厚みで2~4単位に細分できる堆積である。これらの堆積は、東西方向では2-2区及び3-2区周辺が最も高く、この2つの調査区間が谷状に落ち込む状況である。さらに、第2区では東に向け、第3区では西に向けて下降する堆積を示す。また南北方向では、相対的にみて南から北に向けて緩やかに下降する傾斜をもつ。第9層は、谷状地形に比較的厚く堆積した灰黄褐色系の細砂混シルト層で、その単位は2~4単位に細分できる。第10層は第2区においてのみ検出したにぶい黄褐色系の細砂混シルト層である。第11~13層は厚さ10~50cmの厚みで堆積した褐色系の粗砂層で、各地点でその厚みなどが異なる。さらに下層には、にぶい黄褐色の粘土(第14層)が堆積し、この土層の上面において著しい湧き水があった。出土遺物からみて、第8層以上の土層では肥前系の陶磁器などが出土していることから第8層より上位は、すべて江戸時代以降の堆積と考えられる。また、それより下位にあたる土層には遺物が含まれていなかったことから、堆積の時期については確認することができなかった。

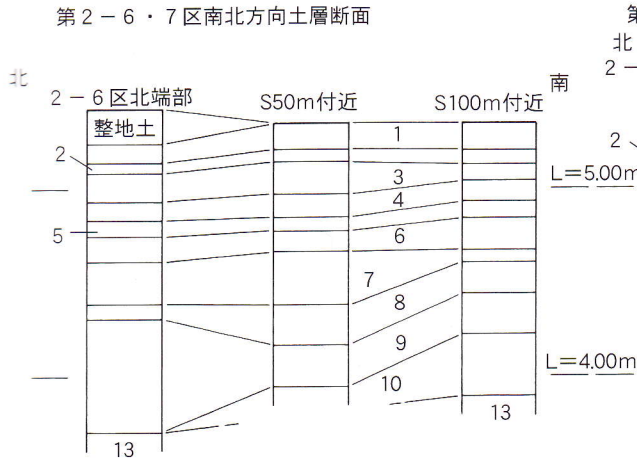
第2区東西方向土層断面



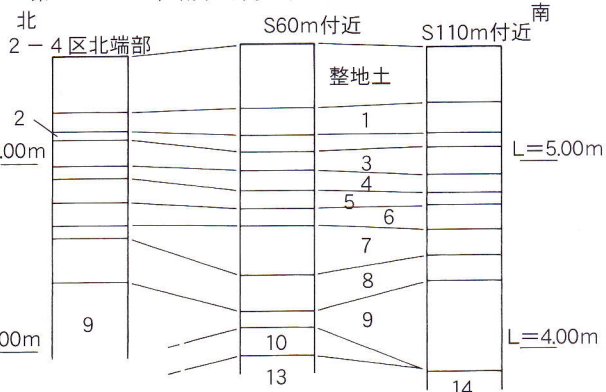
第2・3区

- 1 N5/0 (灰) 細砂混シルト
- 2 2.5Y5/4 (黄褐) 細砂混シルト
- 3 2.5Y5/1 (黄灰) 粗砂混シルト
- 4 2.5Y6/3 (にぶい黄) 細砂混シルト
- 5 10YR5/4 (にぶい黄褐) 粗砂混シルト
- 6 2.5Y5/2 (暗灰黄) シルト混粗砂
- 7 2.5Y6/2 (灰黄) 粗砂混シルト
- 8 2.5Y6/2 (灰黄) シルト混粗砂
- 9 10YR6/2 (灰黄褐) 細砂混シルト
- 10 10YR5/4 (にぶい黄褐) 細砂混シルト
- 11 10YR4/6 (褐) 粗砂
- 12 2.5Y5/4 (黄褐) 粗砂
- 13 2.5Y4/3 (オリーブ褐) 粗砂
- 14 2.5Y4/3 (オリーブ褐) 粗砂
(上位に2.5Y5/4 (黄褐) 細砂混粘土を含む)
- 15 10YR5/4 (にぶい黄褐) 粘土

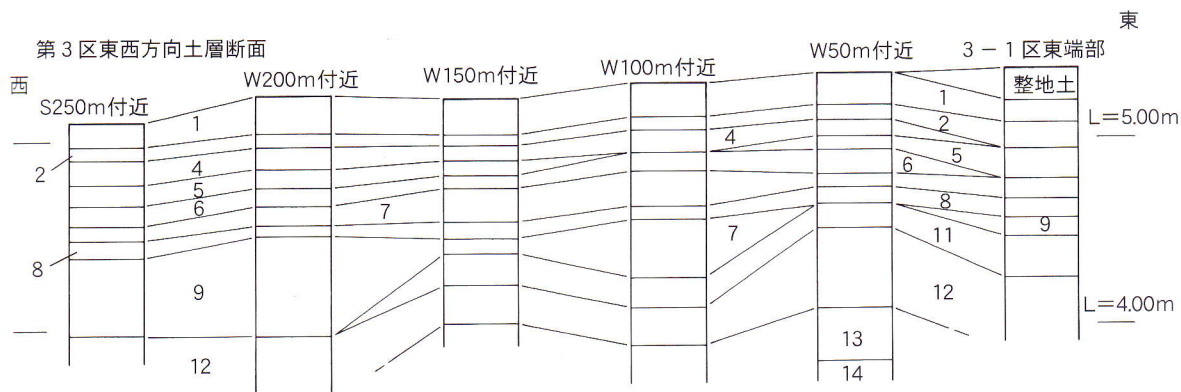
第2-6・7区南北方向土層断面



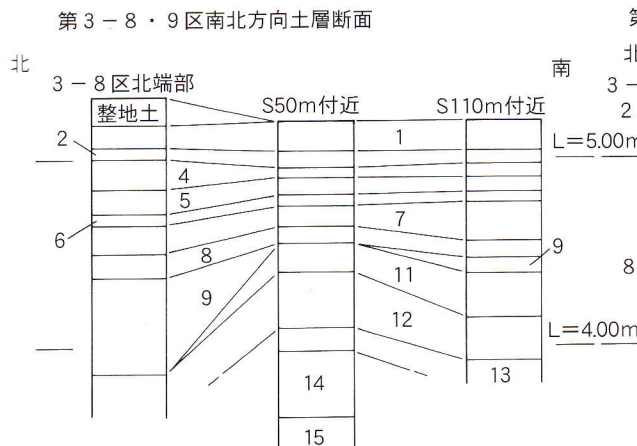
第2-4・5区南北方向土層断面



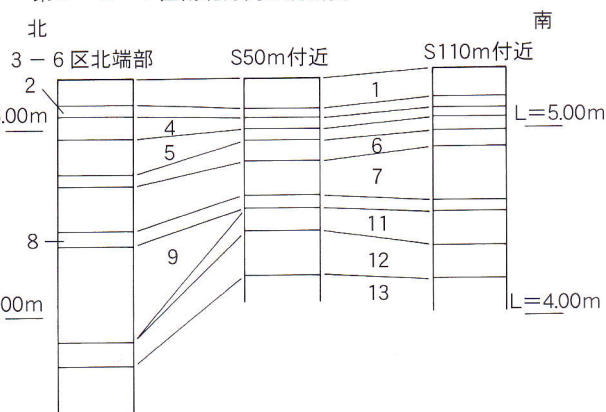
第3区東西方向土層断面



第3-8・9区南北方向土層断面



第3-6・7区南北方向土層断面



第4図 第2・3区土層柱状模式図

4. 遺構

今回の調査において明確な遺構を検出したのは第1区のみであり、第2・3区では江戸時代の耕作に伴う小溝群や自然流路、噴砂などを検出したに過ぎない。

(1) 第1区検出の遺構 (第5図、図版33・34)

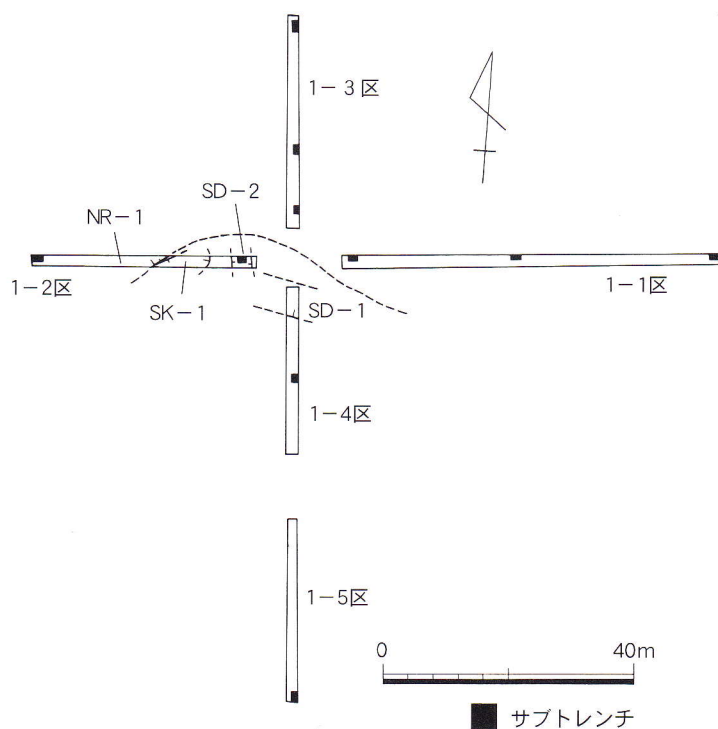
第1区において、調査区中央部で奈良時代から平安時代にかけての遺構面を検出した。遺構は、第5層上面において土坑1基(SK-1)、溝2条(SD-1・2)を検出した他、自然流路1条(NR-1)がある。

SK-1は1-2区東側で検出した土坑である。東西5.0m、南北2.0m以上、深さ40cm以上を測る(図版35上)。

SD-1はSK-1に切られるもので、1-4区北端部及び1-2区の壁面で検出した(図版35下)。東西方向のもので、幅4.5m以上、1-2区での壁面土層観察からみて延長15m以上の規模を測る。

SD-2は1-2区東端部の北壁で検出したものであり、幅約4.0m、深さ約50cmを測る。

NR-1は1-2区で検出したものであり、SK-1の西側肩部を切り込んでおり、その覆土の特徴から、1-1区及び1-3区は全てこの自然流路内部であると考えられる。第1区北半を含み、調査区北側を東から西に流れるものとみられ、幅38m以上、長さ110m以上、深さ70cm以上の規模を測る。



第5図 第1区遺構全体平面図

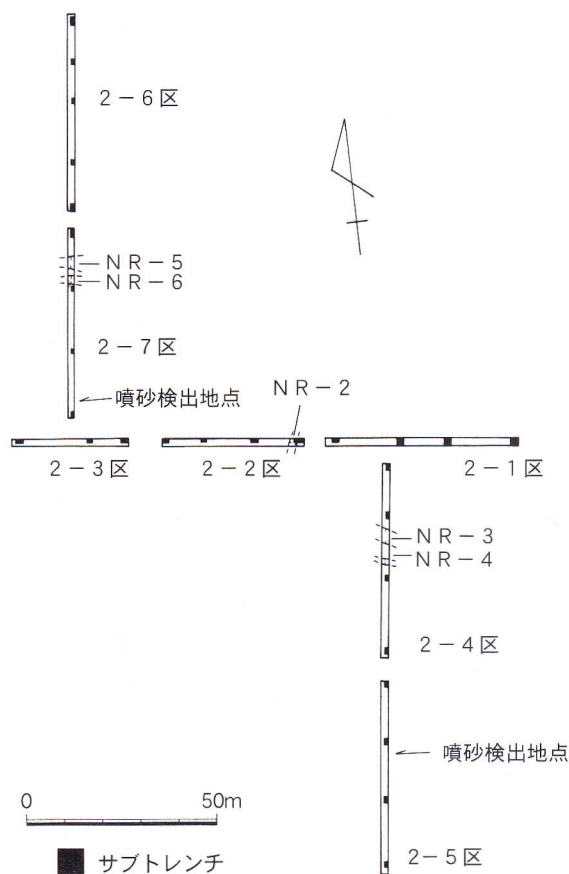
出土遺物の時期及び遺構の切り合い関係などから、SD-1は奈良時代後期、SK-1・SD-2・NR-1は平安時代前期を中心とした時期と考えられる。

(2) 第2・3区検出の遺構 (第6・7図、図版37・38・41～43)

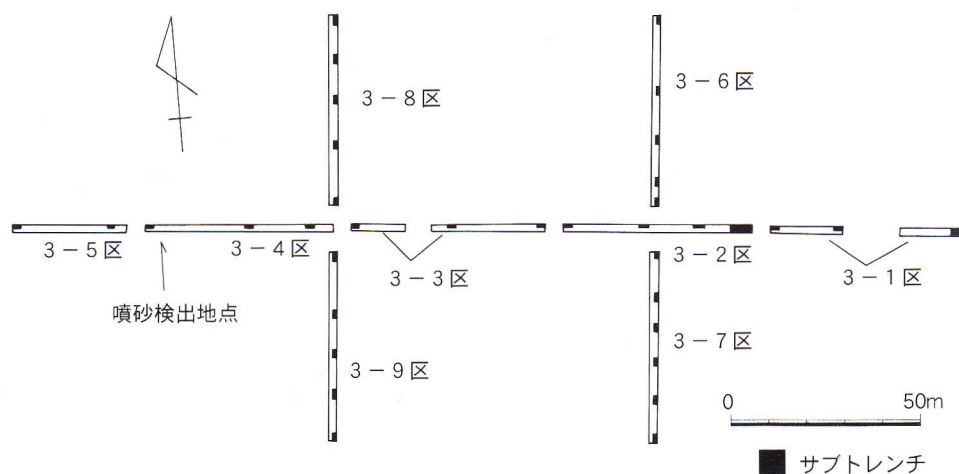
第2区では、自然流路5条(NR-2～6)を検出した。そのうち2-2区で検出したNR-2は、第6層上面において検出したもので幅2.0m、深さ75cmを測る。覆土は3単位に分層することができ、上位から灰黄褐色の粗砂(第1層)、暗灰黄色の粗砂(第2層)、灰黄色の粗砂混粘土(第3層)が堆積している。また2-7区では、第8層上面においてNR-6を、第9層上面においてNR-5をそれぞれ検出した。これらはともに幅3.9mを測るもので、覆土は1～5cm大の河原石などを多量に含む灰黄色の粗砂混礫である。

噴砂は、第2区及び第3区の各所で検出した(第8図)。特に砂脈が顕著に確認できた地点は、2-7区南端部と3-4区西端部である。2-7区で検出した噴砂(図版46上)は、N-42～62°-Eの方向性で砂脈がのびるものである。また3-4区で検出した噴砂(図版46下)は、2-7区のものとは異なるN-36～58°-Wの方向性で砂脈がのびるものである。これらの噴砂は、ともに第9層を貫いて第8層下面で止まるもので、砂脈には2.5Y6/1(黄灰)の細砂が入る。

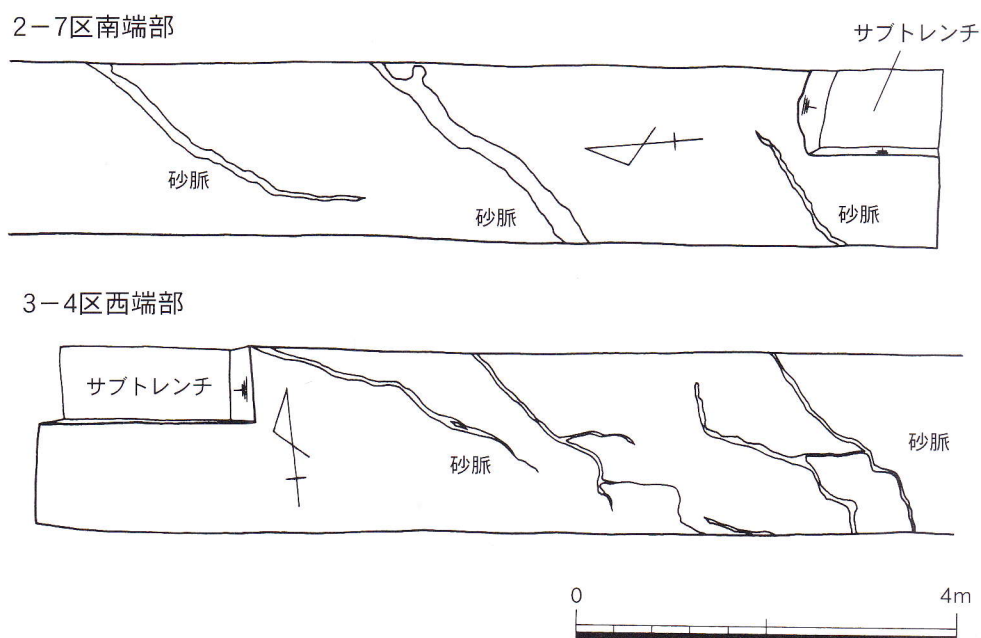
この状況から、この噴砂を引き起こした地震は、江戸時代以前のものと考えられる。



第6図 第2区遺構全体平面図



第7図 第3区遺構全体平面図



第8図 噴砂検出状況図

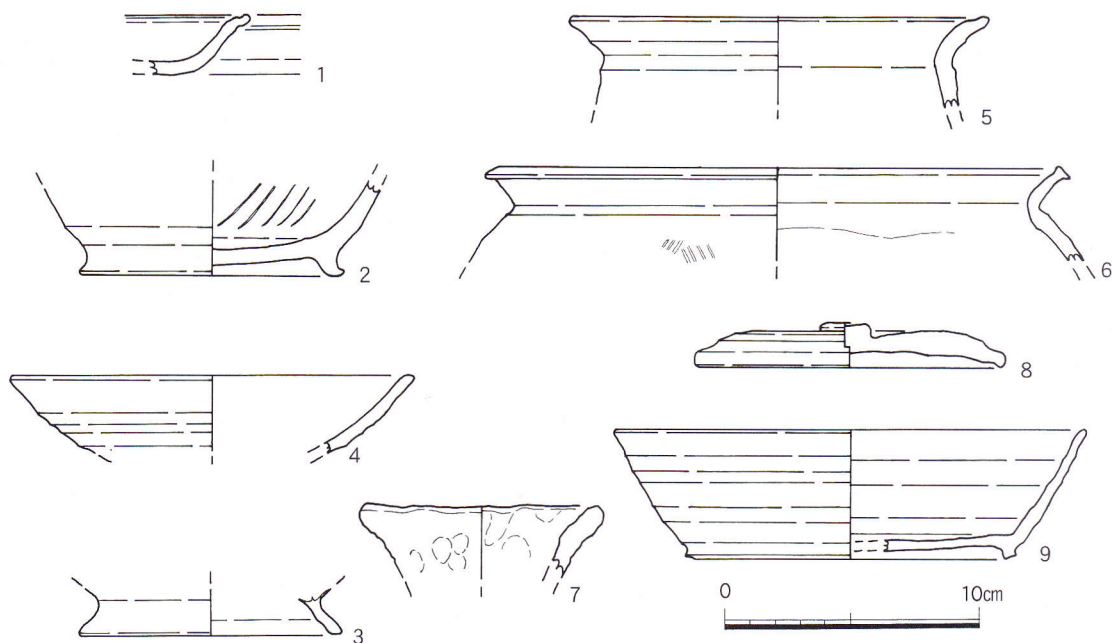
5. 遺物

今回の調査において出土した遺物は、大半が第1区の遺構上部から出土したもので、それ以外には第2・3区の遺物包含層である第2～8層から出土したものがある（図版47）。これらの土器は、遺物収納コンテナ2/3箱を数える。

出土遺物は土師器、須恵器、黒色土器、肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、瓦、砥石などがある。遺物について包含層出土のものは、ほとんどが細片であり、第1区で検出した遺構出土の主要な遺物について記述を行う。

1は土師器の皿である。細片のため全形を復元できないが、口縁端部を外反させ内外面に沈線をそれぞれ1条施したものである。2・3は土師器杯である。2は内側面に放射状暗文を施したもので、外側に張り出す高台がつくものである。高台径10.4cm、残存高3.8cmを測る。3は高台部分の破片で、高台径10.4cm、残存高1.8cmを測るものである。4は黒色土器杯である。内面が黒色のもので、外面には回転ナデによる段が残る。口径16.0cm、残存高3.1cmを測る。5・6は土師器甕である。5は暗赤褐色のもので、口縁部を外反させ、端部を細く絞り丸くおさめている。口径16.6cm、残存高3.5cmを測る。6は外面をハケメ調整するもので、外反する口縁部の端部に面をもたせたものである。口径22.3cm、残存高3.7cmを測る。7は製塩土器である。外反する口縁部をもち、内外面に指頭圧痕が顕著にみられる。口径9.6cm、残存高2.9cmを測る。8・9は須恵器である。8は淡灰色の蓋で、上面中央に直径2.0cm、高さ0.5cmのつまみが付くものである。口径12.3cm、器高1.8cmを測る。9は杯身で、体部が外傾方向に直線的に立ち上がるものである。口径18.8cm、器高5.0cm、高台径13.2cmを測る。

以上の遺物は8世紀から9世紀代までの時期のもので、1・3～6・8・9はSK-1、2はSD-



第9図 遺物実測図

1、7はSD-2から出土したものである。

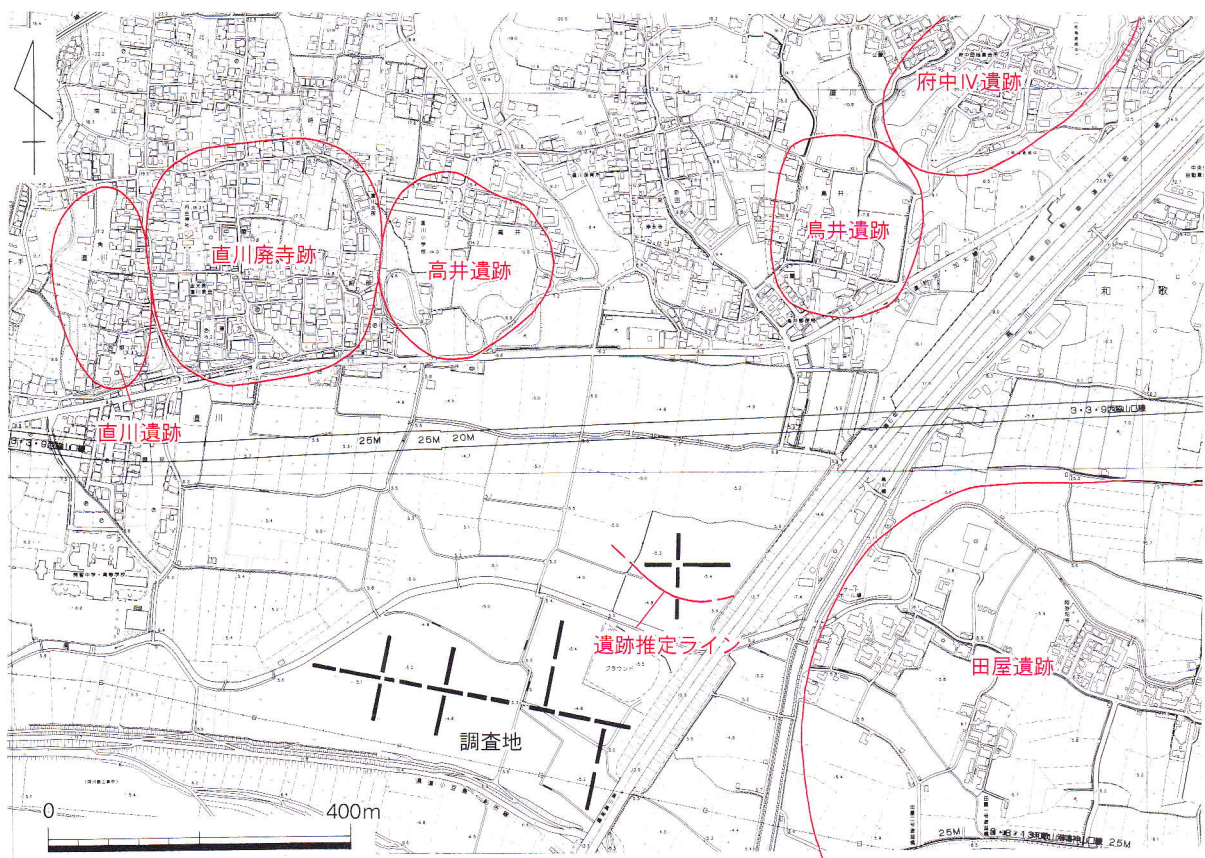
6.まとめ

今回の調査地は、紀ノ川北岸における遺跡の密集する地域の中で周囲を遺跡に囲まれた空白地帯であった。調査の結果、調査地北半部の第1区において奈良時代の溝や平安時代の土坑などを検出し、遺構覆土には多量の遺物を包含する状況を確認した。

第1区では、中央部において奈良時代から平安時代にかけての土坑・溝などの遺構及び土師器・須恵器などの遺物を検出した。遺構面の標高は4.5m～4.6mを測るものであるが、北側が平安時代の自然流路で削り取られていることから、本来の遺跡の範囲としては1-1～1-4区の範囲を含み北東及び北西方向に広がりをもつものと考えられる。

第2・3区は堆積の状況からみて、旧紀ノ川の氾濫源に相当する地点とみられ、江戸時代に至るまで開発が及んでいない地域と考えられる。江戸時代以降、沖積作用に伴って水田開発が進められ、現代まで水田として活用されていたものといえる。また堆積の状況から、第1区との境にも大規模な自然流路が存在する可能性が考えられる。このことから、第1区との様相の違いも含めてこの第2・3区は遺跡の範囲外として位置づけられよう。

最後に、今回の調査において検出した第1区の遺構から勘案して、第10図に示した遺跡の南限ラインが推定できる。このことから、当遺跡は南限のみが復原できる遺跡で、その広がりは一北東部から北西部にかけて広がるものと推定できる。また周辺の遺跡からみて、東側に隣接する田屋遺跡の範囲が当調査地まで及んでいる可能性も指摘できよう。



第10図 直川地区検出の遺跡範囲推定図

弘西地区 試掘調査

1.調査の契機と経過

弘西地区が所在する紀ノ川北岸の沖積平野には、弥生時代後期から古墳時代にかけての集落跡である田屋遺跡・西田井遺跡・北田井遺跡等が存在し、北部の和泉山脈と接する段丘上にも旧南海道に沿うように府守神社（現聖天宮）を中心とした紀伊国衙跡推定地を含む府中遺跡群等各時代の遺跡が連なって存在している。

今回の調査は、北田井遺跡の北西約250mの地点（X=-192630m、Y=-69740m）における埋蔵文化財の存在の有無を確認することを目的とし、和歌山市教育委員会が国庫補助金を得て実施したものである（第1図）。

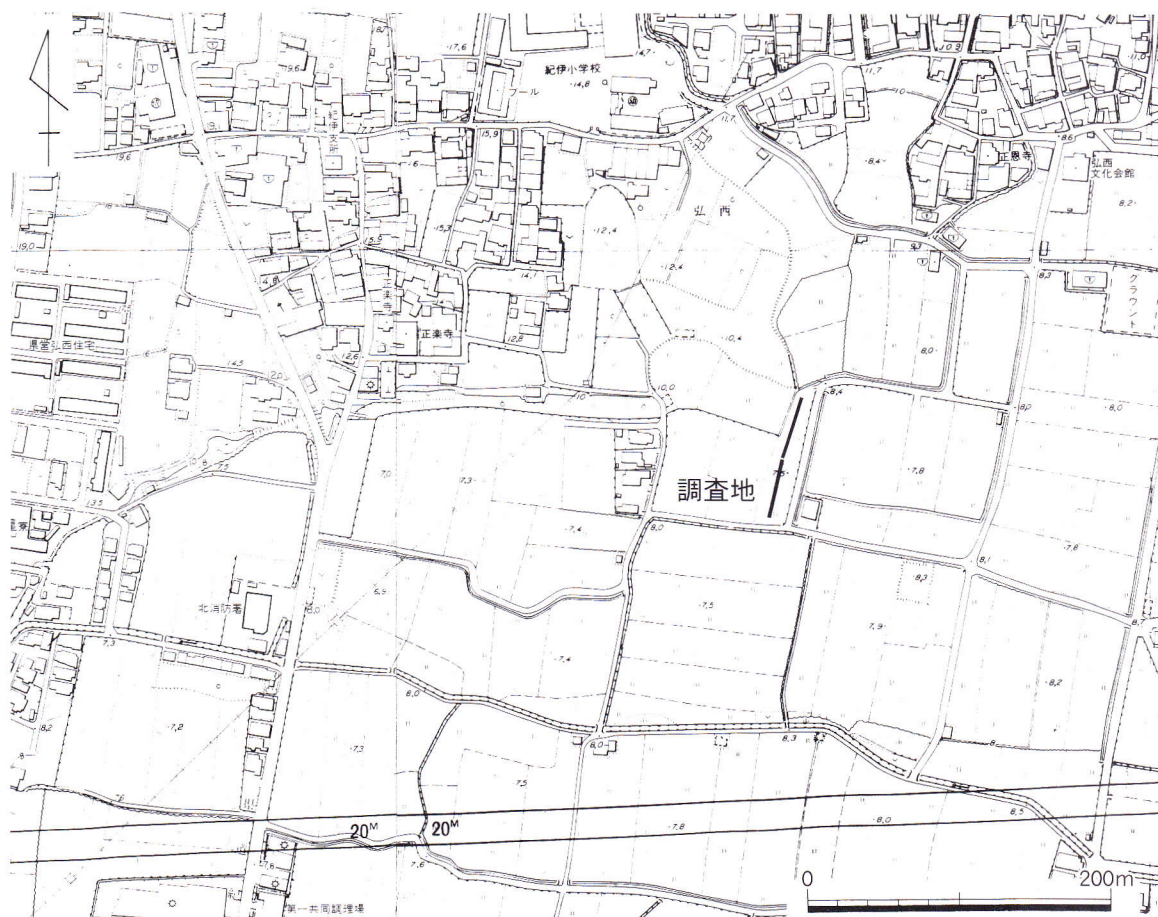
現地調査は、平成17年2月7日から18日までの期間で実施した。

2.位置と環境

遺跡分布図については、「直川地区試掘調査」の項、第2図直川地区及び弘西地区周辺の遺跡分布図を参照とする。

今回調査を行った弘西地区は、紀ノ川の河口から約10km遡った北岸に位置する。この調査地周辺は、標高8.0m前後の沖積平野部にあたり、広域な水田地帯の一角に立地する（図版48）。

本調査地周辺の遺跡では、東方から南方にかけて弥生時代中期以降に形成された集落遺跡として



第1図 調査位置図

宇田森遺跡（４）・北田井遺跡（３）・西田井遺跡（２）・田屋遺跡（１）などがある。宇田森遺跡では、弥生時代中期の溝や土坑から一括性の高い土器群が出土し、当地域における土器編年の標識遺跡として知られている。北田井遺跡では集落内に後期古墳（北田井１号墳）が築造されており、古墳時代集落とその墓域との関連を示す貴重な例として挙げられる。また西田井遺跡及び田屋遺跡では弥生時代後期から古墳時代後期にかけての多数の竪穴住居が検出され、紀ノ川下流域北岸の平野部における集落遺跡として代表されるものである。

一方、北方には南海道が東西に走り、奈良時代に造営された薬師寺式の伽藍配置をもつ上野廃寺（２３）や紀伊国府跡と推定されている府中遺跡（２０）が存在する。

３．調査の方法と経過

（１）調査の方法（第２図）

南北に並ぶ２枚の水田を跨いで東西２ｍ・南北８０ｍの調査区を設定し、便宜的に北側を第１区、南側を第２区とした。機械掘削は新旧の耕作土（第１～３層）と遺物包含層の第４・５層について行い、第６層上面を観察面とした。また、調査区内に８箇所のサブトレンチを設定して下層の状況確認を行った。



第２図 調査地区割図

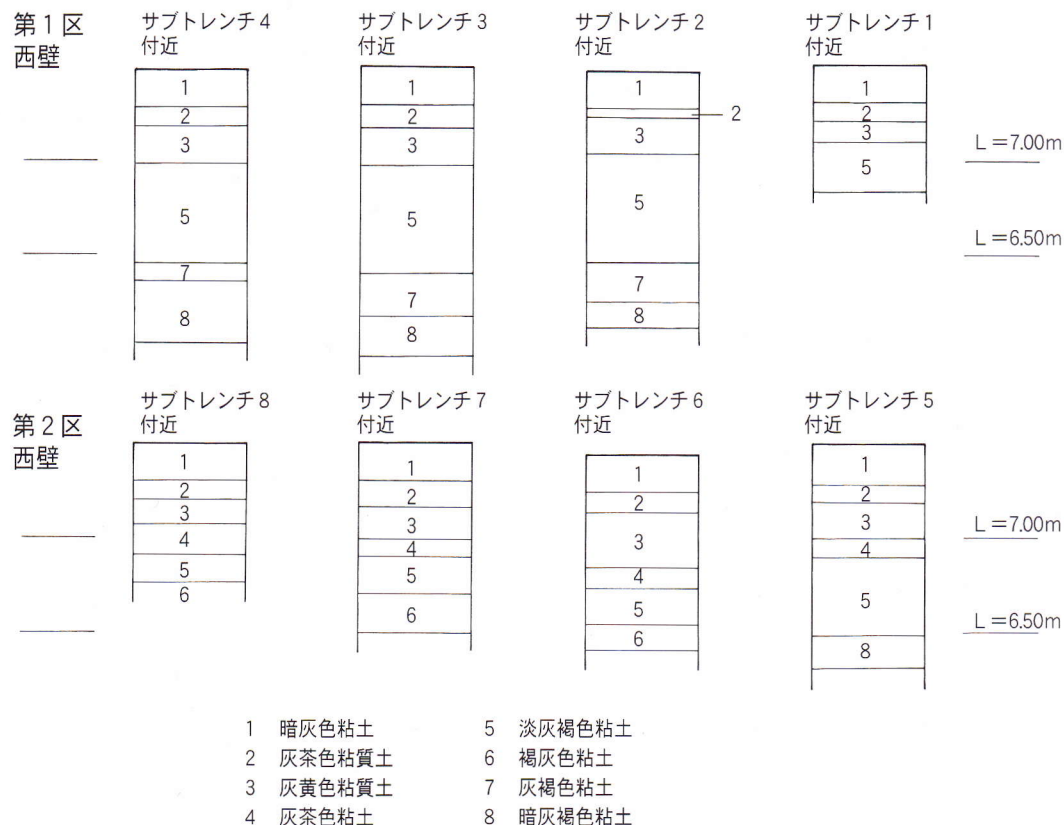
図面による記録は、平面図は1/50の縮尺を用いて手実測で行い、平板測量は1/200の縮尺を用いて1/2500の国土基本図と照合した。壁面の土層堆積状況図は国家水準点（T.P.値）を基準とし、1/20の縮尺を用いて手実測で行った。土層及び土質の観察については、従来通有の呼称を用いた。

（2）調査の概要

各調査区における基本層序は第3図に示した通りである（図版51・52上）。

調査地の地表面標高は7.5mである。表土である第1層は20～25cmの厚さの水田耕作土である。第2層は10～15cmの厚みをもつ灰茶色粘質土で、床土に相当する土層である。第3層は10～30cmの厚みをもつ灰黄色粘質土である。この層内でレベルの異なる暗渠排水施設が多数確認されており、旧耕作土層が幾重にも重なった土層と考えられる。第4層は10～15cmの厚みをもつ灰茶色粘土で、第2区でのみ確認できた土層である。第5層は20～55cmの厚みをもつ淡灰褐色粘土で、中世土師器や瓦器等の微片がわずかに含まれていることから、当該期の遺物包含層と考えられる。第6層は15～20cmの厚みをもつ褐灰色粘土で、この上面から切り込む溝状遺構を確認している。第7層は10～25cmの厚みをもつ灰褐色粘土、第8層は10～30cmの厚みをもつ暗灰褐色粘土で、土師器・須恵器の細片が少量含まれていた。第7層と第8層はS47m付近の第6層上面から北側に広がっており、S9m付近でそれぞれ地山に取り付くように堆積していた。第8層の下は地山から続く青色の染み込んだ黄褐色砂質土である。

地山は調査区の北端部で第5層直下となり、北西から南東に向かってゆるやかに傾斜している。



第3図 調査地土層柱状模式図

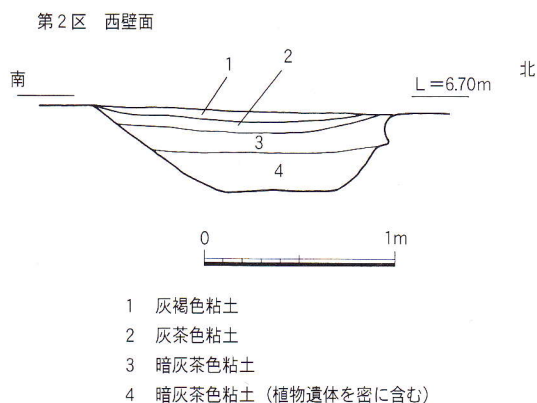
4. 遺構

(1) 第1区 (第4図、図版49上)

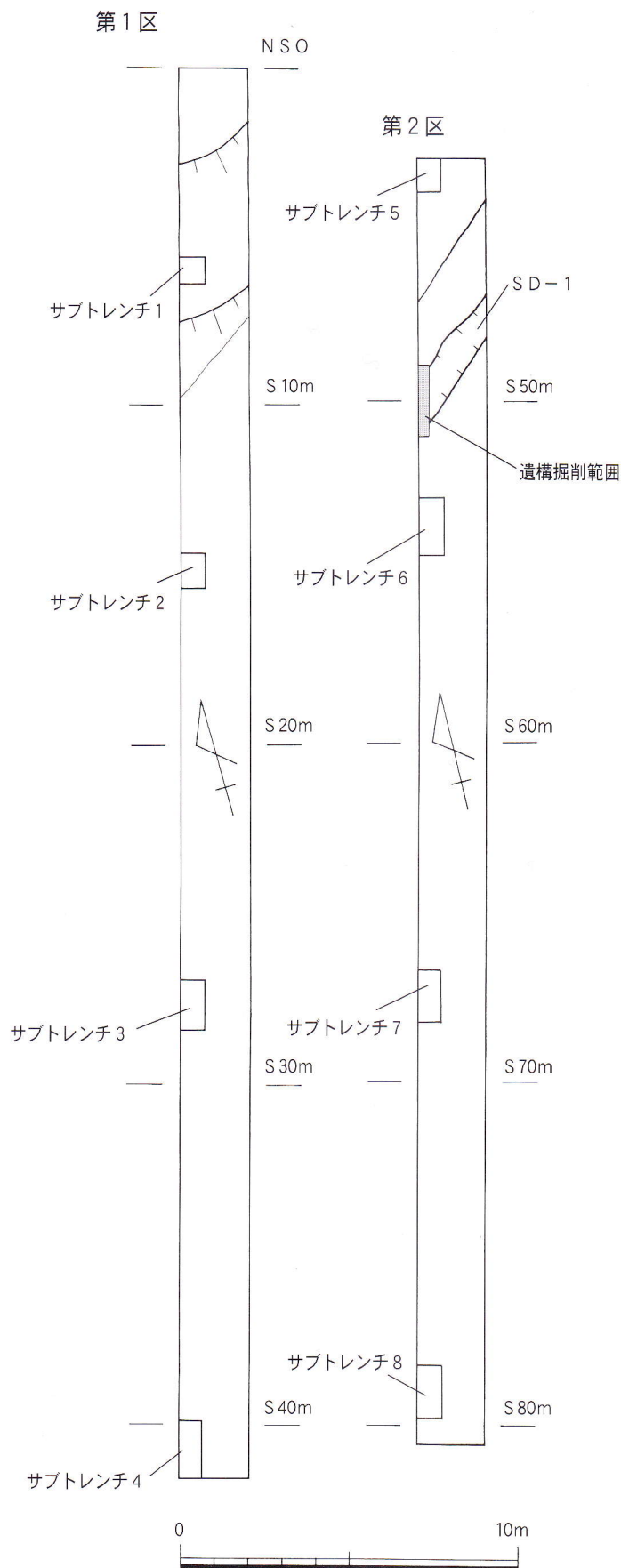
第1区では第7・8層で土師器・須恵器等の細片が少量出土した。また北側については北西から南東に向けて傾斜する地形に沿って堆積層が徐々に浅くなる状況を確認したが、明確な遺構は検出できなかった。

(2) 第2区 (第4・5図、図版49下)

第2区では、S47m付近で第1区から続く第7・8層の広がりがあり、第6層に変わる北東から南西方向に調査区を斜めに横切るようにのびるラインを検出した。またS50m付近では、第6層上面から切り込む幅0.8～1.0mの溝状遺構(SD-1)を確認した(図版50)。このSD-1の方向性は、第6層に変わるラインとほぼ平行する。このSD-1の堆積状況を確認するため、西壁直下において幅20cmのサブトレンチによる掘削を行った。その結果、SD-1は深さ約40cmの底部の広い「U」字をなし、上部から灰褐色粘土・灰茶色粘土・暗灰茶色粘土の順で堆積し、暗灰茶色粘土下部には植物遺体が多量に含まれていた。



第5図 SD-1土層断面図



第4図 遺構全体平面図

5. 遺物

出土遺物は土師器、須恵器、瓦器、陶磁器等の細片が少量出土した他、自然遺物として桃核がある。年代については、第8層が平安時代から鎌倉時代、第5層から上層は江戸時代以降の範疇におさまるものと考えられる。

以下、土器と自然遺物を分けて記述し、土器では比較的まとまって出土した第1区の第8層出土土器について個別に述べる。

(1) 第8層出土土器 (第6図、図版52下)

1・2は土師器である。1は口径13.6cmの法量をもつ杯体部上位の破片である。口縁部を強いヨコナデによって大きく外反させ、端部を内側に丸く肥厚させている。底部周辺は不明瞭であるものの、ヘラケズリによって仕上げているものとみられる。2は片口の埴である。口縁部はヨコナデによって外端面を作り出し、端部を内上方に突出させている。この土器の調整は、頸部以下の外面にタテ方向のハケ調整が施されている。また内面は剥離が著しく不明瞭である。この土器の胎土には、石英・結晶片岩が含まれている。

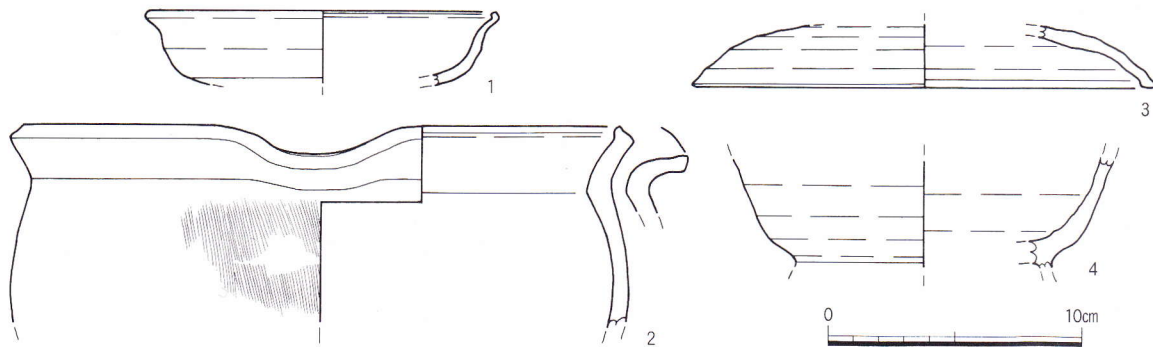
3・4は須恵器である。3は口径18.1cmの天井部を欠失した蓋の破片である。口縁部は内外に肥厚させ、接地部に面を作り出している。比較的器高が低く、残存部全体にヨコナデ調整が確認できる。また焼成は軟質で乳白色に発色している。4は脚付壺体部下半の破片である。欠失している脚部は外側に踏んばる形状をもつものと考えられる。

(2) 自然遺物 (写真1)

自然遺物としては、桃核4個が出土した。この桃核は全長1.6~2.2cmの比較的小さなものである。すべて先述の土器と同じ第1区の第8層から出土した。



写真1 自然遺物 (桃核)



第6図 遺物実測図

6.まとめ

今回調査を実施した結果、地形的には北西から南東に向けてゆるやかに傾斜する地山を検出し、この地山に沿うように各層がほぼ水平に堆積していた。そして、南側では徐々に堆積層が増してゆく状況が確認できた。

また堆積層内で新たに遺物包含層の存在を確認した。遺物は第4・5層内に土師器や瓦器等の微片がわずかに含まれ、第8層内にも土師器の細片が少量含まれていた。これらの出土遺物の年代から、調査区の南東部に所在する弥生時代後期から古墳時代にかけての集落跡である北田井遺跡との関連よりは北部段丘上の南海道沿いに形成された遺跡群との関連を考えたい。

第1区から第2区の一部に堆積する暗灰褐色粘土層については、その南側で平行するように検出したSD-1の内部と同様の堆積状況であることや、SD-1の底部近くに植物遺体が多量に含まれていることなどから、一時的に湿地帯であった可能性を考えたい。

当該地は、現在埋蔵文化財包蔵地とはなっていないので、新たな包蔵地として認識するために今後も周辺部の観察を継続して行う必要がある。

報告書抄録

ふりがな	わかやましないいせきはくつちょうさがいほう
書名	和歌山市内遺跡発掘調査概報
副書名	平成16年度
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	井馬好英・北野隆亮・川口修実・益田雅司
編集機関	和歌山市教育委員会・財団法人和歌山市文化体育振興事業団
所在地	〒640-8511 和歌山県和歌山市七番丁23 TEL 073-432-0001 〒640-8227 和歌山県和歌山市西汀丁29 TEL 073-435-1195
発行年月日	西暦 2006年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	調 査 期 間	調 査 面 積 (㎡)	調 査 原 因
		市 町 村	遺跡番号					
なるかみよんいせき 鳴神Ⅳ遺跡	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 なるかみ 鳴神	3020150	316	34° 13′ 39″	135° 12′ 50″	20040506 20040521	54	店舗建伴 設に遺跡 確認
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
鳴神Ⅳ遺跡	集 落 跡	縄文時代	貝塚・土坑墓	縄文土器・土師器・須 恵器・近世陶磁器・石 器・石製品・骨角器・ 自然遺物		鳴神貝塚の縁辺部に あたり、3基の土坑 墓から人骨8体以上 が出土。		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	調 査 期 間	調 査 面 積 (㎡)	調 査 原 因
		市 町 村	遺跡番号					
こうざきいせき 神前遺跡	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 こうざ 神前	3020150	307	34° 12′ 21″	135° 12′ 26″	20041220 20041222	50	造成工伴 事に確認 調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
神前遺跡	散 布 地	弥生時代		土師器				

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	調 査 期 間	調 査 面 積 (㎡)	調 査 原 因
		市 町 村	遺跡番号					
いんべいせき 井辺遺跡	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 こうざ 井辺	3020150	308	34° 12′ 45″	135° 12′ 30″	20050119 20050127	140	造成工伴 事に確認 調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
井辺遺跡	散 布 地	弥生時代	古墳時代の土 坑・溝・ピッ ト 鎌倉時代の溝	土師器・須恵器・瓦器 ・中世土師器				

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	調 査 期 間	調 査 面積(m ²)	調 査 原因
		市 町 村	遺跡番号					
きのもといちいせき 木ノ本Ⅰ遺跡	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 にしゅう 西庄	3020150	40	34° 15′ 42″	135° 7′ 18″	20050125 20050127	60	造成工 事に伴 う確認 調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
木ノ本Ⅰ遺跡	散 布 地		小 溝 群	土師器・須恵器・中世 土師器・瓦器・瓦・土 錘				

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	調 査 期 間	調 査 面積(m ²)	調 査 原因
		市 町 村	遺跡番号					
のうがわちく 直川地区	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 のうが 直川	3020150		34° 15′ 19″	135° 13′ 12″	20050131 20050225	1841	試 掘 調 査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
直川地区			奈良時代の溝 平安時代の溝 ・土坑	土師器・須恵器・黒色 土器・肥前系陶磁器・ 瀬戸美濃系陶器・京信 楽系陶器・瓦・砥石		奈良～平安時代の遺 跡の一部を確認。		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	調 査 期 間	調 査 面積(m ²)	調 査 原因
		市 町 村	遺跡番号					
ひろにしちく 弘西地区	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 ひろ 弘西	3020150		34° 15′ 40″	135° 14′ 32″	20050207 20050218	160	試 掘 調 査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
弘西地区			溝 状 遺 構	土師器・須恵器・瓦器 ・陶磁器・自然遺物				

版 図



調査前の状況（北西から）



貝層検出状況（南から）



貝層検出状況(北から)



SX-1(南から)



SX-1 (南東から)



SX-1 (東から)



SX-1（北から）



SX-1人骨細部（西から）



SX-1・2 (西から)



SX-1・2 (東から)



SX-2（西から）



SX-2（南から）



SX-2（南西から）



SX-2人骨細部（西から）



SX-3 (東から)



SX-3 (南西から)



SX-3 (北西から)



SX-3人骨細部 (南西から)



全景（北から）



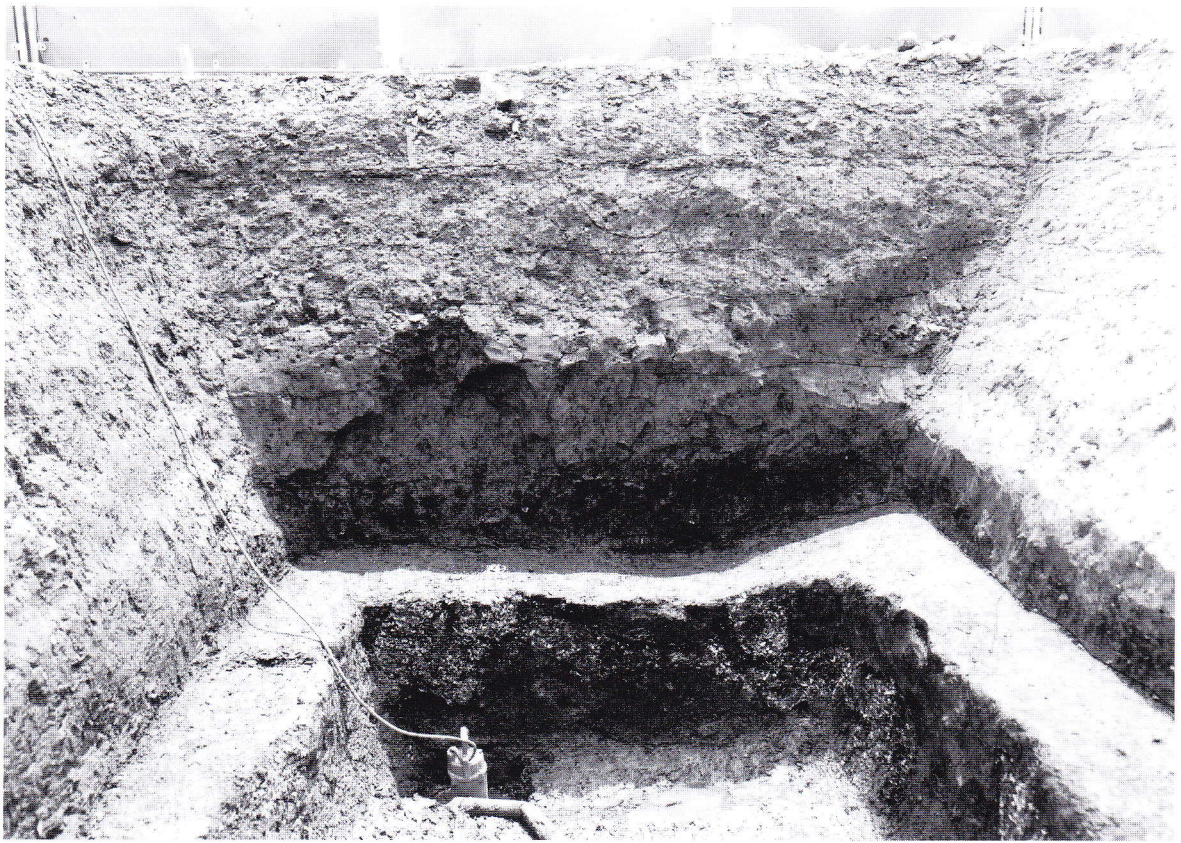
全景（南から）



西壁土層堆積状況(東から)



西壁貝層堆積状況(東から)



南壁土層堆積状況(北から)



南壁貝層堆積状況(北から)



貝層検出状況（東から）



貝層検出状況（北から）

図版14 鳴神Ⅳ遺跡（範囲確認調査）



全景（東から）



全景（西から）



調査区東端部南壁土層堆積状況（北から）



調査区東端部南壁貝層堆積状況（北から）



調査区中央部南壁貝層堆積状況（北から）



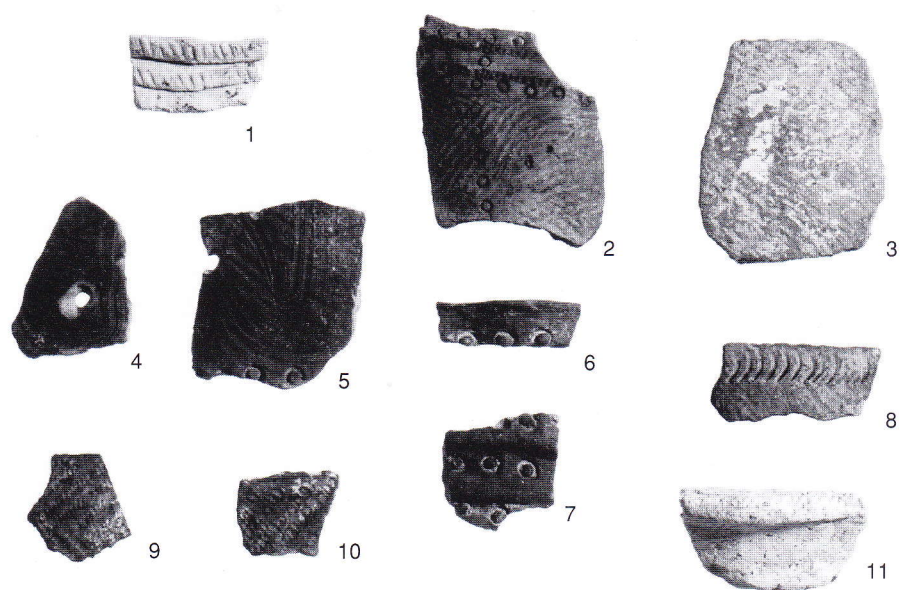
調査区西端部南壁土層堆積状況（北から）



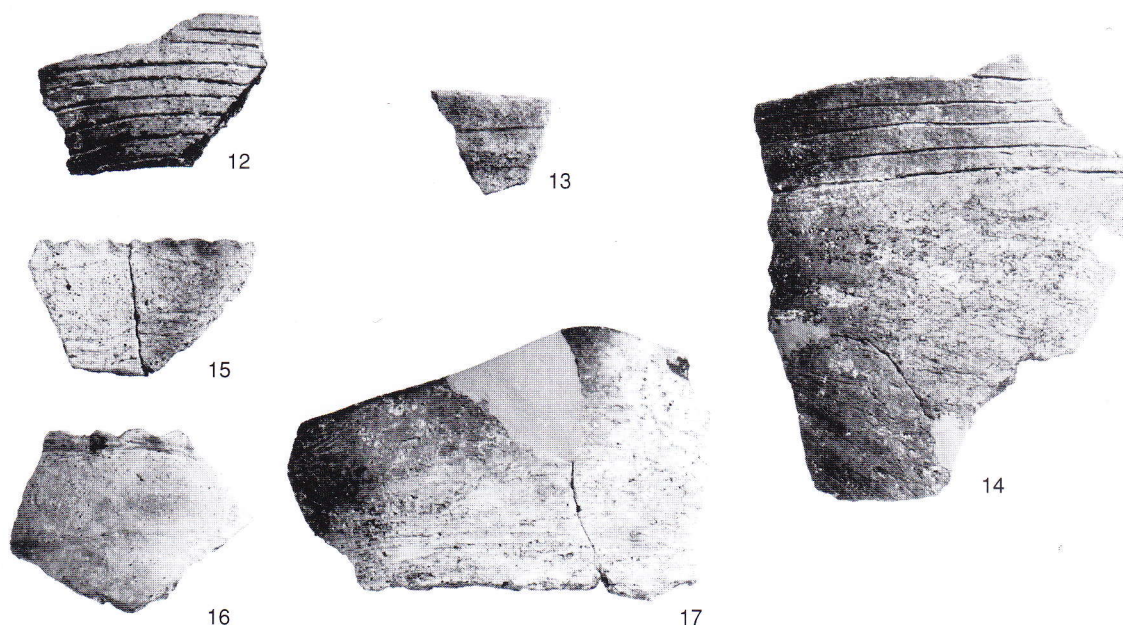
調査区西端部南壁貝層堆積状況（北から）



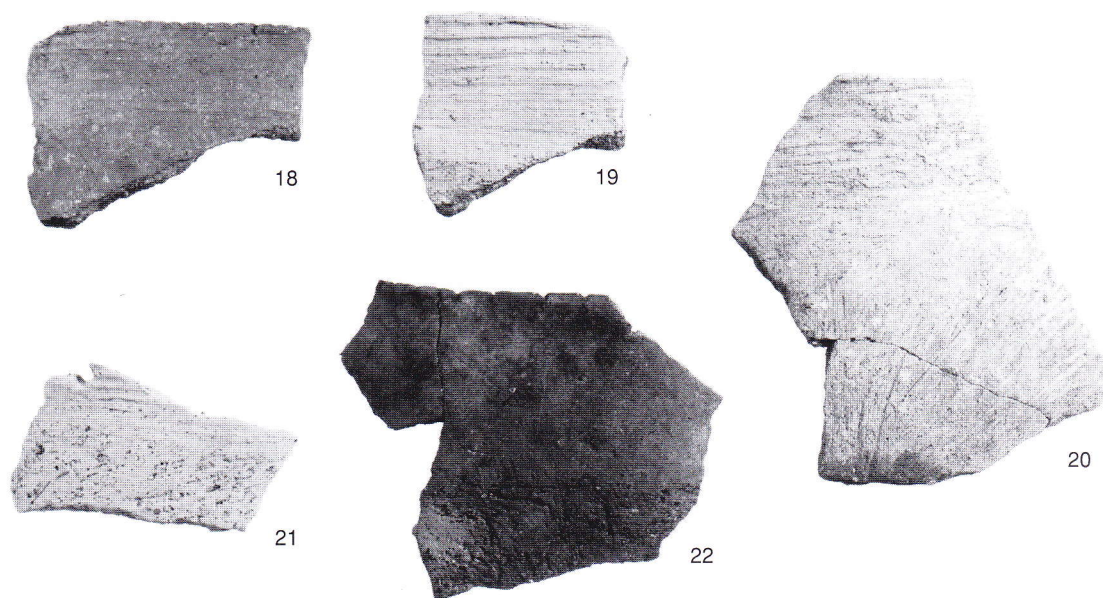
東壁土層堆積状況（西から）



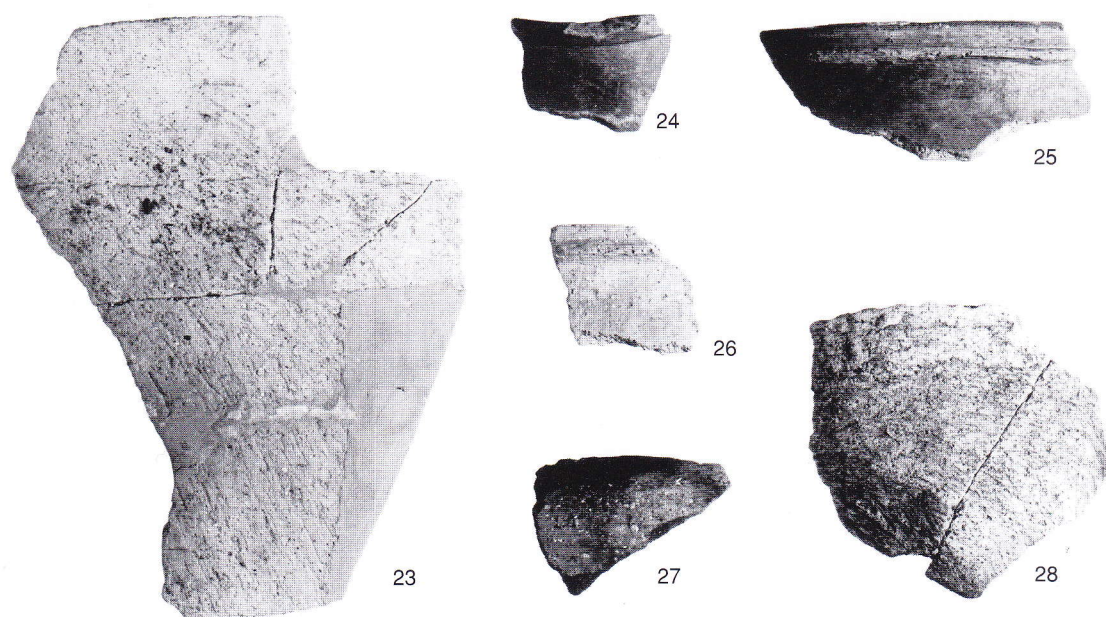
縄文土器 1～11深鉢



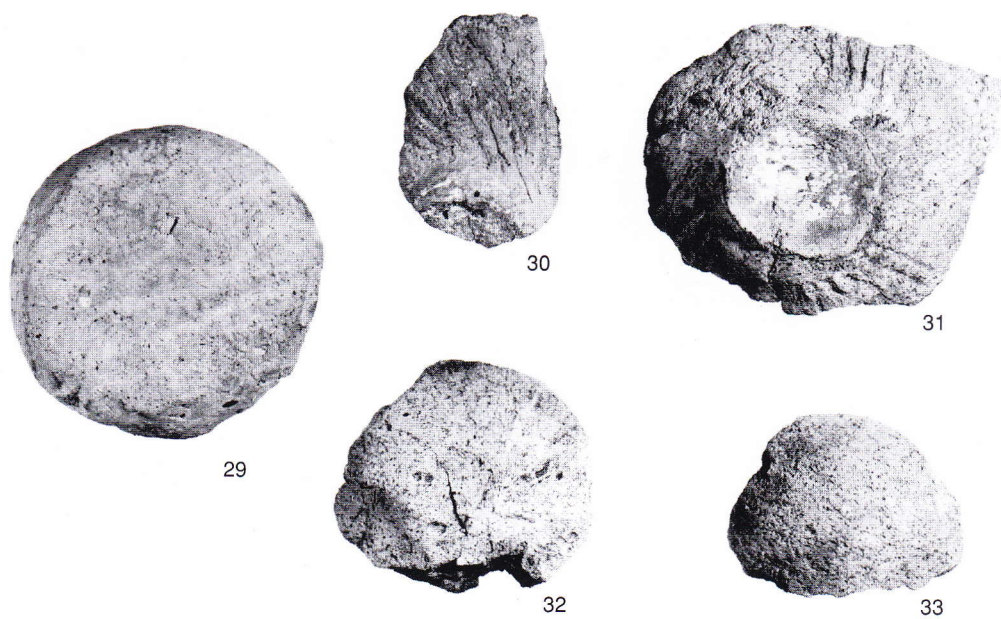
縄文土器 12～17深鉢



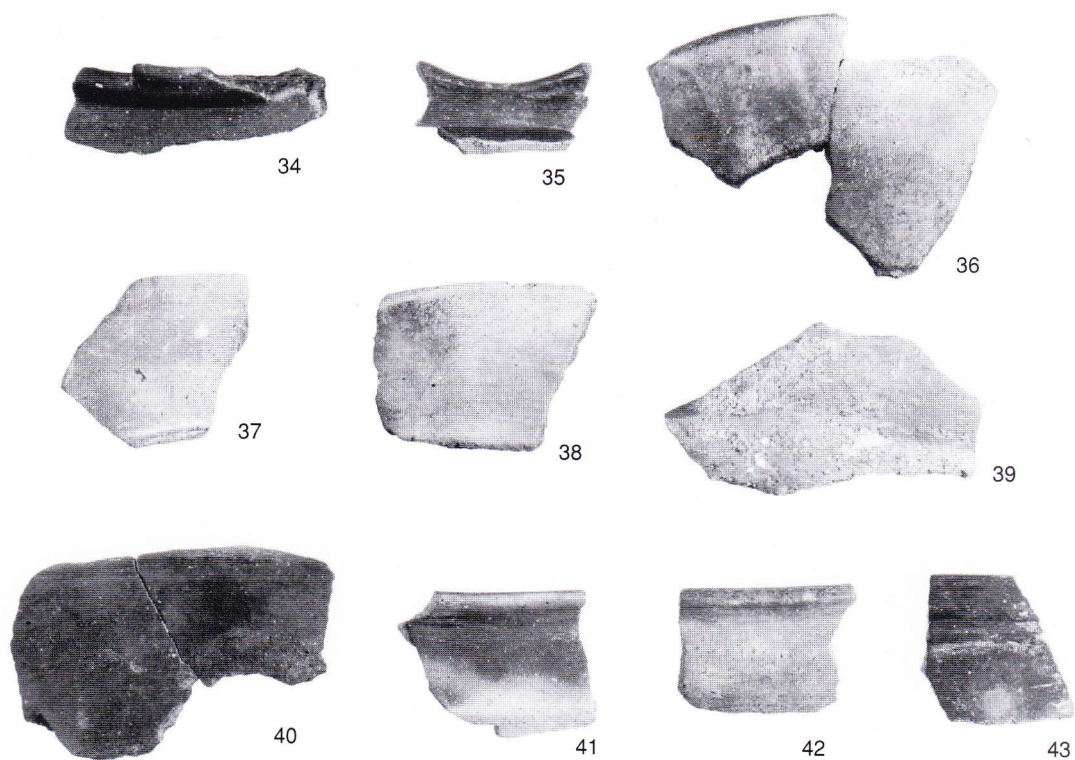
縄文土器 18～22深鉢



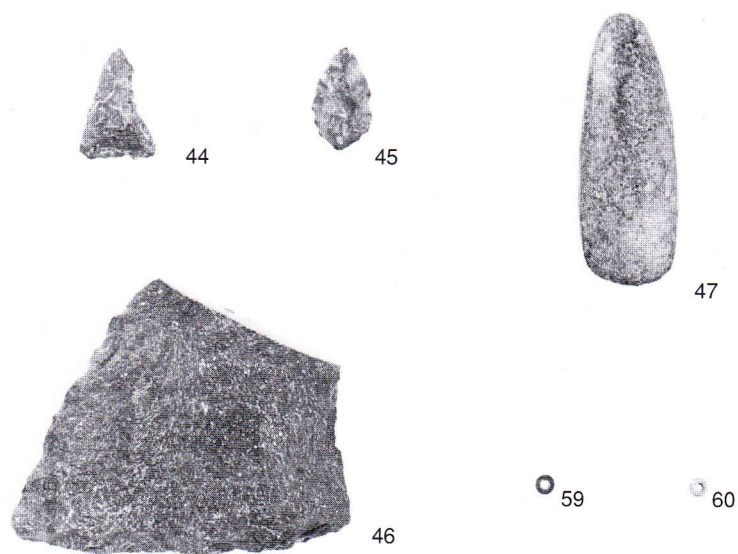
縄文土器 23～26深鉢、27・28鉢



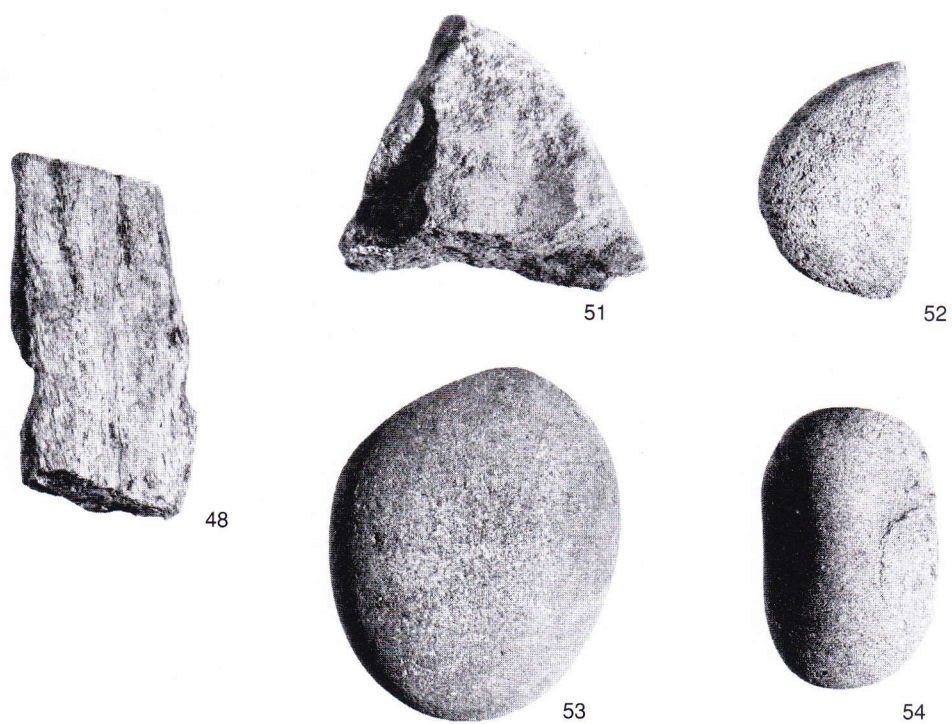
縄文土器 29～33底部



縄文土器 34～43浅鉢



石器 44・45石鏃、46スクレイパー、47石斧、石製品 59・60白玉



石器 48石錘、51～54叩石



55



57

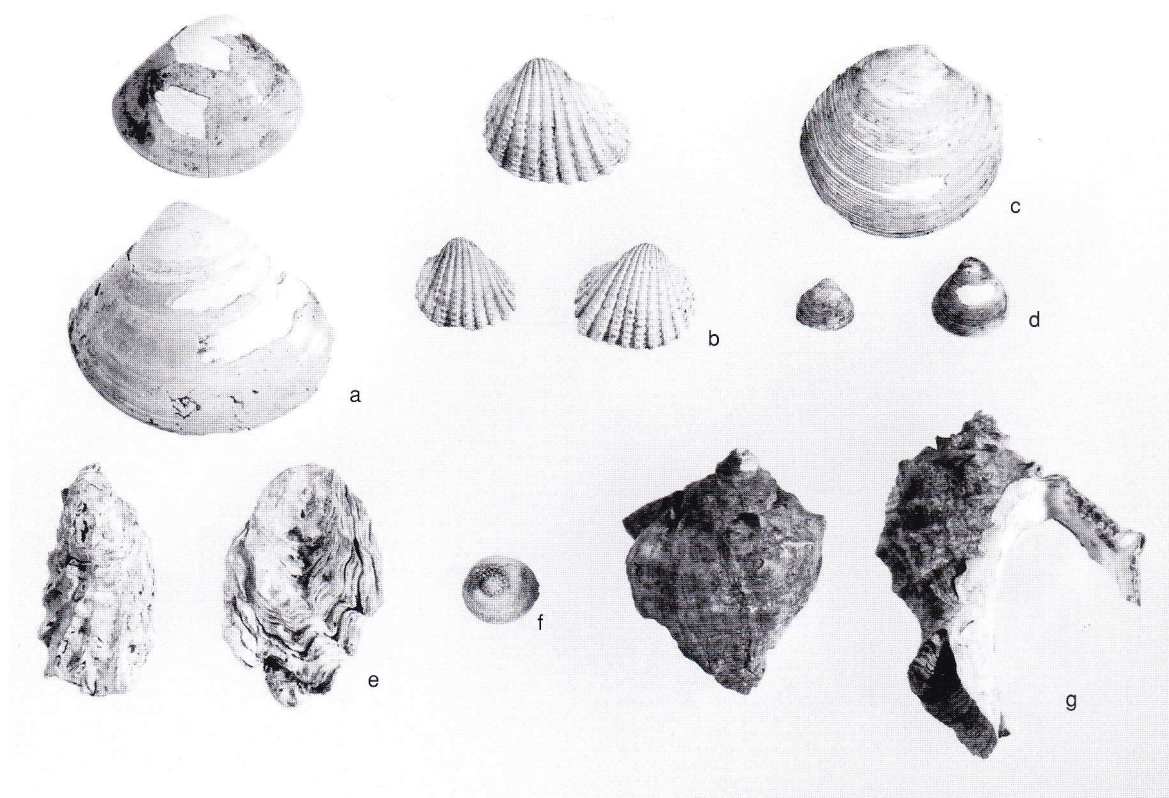


56



58

石器 55～58叩石



貝類 aハマグリ、bハイガイ、cオキシジミ、dヤマトシジミ、eマガキ、fサザエ、gアカニシ



調査前の状況（西から）



調査区全景（北西から）



調査区全景（南東から）



南東へ9m付近北東壁土層堆積状況（南西から）



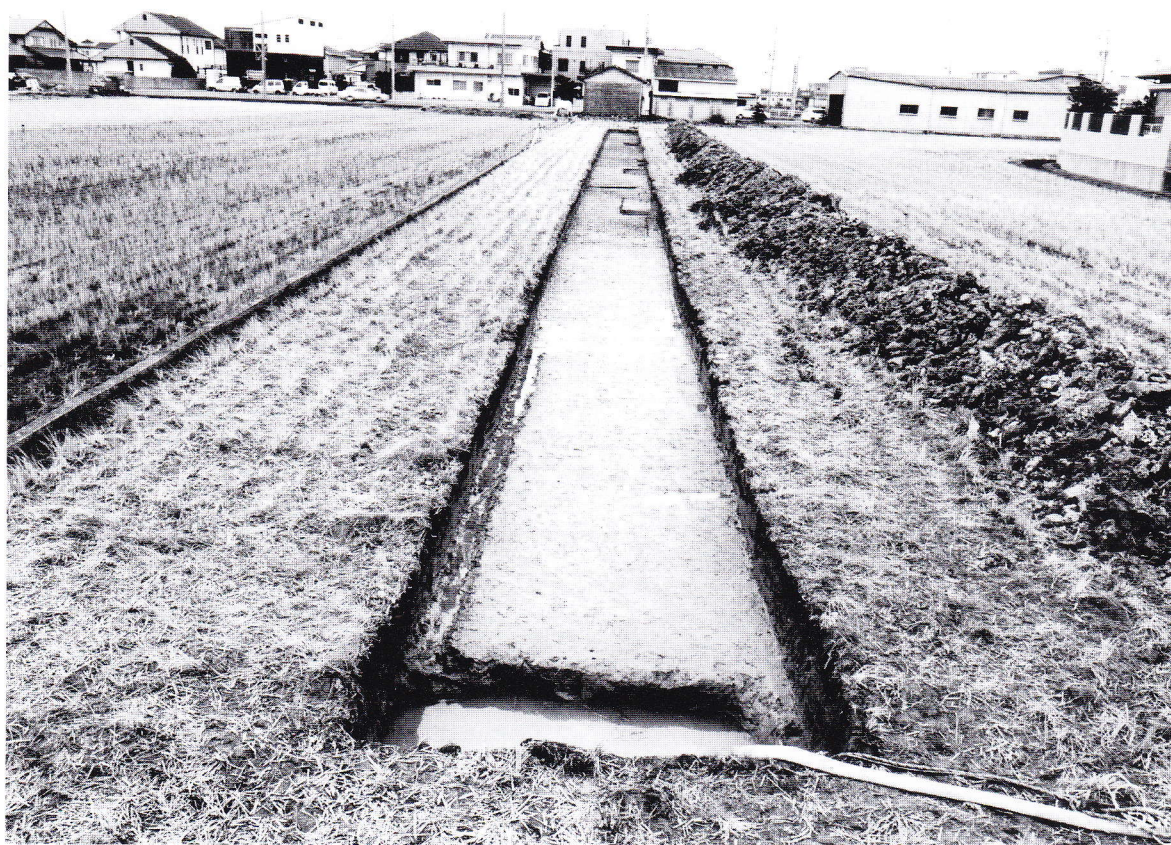
南東へ25m付近北東壁土層堆積状況（南西から）



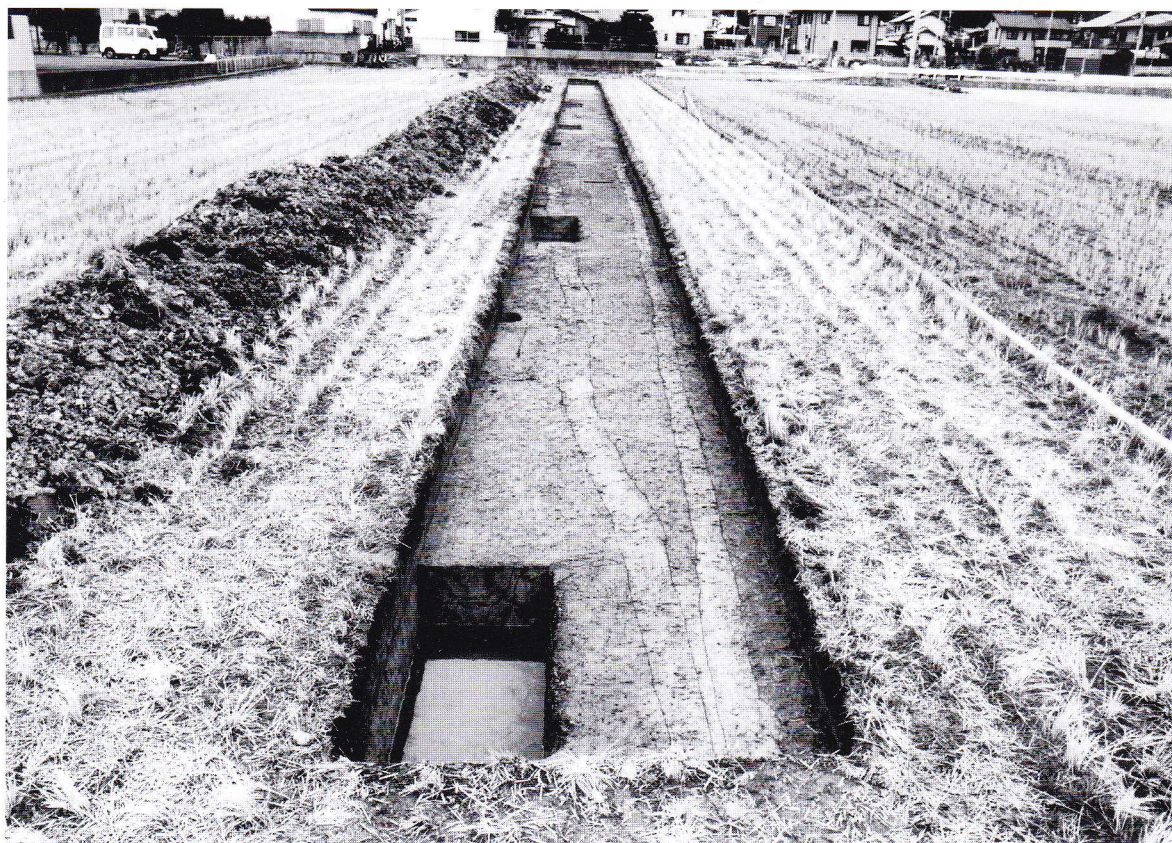
調査前の状況（東から）



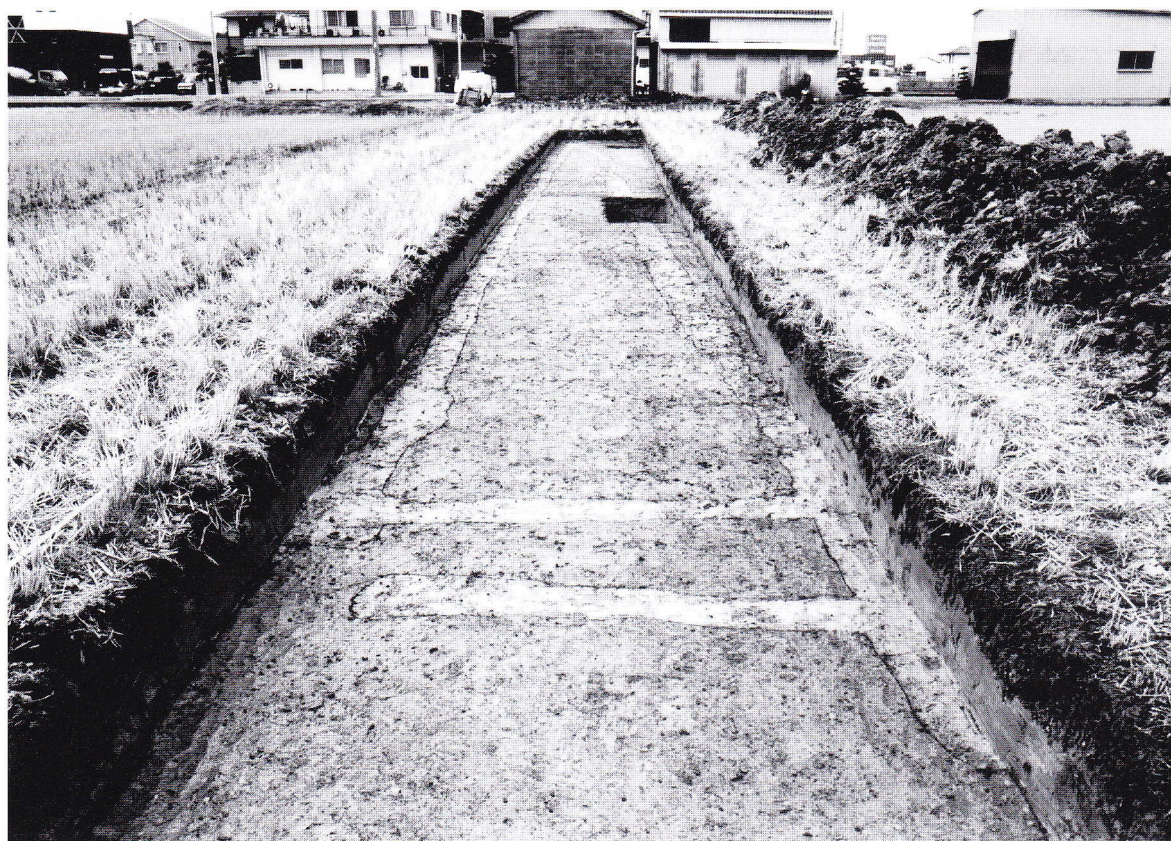
調査前の状況（西から）



調査区全景（東から）



調査区全景（西から）



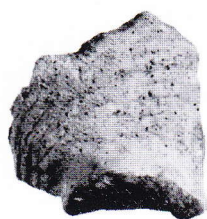
第3層上面検出 SD-1・2（東から）



第3層上面検出 SK-2・3（南から）



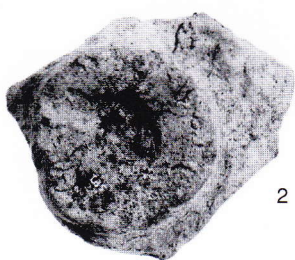
W37m付近北壁土層堆積状況（南から）



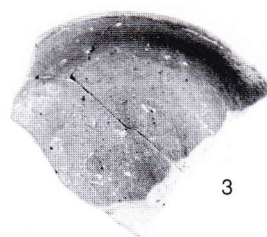
1



a



2

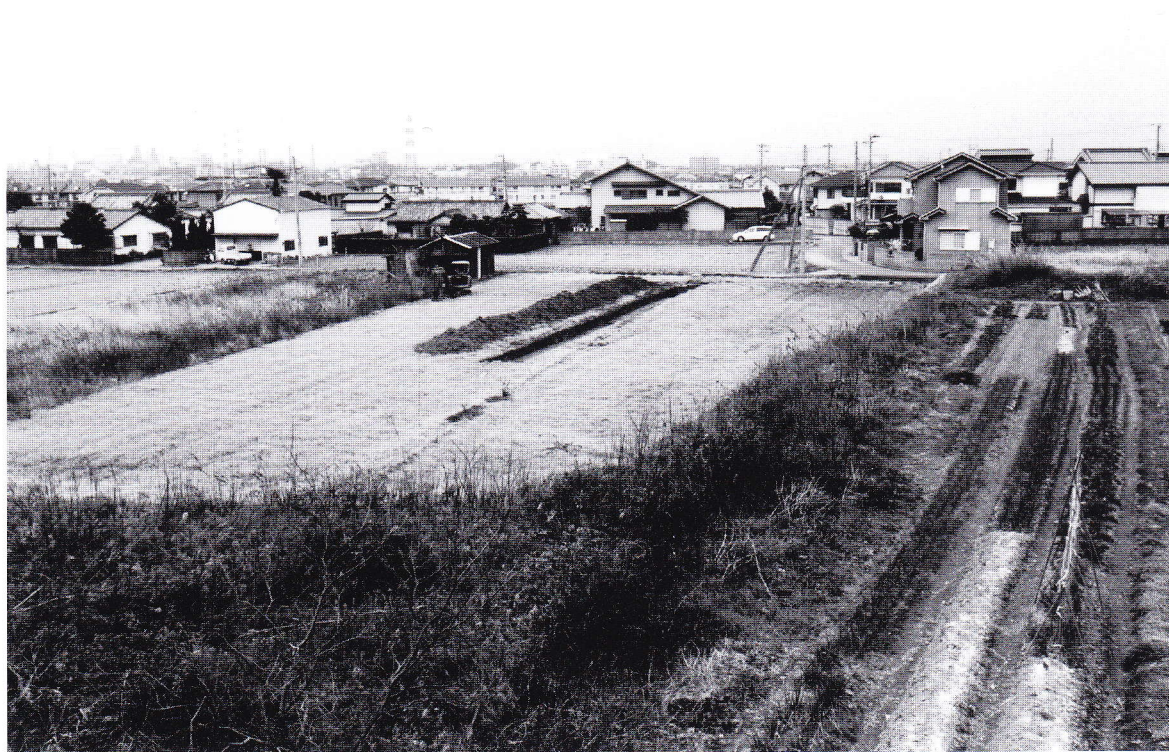


3

土師器 1甕、2壺、須恵器 a甕、瓦器 3皿



調査前の状況（南から）



調査地近景（北西から）



調査区全景（北から）



調査区全景（南から）



第5層上面検出の小溝群（南から）



S3m付近東壁土層堆積状況（西から）



S29m付近東壁土層堆積状況（西から）



第1・2区 調査前の状況（南西から）



第3区 調査前の状況（南東から）



1-1区 全景（東から）



1-2区 全景（東から）



1-3区 全景（北から）



1-3区 全景（南から）



1-4区 全景（北から）



1-4区 全景（南から）



1-5区 全景（北から）



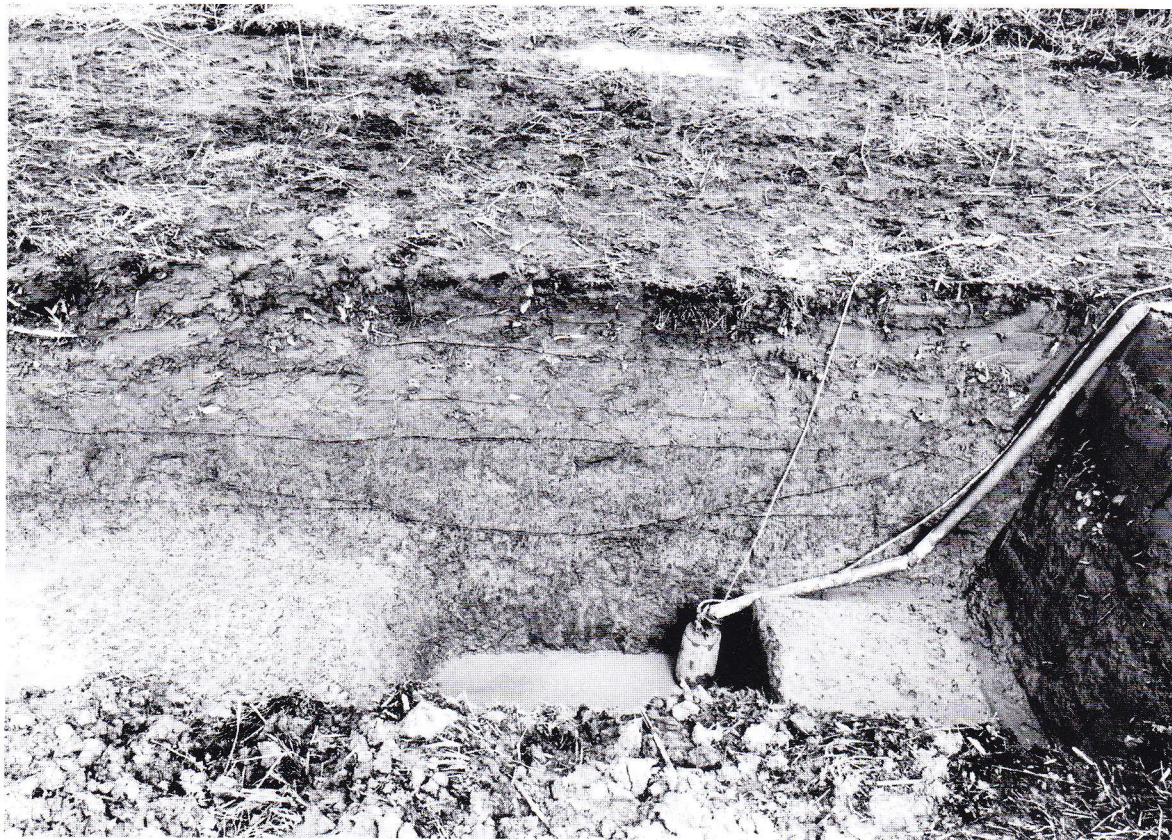
1-5区 全景（南から）



1-2区 SK-1検出状況（南から）



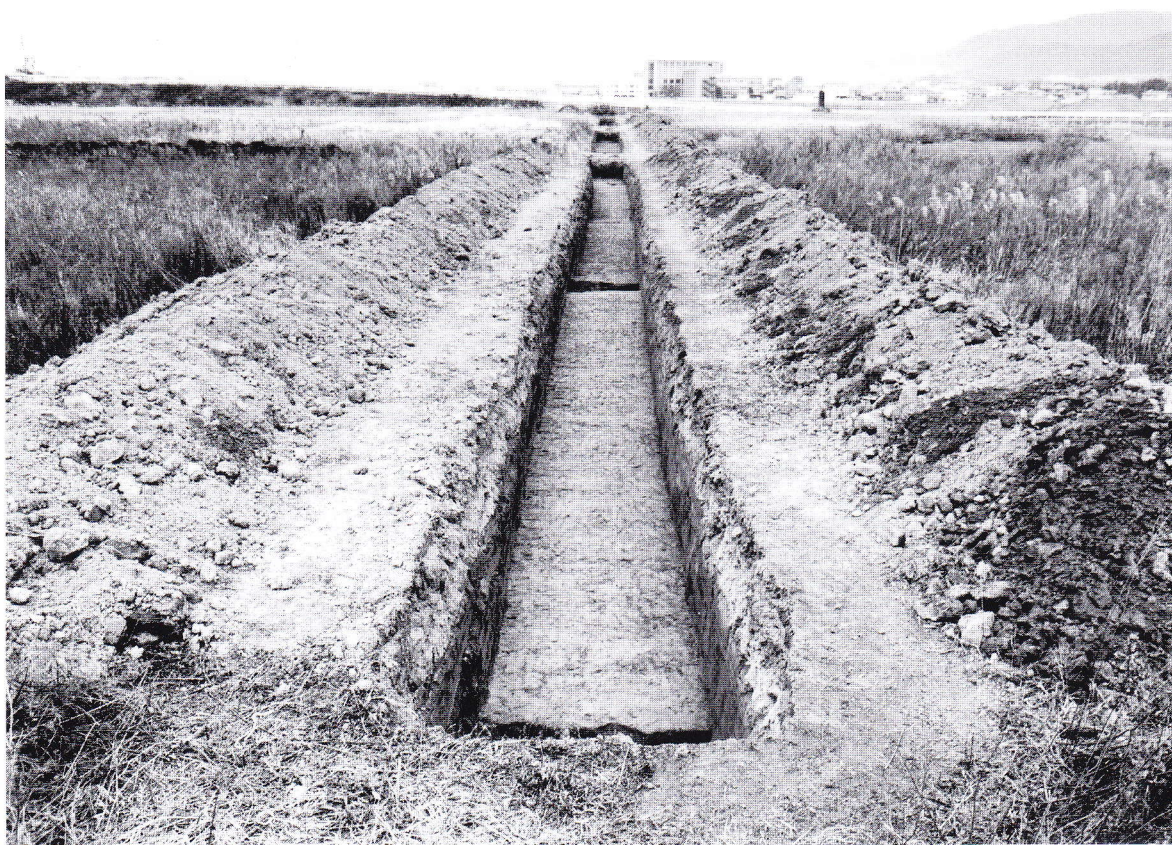
1-4区 SD-1検出状況（西から）



1-2区 東端部北壁土層堆積状況（南から）



1-4区 中央部東壁土層堆積状況（西から）



2-1~3区 全景（東から）



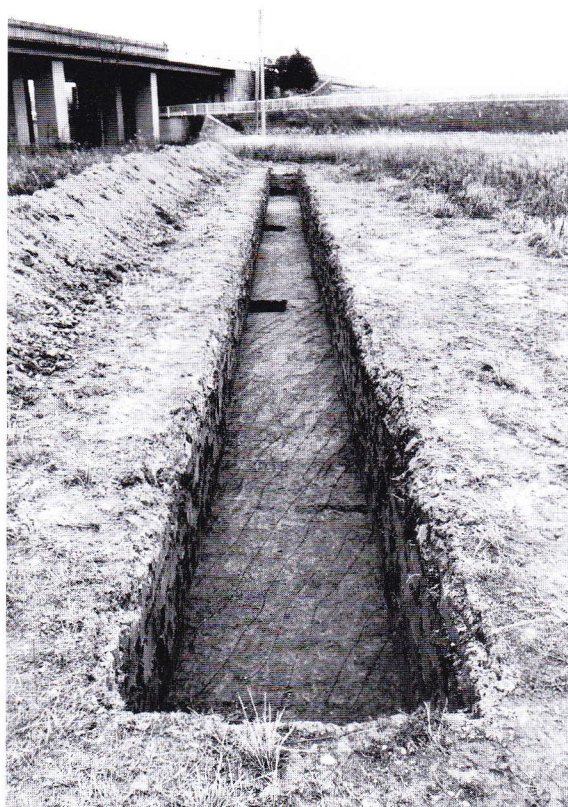
2-2区 全景（東から）



2-3区 全景（西から）



2-4区 全景（南から）



2-5区 全景（北から）



2-6区 全景（北から）



2-7区 全景（北から）



2-1区 東端部北壁土層堆積状況（南から）



2-3区 中央部北壁土層堆積状況（南から）



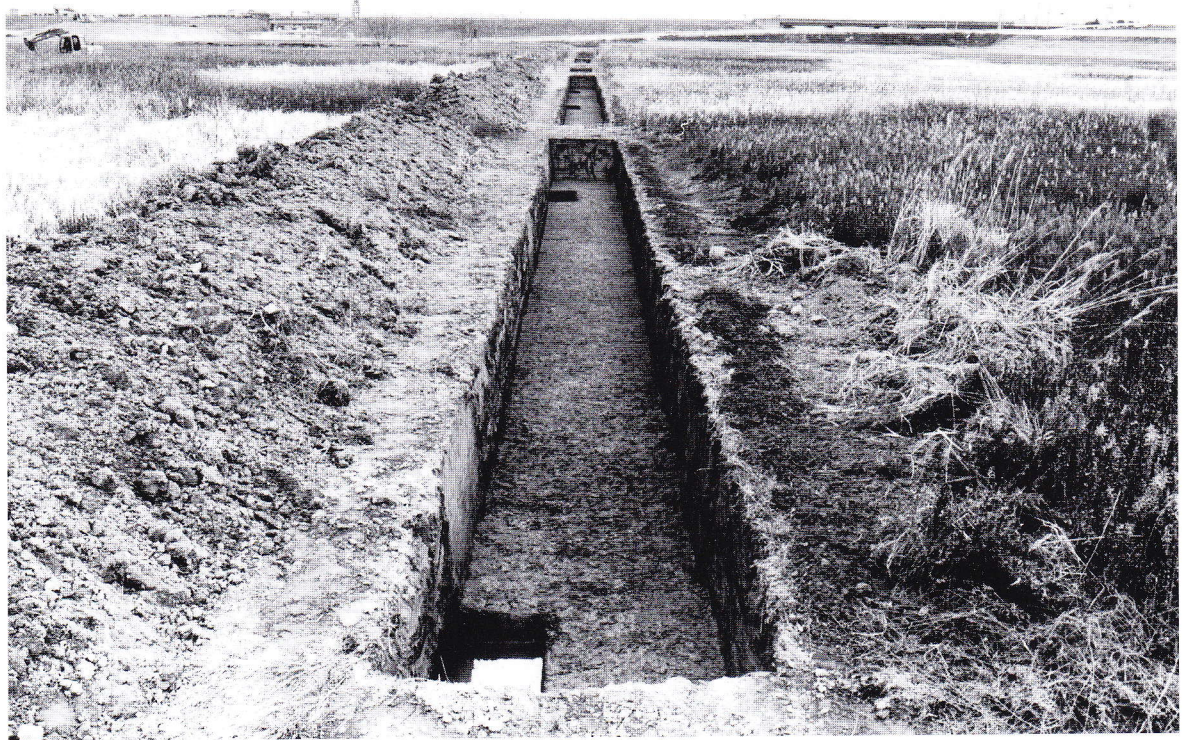
2-5区 南端部東壁土層堆積状況（西から）



2-6区 北端部東壁土層堆積状況（西から）



3-1~5区 全景（東から）



3-1~5区 全景（西から）



3-2区 全景（東から）



3-3区 全景（東から）



3-4区 全景（東から）



3-5区 全景（東から）



3-6区 全景（南から）



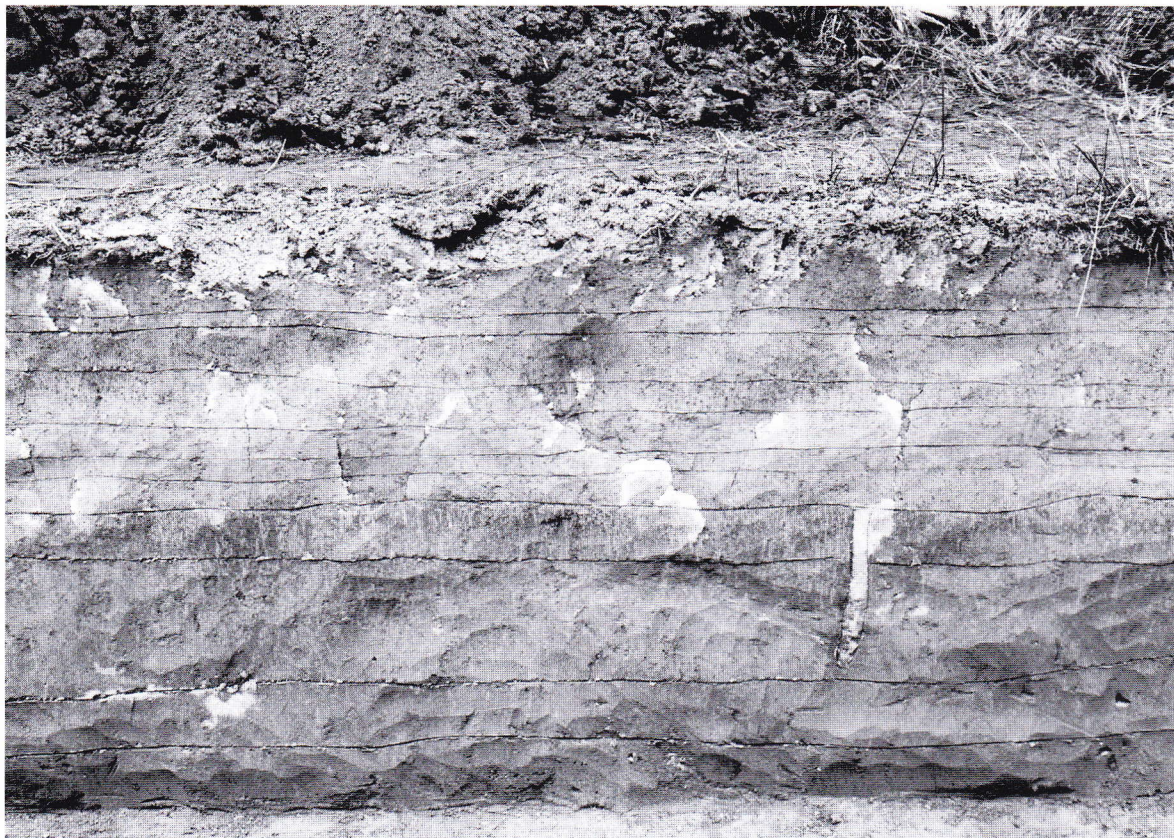
3-7区 全景（北から）



3-8区 全景（北から）



3-9区 全景（南から）



3-2区 東端部北壁土層堆積状況（南から）



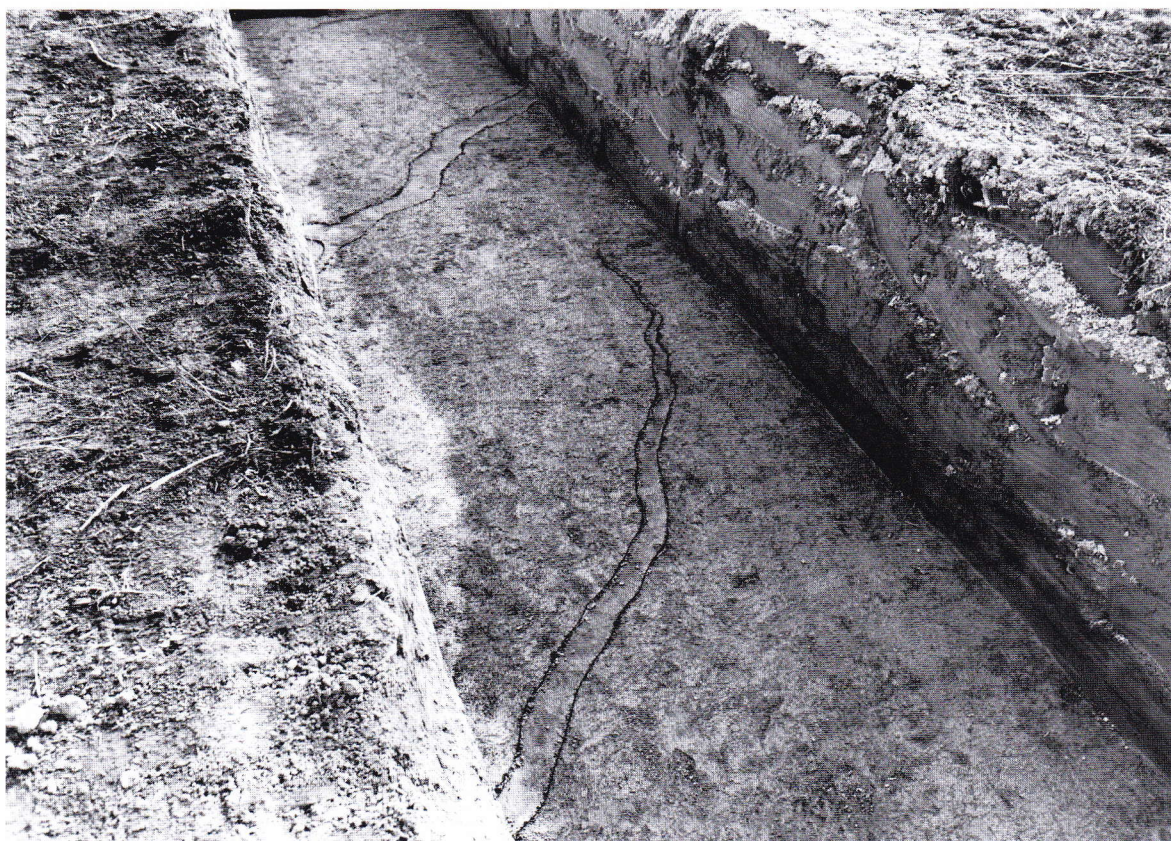
3-5区 東端部北壁土層堆積状況（南から）



3-6区 中央部東壁土層堆積状況（西から）



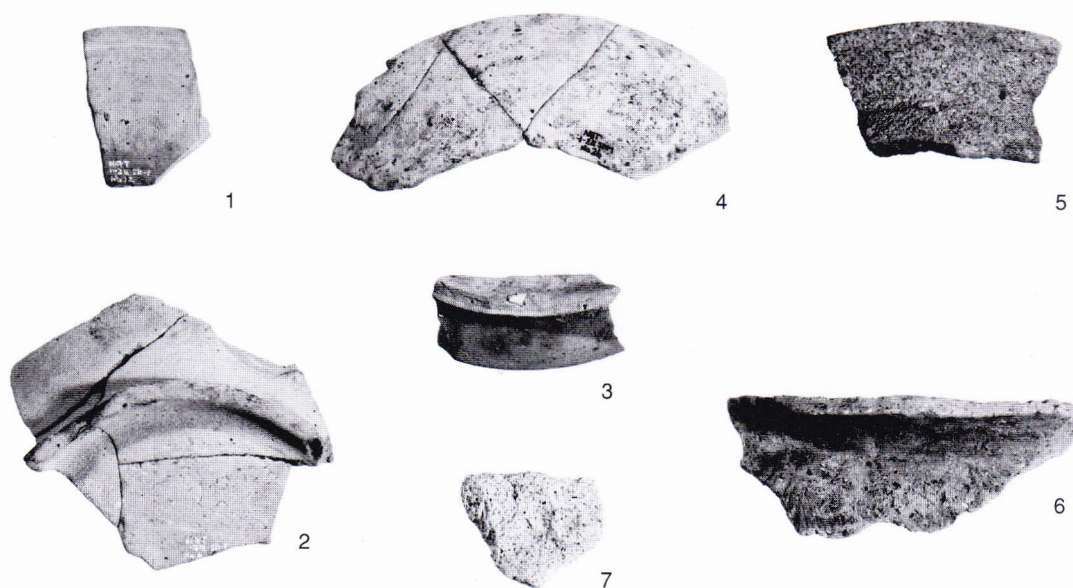
3-8区 北端部東壁土層堆積状況（西から）



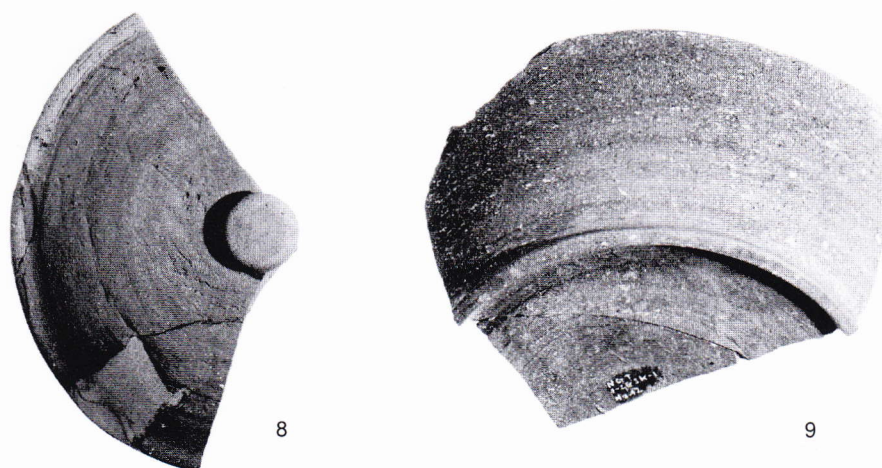
2-7区 噴砂検出状況（北東から）



3-4区 噴砂検出状況（南東から）



土師器 1皿、2・3杯、5・6甕、7製塩土器、黒色土器 4杯



須恵器 8杯蓋、9杯身



調査前の状況（北から）



調査前の状況（南から）



第1区 全景（北から）



第1区 全景（南から）



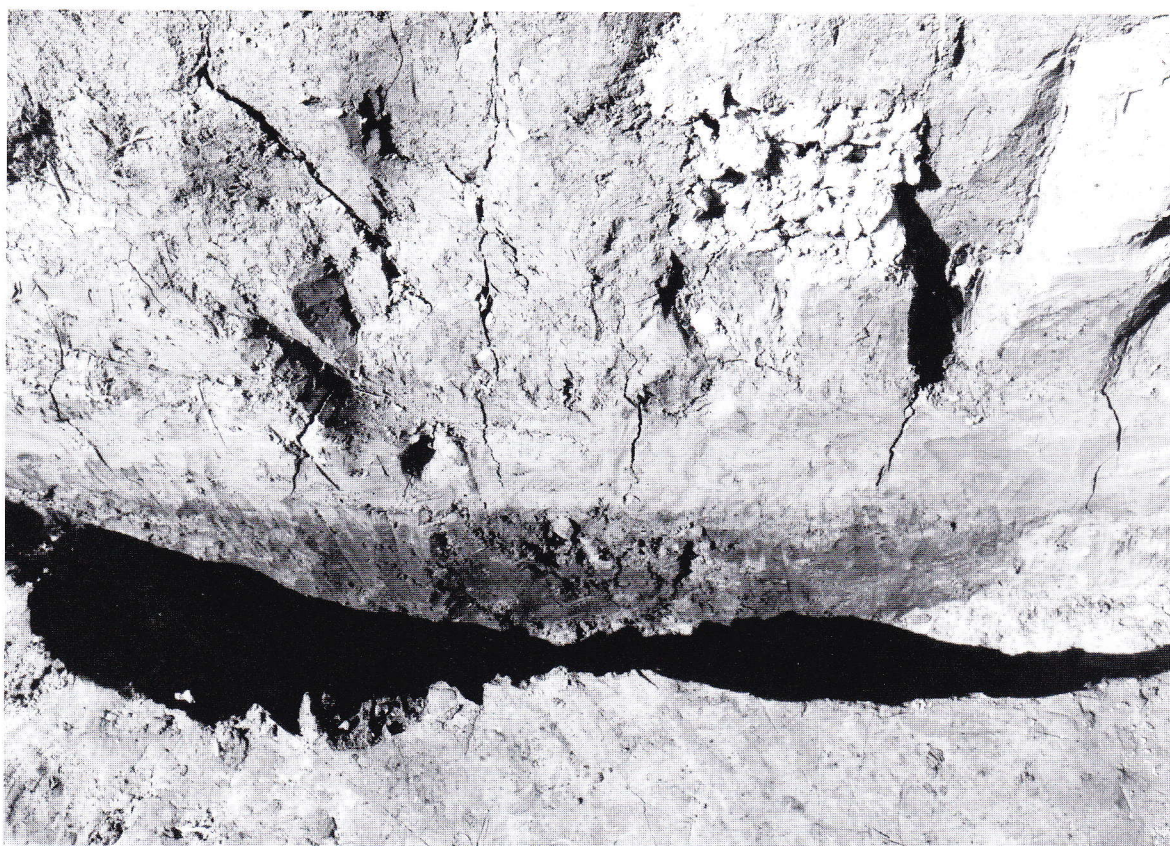
第2区 全景（北から）



第2区 全景（南から）



第2区 SD-1検出状況（東から）



第2区 SD-1土層堆積状況（東から）



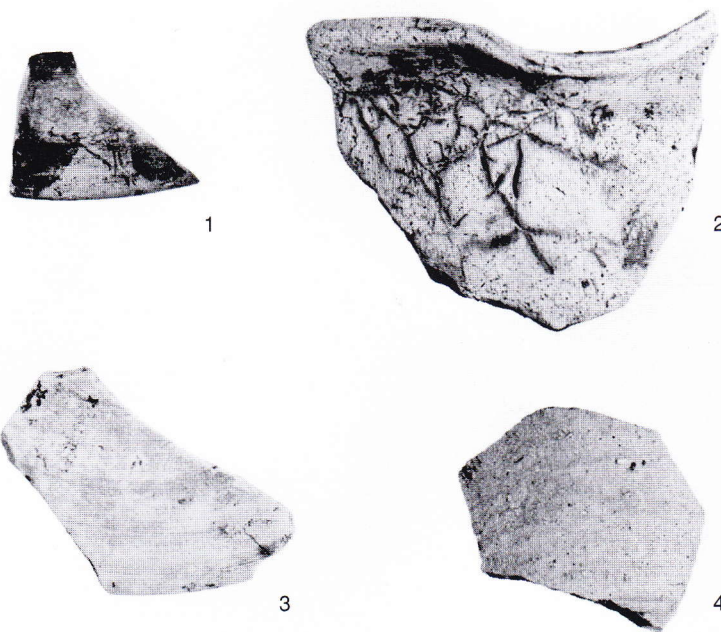
第1区 S28m付近西壁土層堆積状況（東から）



第2区 S54m付近西壁土層堆積状況（東から）



第2区 S80m付近西壁土層堆積状況（東から）



土師器 1杯、2埴、須恵器 3杯蓋、4脚付壺

平成18年3月31日発行

和歌山市内遺跡発掘調査概報

— 平成16年度 —

編集 財団法人 和歌山市文化体育振興事業団
和歌山市西汀丁29

発行 和歌山市教育委員会
和歌山市七番丁23

印刷 白光印刷有限会社

© 和歌山市教育委員会 2006